

に支障なければ前途多望なるへし、但し鱧の盛漁季は恰も雨季に相當するを以て本品出荷に影響する所大なるものあり。

季節と商況に關して元山理事廳の報告書に概言せるものあり、其要を摘録すれば左の如し。

綿布類は五月、八月、十二月、一月即ち陰曆節句前、孟蘭盆、年末等に賣行きよく打綿は十月以降に需用多しと雖も遠隔地に在りては七、八月の頃仕入に來るもの少なからず ▲紡績絲は春夏農業閑散の時期に於て克く捌け ▲米、粟は五月に至れば地方産の品漸く缺乏を告げ、其頃より七、八月頃に互りて南韓地方より輸入せらる ▲小麦は濁酒仕込の爲め春秋に需用多く ▲干鱧は六月頃より出廻り多し ▲食鹽は五、六月の頃銷其他の鹽藏用として賣行き多く、其頃に至れば値段騰貴すと雖も七月に入れば二、三圓方下落するを例とす ▲大豆及明太魚は秋季より翌年五、六月頃まで賣行き多しと雖も其盛季は、大豆は秋季にして明太魚は冬季より春季とす。

金融機關は第一銀行支店(本町一丁目)十八銀行支店(春日町十番地)の二行に過ぎずと雖

も元山里には成興農工銀行の本店あり、第一銀行及十八銀行の各支店は日韓人の金融を圖ると雖も農工銀行は専ら邦人の爲め融通するに止まれり、金融繁忙となるは輸出品出廻時期、即ち八、九月頃より歳末に至る間に於て一月より四、五月最も緩漫なり。

元山居留地在住内田某調査に係る諸貨物陸揚又は濱出しに要する仲仕賃錢表を得たり、聊か参考の資とするに足るものあるへし、左に之れを掲げん。

陸揚賃

明太魚	十五束	、〇二四	練和布、昆布類	一負	、〇五二	干鱧	一負	、〇五八
朝鮮鹽	一俵 <small>(日本柄)</small>	、〇五二	雜品	一箇	、〇二四			

濱出し仲仕賃

明太魚		、〇三三	綿絲	一箇	、〇五二	大釜	一箇	、〇五二
大豆		、〇四二	木綿	一箇	、〇五二	韓錢	一箇	、〇四二
白米		、〇四二	陶磁器	同	、〇四二	小麦粉	同	、〇三二
粟		、〇六二	鐵物大	同	、〇六二	索繩	同	、〇三二

燐寸	〇五二	鐵物小	一箇	〇三三	砂糖	一箇	〇五二
安全燐寸	〇三三	帶鐵	一本	〇〇二	蠟燭	同	〇五二
綿	〇五二	石油	一箇	〇三三	蜜柑	同	〇五二
金巾	〇五二	食鹽	同	〇三三	雜品	同	〇五二

前記貨錢は韓人使用の場合に於ける標準にして日本人を使用せは幾分の不廉を免かれず、尙ほ居留地より元山に至る貨物運賃は白米、大豆各一俵十四錢、韓錢十貫文入一箇七錢、木炭一呎七錢、石油一函七錢、日本鹽一俵六錢、手荷物重きもの一箇二十錢、輕きもの十四錢位にして人肩なると荷車なると大差なし、又居留地より元山里に至る腕車賃十二錢を普通とし雨雪等にて道路泥濘なるときは二十錢を要すといふ。

本津貿易の主要品は前示の如く大豆及海産物なるを以て海産の取扱を爲すもの少なからず、而して干鱈の如き、干牡蠣の如き、大抵仕込を爲し各一手に買収する方法を採れり、其買収區域は本道沿岸一帯より江原道沿岸に渉る、又北韓及江原道沿岸を涉漁する潜水業者の如き其本根據は即ち本津なり、隨て本津には斯業者

の組合あり。

本津は斯の如く水産物の集散地なるに拘はらず未だ魚市場の設立なし、故に生鮮魚は元山里に輻輳する日韓漁船又は出買船より魚商人購入して一般の需要を充たせり、之れを本津の一大缺點とす、然れども近頃其設立を計畫するものあり、日ならず開場を見るに至るへし、魚價は元山里に於て其地客主取扱の平均値段を掲記すへし、之れを以て本地の魚價と看做し支へなし。

縣面

北西赤田面に、西南より東に亘りて安邊郡に接し、北方海に面して狭長なる半島を斗出し、永興灣を扼す、葛麻半島即ち是れなり、此の如くにして本面の海岸線は赤田川の注口より東方に進み、葛麻半島を一周して浪城江口に至る、故に其延長八裡に達し、本府海岸線の略は半を占む、本面臨海部落を列擧すれば元山里、銘石院、斗南里、斗方里、斗山里、連島里、葛麻洞、城北里等あり、又屬島に薪島あり。

元山里(元山津)元山港に於ける邦人の部落にして上里、中里、下里に大別せられ、各

元山里

里も亦數洞に分たる、其一端赤田川を挟みて元山居留地と相對し、海に沿ふて遠く東に延び、長さ一里餘に及ぶ、戸口は之れを隆熙元年末の調査に見るに戸數一千〇二十八、人口一萬三千五百十八を計上す、其多數は商家にして金融機關には元山居留地に於て一言したる如く成興農工銀行本店あり、又客主七十餘戸、仲立業者一百八十戸あり、而して其仲立業者を大別すれば生魚仲立二十、牛馬仲立二十五、雜貨仲立一百二十なるを見る、以て其商況の一斑を窺ふに足るものあるへし、此の地元と日本商人の居住者あらざりしか近時其發展に伴ひ諸所點々散在して邦人と雜居するもの多きに至れり。

客主七十戸中主なるもの二十戸あり、左の如し。

田宅保	金元輯	趙貞煥	金元略	南廷善
朴昌淳	秦均	洪聖範	李敏夏	崔壬吉
金政敏	貝汝天	崔廷學	李明輔	林子天
朴仕益	李肇勳	李喆玉	鄭雲弼	李承烈

此等客主は孰れも何品たるを問はず取扱ふと雖も各店自ら主とするものなき

にわらず、各客主か徴する手数料(問屋口錢)及仲立人か客主より受くる手数料各店共に一定せり、左に其梗概を表示せん。

品名	數量	問屋		品名	數量	問屋	
		手数料	仲立人			手数料	仲立人
明太魚	二千尾	〇.〇六	〇.〇六	鹽鯧	二十尾	〇.〇七	〇.〇一
鹽鯧 (沈麻魚)	百尾	七〇〇	二〇〇	乾鯧 (乾加魚)	二千尾	四〇〇	四〇〇
鹽鯧 (沈方魚)	百尾	一四〇〇	四〇〇	乾鯛 (乾刀魚)	二千尾	五〇〇	一〇〇
蛸 (文魚)	二十錢每	〇.〇二	〇.〇六	粟	一俵	一〇〇	一〇〇
海參	百斤	一〇〇〇	三〇〇	麥	同	〇.八〇	〇.二〇
干鱈	百斤	一〇〇	一〇〇	小豆	同	〇.八〇	一〇〇
鮑	二十錢每	〇.〇三	〇.〇六	大豆	同	〇.八〇	一〇〇
蛤	五十連	二〇〇	〇.四〇	蕎麥 (木米)	同	〇.一七	〇.〇三
明太魚卵	一齋	〇.〇三	〇.一〇	葉煙草 (南草)	一駄	六〇〇	二〇〇
海鼠	二十錢每	〇.〇八	〇.〇二	刻煙草	同	六〇〇	二〇〇

土	木	虎	鹿	獺	狗	栗鼠皮	米	砂	甲銅	昆	同	和布	生
器	器	皮	皮	皮	皮	(青皮)	俵	斤	(甲山銅)	布	(日本製)	(日本製)	魚
同	同	二十錢每	同	同	一枚	百枚	一	十	百	二十錢每	一	一	二十錢每
〇〇八	〇〇八	〇三〇	二四〇	四〇〇	〇二四	七〇〇	二〇〇	四〇〇	四〇〇	〇〇〇	三六〇	〇六〇	〇〇〇
〇〇二	〇〇二	〇〇六	〇〇四	一〇〇	〇〇四	二〇〇	一	一	三〇〇	〇六〇	〇六〇	〇〇〇	〇〇六
其他支那反物	支那緞子(木質絨)	綾織木綿	天竺木綿(廣木)	金巾(唐木)	白木綿(白木)	麻布(下)	狸皮(山皮)	狐皮(赤皮)	猿皮	牛皮	驢	馬	牛
同	同	同	同	一	同	百	同	同	一	百	同	同	一
同	同	同	同	正	同	正	同	同	枚	斤	同	同	正
至	〇〇六	〇〇八	〇〇八	〇〇八	二〇〇〇	一〇〇〇	〇〇〇	一〇〇	〇〇〇	四〇〇	六〇〇	八〇〇	一〇〇〇
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇

同	麻布(上)	麝香	鹿角(角)	蜂蜜(黃)
(中)	一	一	同	一
百	正	筒	斤	斤
三〇〇〇	〇〇〇	二〇〇	〇二〇	〇四〇
三〇〇	〇〇〇	〇六〇	〇〇〇	〇〇〇
兩換(換錢)	馬蹄銀	其他雜貨	魚網	魚網
二十圓每	一筒	一筒	二十錢每	二十錢每
一	一〇〇	一〇〇〇	六〇〇	〇〇九
一	一	一〇〇	一〇〇	〇〇〇

備考 表中仲立人手敷料を記入せざるは主として對外人の取引に係るものなり、而して外國人に對する取引は仲立人を用ひず客主が直接に取引するを以てなり。

前表は以て此地客主の業態を窺知するに餘りあるへし、而して此地に於ける各客主か毎一年間に取扱へる水産物の價額幾許なるかは未だ確かなる統計を得ずと雖も近頃元山居留地に魚市場設立を計畫し其設計基礎の爲め同地在住内田某等の調査したる概算表を得たり、元より正確を保し難しと雖も聊か參考の資と爲すに足るものあるへし、左に之れを掲げん。

負三錢なり、但し石油、綿、日本食鹽等は二箇を以て一負とし、明太魚は一千尾を以て一負と爲す。

此地にて漁を營めるは中里に於ける三洞及下村なり、前者は魚箭一座、後者も同三座を有す、孰れも中里の地先きに建設せられ、春季に鯧、夏季に鯔を漁獲す。

銘石院里(トウシヤウ)元山里の東に接續す、戸數二百五十八、人口八百二十九、内漁を營むもの十二戸にして、漁船十二隻、漁網四統、魚箭八座を有し、漁採物は鯧及鯔を主とす。

斗方里(トウハツ)元山里の東方十八、九町にあり、南方に小丘を負ひ、前面は砂濱なるも、較や水深を有して、著舟に宜し、戸數十六、人口七十餘、漁を專業とするもの二戸あり、て漁船二隻、魚箭二座を有す、漁採物は前各里に同じ。

斗山里(トウサン)斗南里(トウナム)元山津の南東隅に在りて、共に一部落を爲し、中央に一小溪川を通す、其西方なるは斗山にして、東方なるは斗南なり、斗山里の西端には小丘延ひて海に枕むと雖も、斗南里以東は平地廣衍して、浪城江口にまで及び、北方は葛麻半島の連島里に至るの間、渾て平坦なり、隨て其沿岸は葛麻角に至るまで砂濱連

銘石院里

斗方里

斗山里
斗南里

連島里

葛麻浦

續す、戸口は前者戸數四十二、人口一百七十餘、後者戸數九十七、人口六百三十内外、通して戸數一百三十九、人口八百餘を算す、而して前者は漁戸七、漁船二隻、魚箭二座、後者は漁戸十九、漁船十九隻、魚箭十九座を有して、鯧、鯔の漁獲甚た甚かなり。

連島里(トウシマ)斗南里の北方、葛麻半島の中程に位して、北方に小丘横はり、西方元山津に沿ふて、元山居留地と相對す、其間約二裡あり、戸數六十六、人口二百三十餘と稱す、其内漁を營むもの十一戸、漁船十一、漁帳七、魚箭四座あり、此地漁網の産地として知らる、住民編網を業とするもの少なからず、日本漁夫も亦其供給を仰ぐといふ。

葛麻浦は葛麻角の西側に於ける一小灣にして、灣口約一百間、灣入一百五十間餘、水深五、六尋に達して、恰も天然の船渠を爲せり、巨船を修繕するに、適地として、夙に紹介せらるゝ所なり、本浦の北側には人家十數戸あり、連島里の一部にして、住民は漁に依りて生を營む。

葛麻角の北端には燈竿を建設せらる、其明弧は北三十三度、東より東南西を経て北六十度、西に至る二百六十七度の間とし、光達距離は八裡なり、麗島燈臺の燈火と

城北里

相待つて永興灣口を指示し、又長徳島燈臺と相待つて元山港の錨地を照輝す。
城北里(성북리)東面の東端浪城江の河口に臨む、戸數一百二十餘、人口五百七十を算する大部落なりと雖も漁は振はず、漁戸は僅かに三、四戸にして漁船三隻、地曳網三統を有し春季に鯨、夏季に鱈、秋季に小鯖を漁獲す、此地より西方斗南里に至る約一里、一帯平地にして所々に荒蕪地あり。

薪島

薪島(신도)葛麻角の東北方に浮へる三島の總稱なり、北方沖合に於けるもの最も大にして東西に長く、南北に狭く、周回約三十町、之れを單に薪島と稱し、他の二島は其南方に浮ぶ、西方なるもの大なり、之れを大薪島と呼び、東方なるを小薪島と名く、薪島及大薪島間の最近距離は三百五、六十間、薪島及小薪島間の最近距離も亦略は同様に於て三島殆んど鼎足の勢を爲せり、其中間は水深八尋に達して無碍なるも大、小薪島の間は暗礁連續するを以て通航し難し、大薪島より葛麻角に至る最近距離は一漚二漚なり、薪島には人家あり、又耕地ありと雖も他の二島には住民なし、薪島に於ける部落は島名を採りて薪島里と稱し、南側に在りて戸數約三十戸許とす、全島松樹茂生して風致に富む、四圍海鼠、鮑の棲息饒多なりしも今は其産多からず。

近海は又鯛其他魚類の好漁場として名あり、然れども此島は渾て永興灣防備隊の所轄に歸し漁業禁止區たり來漁者注意を要す。

附、永興灣内に於ける鯨漁業に關して大韓漁業組内田某の報告を得たり、多少参考の資と爲すに足るものあるへし、依て左に其要を摘録せん。

漁場は徳源、文川、永興、三郡の沿岸一帯及灣内に浮へる諸島にして毎年二月より三月上旬に互り漁具を布設す、而して其場所は從來の慣行上土地と等しく賣買せらる、之れを賣買するには防塵に在りては其建設に要する材料及漁船等をも其代價に含めるを普通とし、大概一百五十回乃至四百回なり。
漁期は三月上旬より四月下旬迄にして釜山、理日等に連るること約二箇月なり。

漁具は防塵、擧網、揮羅(曳網)、角網、狐網(小巻網)又猪口網と云ふ、擧網等とし、角網以下は日本漁夫の使用漁具に係る、今隆熙三年(明治四十二年)の漁期に於ける各漁具布設數大率左の如し。

防塵……………三二六 擧網……………二四 角網……………九 擧網……………二

第一章 成鏡道 (南道) 第九節 徳源府 縣面 薪島

瓢網.....一

漁獲高は正確なる統計を得ず、雖も昨隆熙二年の成績を概算するに大凡左の如し。

防糜	三〇〇 ^冊	使用漁夫	三人	瓢網	六五〇 ^冊	使用漁夫	五人
舉網	五〇〇	同	五人	壺網	六〇〇	同	二人
角網	八〇〇	同	八人				

魚價は毎年多少の差あるを免かれず、雖も昨年に於ける平均を見るに初期に毎二十尾三十錢、盛流期に同十錢、終期に十五錢なりき。

第十節 安邊郡

沿革

本と高麗の比列忽那(一名新羅州)と爲し、又郡と爲して朔庭と稱す、高麗登州に改

境域

め、後ち都護府を置き、安邊と呼びたり、本朝これに因り成宗二年陞して大都護府と爲せしか、復た降して都護府とし、尋て建陽の改革に郡と爲し、今に至る。
本道最南の地にして、北方文川郡及徳原府に、西北の一部平安道に、西より南に至る一帯江原道に接し、北の一部僅に海に瀕す。

地勢

本郡の地は脊梁山脈變位部の一端に當れるを以て、山脈の錯綜甚たし、雖も其沿海附近に在りては比較的緩傾斜地を現出し、又其中央を貫流せる浪城江の沿岸には較や面積ある平地を餘せり、而して其地勢は西南に隆起し、北東に低下す。

前示の平地は所謂安邊平地にして、南北三里餘、東西約一里半に達し、本道有数の農産地たり、而も此平地に續きて、未墾原野の較や大なるものあり、海岸及元山居留地を距る遠からず、加ふるに京元街道に接して、運輸交通共に便なれば、其た屬望すへきものならん。

河川

河川數條あり、孰れも前示の平地を北走し、聚りて一河口を成し、海に入る、河口の東方に浪城津あり、故に之れを浪城江と通稱す、諸川中大なるは江原道の伊川郡に發し、安邊邑の西方を通過するもの是れなり、本川は氾濫の結果同邑より下流分合

一再に止まらず、遂に二派となりて開口す、之れを南大川と呼ぶ、河口は幅二百間許に達すと雖も堆洲横はり河身十間餘に過ぎずして水も亦淺し、然れども河内に入れば較や深く河口より四里許の間舟楫の便を有し漁利も亦少なからず、南大川の西方に方り德源府界に發源する蟹川、山崎川の二川あり、共に東北に向つて下流し南大川に合す、此二川は孰れも一溪流に過ぎずと雖も灌溉を利すること却て南大川に優るものあり。

海岸線

海岸線は極めて短く僅に浪城江口附近に止まる、沿岸渾て砂濱にして一の港灣を有せず、漁村浦としては唯た浪城津あるのみ。

屬島

屬島には麗島及黃土島あり、麗島は永興灣口に浮へる諸島中の大なるものにして其名夙に聞へし。

安邊邑

郡邑安邊は古名を淺城又登州と呼ぶ、安邊原野の南端南大川の左岸に位して河口を距ること約三里なり、元山より江原道の海岸に通ずる重要道路の衝にして元山に至る五里、江原道の歙谷に至る六里半なり、郡衙の外に財務署、巡查駐在所、郵便所を置かれ日本商人も亦二、三居住するものあり。

交通

交通は元山を主とす、京、元街道は安邊平地の西側を縦貫し、江陵街道は其中央を横斷し、元山に至る近きか故に較や便なり、然れども西北方なる山地に入れば道路險惡にして往來不便を免かれず、京、元街道は江原道界を爲せる鐵嶺を通過す、同嶺は本街道の要所にして古來難關と稱せらるゝ處、江陵街道は海川橋附近に於て京、元街道より分岐し邑下を過ぎて飛雲嶺を越へ江原道に入る、海運は直接の便なしと雖も元山を距る近距離にして道路平坦なれば甚しき不便を感せず。

通信

通信機關は安邊邑に一郵便所を置かるゝに過ぎずと雖も元山より歙谷邑に至るものと共に月十五回交互に往來す、故に邑下においては通信上甚しき不便を見ず。

物産

物産は農産を主とす、種類は米、粟、稷、蜀黍、大小豆、小麦、麻、瓜、哇、薯、野菜等にして就中大豆の産多し、又安邊梨は咸興梨と等しく著名なり、畜産には生牛を出すこと稍多く、鑛産には龍池院附近の銅、砂金較や聞ゆ。

水産物は臨海面狭小なるを以て其産上らず、然れども永興灣に浮へる麗島は著名の漁場にして浪城江も鮭其他の淡水魚を産して較や知らる。

行政區は十三面なり、而して海岸を有するは下道面の一あるのみ、然れども新里、世清、求春、上道の四面は浪城江に沿ふて多少水産に關係あり。

下道面

本郡唯一の臨海面にして東方江原道に、南方上道面に、西方德源府に屬する縣面に接す、其沿海は浪城江の河口附近に止まり、臨海部落としては浪城津唯一あるのみ。

浪城津(浪城津)今は一漁村に過ぎず、雖も昔時浪城浦營を置かれ水軍萬戸の地たりしなり、浪城江口の東方浪城岨突角の西側南隅に、位す、開放せる砂濱なるも浪城岨の突角は東方を保障するを以て漁船を繋ぎ得へし、戸數六十五、内漁を營むもの二十四戸、漁船六隻を有し、流網三統、揮羅二統、擧網六、魚帳二座あり、而して魚帳は倉洞、後津及浦頂に設置す、漁採物は春季鯧、夏季は鱈、秋季鱈、鯖等とし、鯖は沖合七八里に出漁し、漁獲較や多し、渾て元山又は安邊邑に送りて販賣す。

麗島(麗島)前概示したるか如く永興灣口に浮へる諸島中の大なるものにして周

同一里二十五、六町あり、島の最高點は稍東方に偏して三百七十六呎に達し、松樹茂生して遠望濃黒色を呈す、島の北側より東側に至る一帶險崖を爲し、其附近岩礁錯落すと雖も西側及南側は緩なる彎狀を呈して海岸砂濱なり、人家は西側の平地に散在して戸數二十三、人口一百十餘あり、孰れも漁を以て生業と爲せり、漁船三隻、流網、地曳網數統を有し、鯧、鯖、鯛、鱈、鰈、魚賊等を漁獲す、本島附近是等魚類の回游艘多にして、鯛、鯖及鱈の如きも地曳を以て漁獲すること珍らしからず、殊に鱈の漁期に入れば漁獲夥多の爲め網を破損すること數次に及び、永興灣に浮へる諸島中最も有望なる漁場なりとす、本島は水産上此の如く重要なものならず、其南東角には燈臺建設せられ航海者に於ても亦甚た重要なものたり、故に本島は一小島なるに拘はらず、其名夙に知られき、本島燈臺の燈火は連閃白色にして毎十秒を隔てて五秒間に三閃連光を發し、明弧は南三度四十分西より西北東を経て南八十六度三十分東まで、二百六十九度五十分間に及び、光遠距離は二十一哩なり。(第一章 第七節 浪城江)

るに足らざるなり ▲漁期は鮭七月中旬より十一月末まで、鱒三月二十日頃より九月末まで、鱒いだ二月、三月及九月、十月とす。

鮭の漁場は江口を溯ること約三里安邊邑附近より其上流世清面に屬する南川江里附近にして殊に同里附近に於て漁獲多し △漁法は第一輯に於て述べたると大差なし、但し本江に於ては河を横斷するに漁網三枚を以て三段と爲すの差あるのみ、而して其魚を捕ふるには第三段の網即ち最も上流なる遮斷網と第二段の網との間に於てす ▲税金は從來毎年競争入札に附せられしを以て年に依り多少の差ありと雖も大抵一百圓許なり、今隆熙三年本漁に従事せるものは一百二圓にて落札したりといふ。

漁獲高は多獲の年には二萬尾に達することありと雖も亦四、五千尾なることあり、然れども里人の言に徴して從來の成績を窺へは大抵一萬尾内外を普通とするもの、如し ▲いだは春季に於て其産饒多なり、漁獲物は多く生鮮の儘出買商人に賣渡し、又は元山、安邊邑に送りて販賣す。

第二章 江原道

本と畿道の地、漢に屬して臨屯と稱せられ、高句麗起りて之れを併す、新羅を経て高麗に至り、成宗十四年境土を分ちて十道と爲すや、和州(今成鏡道)、涇州(今本道江)、等嶺背一帶の郡縣を以て朔方道と爲し、仍ほ春川等の郡縣をこれに隸屬せしめしか、明宗八年に至り朔方道を改めて沿海涇州道と稱し、春川等の郡縣を分離して春川道と爲し、又東州道と名けたり、元宗四年涇州を江陵道に、東州道を交州道に改め、又忠肅王元年交州道を淮陽と稱し、恭愍王五年に至り江陵道を江陵朔方道に改め、其六年舊名に復し、辛禡十四年交州道と合せて交州江陵道と改稱し、本朝太祖四年に至り始めて江原道と號し、以て今に至れり。

本道の地は北緯三十六度三十九分乃至三十九度十分、東經百二十六度四十一分乃至百二十九度二十九分間に位して、北は成鏡南道に、北西より西南に至る間は黄海、京畿、忠清、慶尙の諸道に接し、東方一帶日本海に沿へり、而して其廣袤は南北の最長六十四里、東西廣き所三十八里に迫ひ、面積一千六百九十三方里に達せり。

脊梁山脈は海岸に近く海岸線と並行して北西より南東に走り以て本道を縦貫せり、故に本道の地は此天然區劃の東西に斜面を形成すると同時に各地形に著しき相違を示せり、乃ち東側の地は大山脈海岸に逼迫するを以て狹長なる帶地を爲すに止まり、而も一帯の傾斜甚た急にして且つ河流に大なるものあらず、之れに反して西側の地は海岸を距ること遠く地盤一帯に高きか故に傾斜東側の如く急ならず、而も脊梁山脈の支脈みな西方に駢走するを以て其間に許多の水流を通し、稍大流を爲すものあり、然れども元と山岳地なるを以て地勢概ね峻險にして平地甚少、た狭小なり。

此の如く本道の地は分水嶺に依りて東西に區劃せらるるか故に之れを大別して東側の斜面を嶺東と稱し、西側の斜面を嶺西と呼ぶことあり。

山の著名なるものは第一輯に一言したるか如く金剛、五臺の群峰あり、共に本邦第一の名山なり、就中金剛山は其群峰一萬二千の多きに達し諸峰悉く皆幽奇怪偉ならざるはなく、變幻詭曲造化の妙山中に蒐めて遺さず、眞に海内無比の靈地といふへし、山は一に皆骨の名あり、怪巖奇石、峭々屹々たるを以てなり、又楓嶽の稱あり、

楓樹多きを以てなり、されば秋高く其葉紅を呈するに至らんか峻嶒峭壁の間紅綠參差して宛然圖畫の如く美觀譬ふるにもあらず、山中梵刹都て五十餘寺、中に就き表訓、正陽、長安、摩訶、衍普、德窟、楡岾名刹を以て聞ふ、其中心を正陽寺とす、故に此名あり、其寺は各寺中最も高所に建てられ且つ遠望の適地なり、此に登りて四顧すれば一萬二千の群峰みな目に入り雄大の光景形容に辭なく壯觀の極覺へず讚嘆の聲を擧ぐるに至る、但言に金剛山を見ざるものは風景を語る可からず、金剛山を知らざるものは山を談する勿れといふ、一遊せば此語人を欺かざるを悟るへし、洵に此山は全國一の靈山なると同時に東洋一の勝地として誇るに足るものあり、金剛山に探勝を試みんと欲せば海路長箭洞に至り、金剛外山を越へて到るを便とす。

五臺山も亦靈地なり、裂峰五、滿月、麒麟、長嶺、象三、智爐是れなり、其他大關嶺あり、本嶺は俗に大嶺と稱す、本道著名の高峰なり、山腹九十九曲、京畿、忠清等西方諸道に於ける各流は概ね此嶺に水源す。

前示の諸嶺は半島地體の分水嶺にして東岸に近く駢走するか故に隨て水流の主なるものは皆嶺西に在りて嶺東の地には一の大流を見ず、嶺西を流るるものは

臨津江、漢江、錦江等の上流なり、嶺東に於ける主なるものは高城の赤壁江、江陵の南大川、三陟の南川江等なり、何れも急湍激流にして舟楫の便を有せず、其嶺西を流るるものと雖も悉く皆上流性にして僅に中流性を顯す所あるのみ、故に航運に利するは殆んどあらず。

沼湖

沼湖は嶺東の地沿海所々に散在す、其主なるものを列擧すれば左の如し。

歙谷郡 花河浦 待中湖

通川郡 金鵬浦 鹽田湖 禾津浦

襄陽郡 青幸湖 雙湖 庚湖

杆城郡 花津湖 松池浦 康浦 永郎湖

江陵郡 香湖 鏡浦 楓湖

海岸線

海岸線は南北の延長約二百二十四哩に亘ると雖も全岸殆んど一直線を以て劃せられ港灣少なく、而も島嶼極めて罕なれば航海不便を感ずること甚たし、殊に冬期にありては北西風連日吹き荒み、海波高くして漁船航行に耐へ難し。

港灣

港灣の最良なるは北部に於ける長箭灣とす、これに亞くは南部なる竹邊灣なり、

其他中部に於ける巨津、注文津、臨院津、最北なる致弓等第二流に屬し、其第三流なるは鵝也津、東津、安木(南項津名)、安仁津、建南、墨湖、汀澤津、長樽里(湖一名莊)等なり、孰れも漁船の碇泊に適し、年々日本漁船の來漁するもの少なからず。

島嶼

島嶼は國島、牛島、猪島、荒島、松島、竹島、無路島、徳山島、卵島等ありて、就中國島大なり、竹島及無路島は箭竹の産地として名あり、鬱陵島は元と本道の所屬なりしも交通の關係上今は慶尙南道の所轄となれり。

氣候

氣候は土地概して高きか故に暑は凌ぎ易しと雖も寒は酷烈なり、然れども山岳重疊せるを以て朔風凜烈たるにあらず、而して嶺東の地に在りては海風の調和に依りて寒暑共に溫和なり、本道の地未だ測候所を設けられず、故に氣象に關して詳説する能はずと雖も雨、雪、霜、海霧及四季に於ける最多風向等に就て概説すれば左の如し。

雨期

雨期は地方に依りて大差なく、概ね七、八月の兩月に涉る、但し嶺東南部の地に在りては較や早く六月頃より初まる、雨期中は恰も鱈の漁期なるを以て降雨の多少は干鱈の製産に影響す。

第二章 江原道 概勢

初雪は嶺西に在りては十月下旬に見ると雖も、嶺東に在りては十一月下旬を普通とし、其南部地方にては歳に依りて十二月上旬に見ることあり、終雪は嶺の東西に大差なく三月下旬に及ぶ、然れども嶺西の山地に在りては五月に至り尙ほ殘雪を見る、積雪は嶺東に在りては一尺内外を普通とし、二尺を超ゆるは稀なるも、嶺西に在りては二、三尺を普通とし、其北部にては五、六尺に達することあり。

霜は嶺東にては十月上旬又は中旬に初まり、二月下旬又は三月下旬を終とすれども、嶺西にては九月中旬又は下旬より三月下旬又は四月上旬に及ぶを例とす。

霧は三月、八月の間に多く、殊に四月及七、八月の頃最も多し、然れども観測せられたるものあらざれば其回数を示すこと能はず。

近海に於ける風向は晩秋より春季四月頃までは北及北西風多く、五月より九月に至る間は南及南東風多し、而して北及北西風は風力猛烈なるを常とす、これ沿海冬季の航海殊に困難なる所以なり。

沿海寒暖二派の海流を通せるは第一輯第一編第九章に一言したる所なり、茲に再説すれば暖流は春季四月頃より漸次幅員を増し、盛夏に至らば膨大の極に達し

て沿岸附近にまで及ぶ、而して秋季十月下旬より漸次縮小を初め、嚴冬に至りて其跡を歛む、暖流縮小して其跡を歛めんとするや寒流これに代りて顯はれ、寒候に於て極度に達し、翌年三月に至り復た暖流に支へられて消滅す、此の如く寒暖二流は互に消長して沿岸を洗へり、以て沿海各種魚類に富めるや知るべきなり。

潮流の方向は一定ならず、或は南に向つて流れ、或は北に向つて動き、時には數日間同一方向に流走し、時には一日中に於て數回南北に轉換することあり、其速度も亦一定せず、或は一時間一漚なるあり、或は纔に微動するに過ぎざることあり。

潮汐の差は甚だ寡少にして冬季に五、六寸、夏季に一尺五寸内外なるを普通とす、然れども東風強吹せば昇潮を増し、西風猛烈なれば退潮多きを見る、故に斯る場合には其差二尺五寸内外に及ぶことあり、左に海圖に依りて沿岸二、三の箇所に於ける観測を表示せん。

地名	朔望高潮	大潮升	小潮升	小潮差
長箭洞	二時五六分	一 $\frac{1}{16}$ 呎	一 $\frac{3}{16}$ 呎	一 $\frac{1}{16}$ 呎
注文津	三時一分	一 呎	一 $\frac{1}{16}$ 呎	一 $\frac{1}{16}$ 呎

第二章 江原道 概勢

竹邊灣—三時—三分—

一 呎

— $\frac{1}{2}$ 呎—

— $\frac{1}{4}$ 呎

平地

本道の地分水嶺の東西に斜面を有すと雖も概ね山地に屬し、平地狭小なるは前
一言したる所なり、茲に主要平地を列擧すれば嶺西にては春川、鐵原、平康各附近の
平地、嶺東にては欲谷、通川、高城、襄陽、江陵各附近の平地なるへし、而して嶺東に於け
るものは大概海岸に互れる沖積層なり、其中廣きものは通川平地にして附近一帯
の耕地面積七千八百町歩と稱す、然れども灌溉の便を缺きて水田少なく殆んど畑
なり、他の二平地は共に面積一千町歩に過ぎずと雖も河流に沿ふて地味稍良好各
其上游に於て割合に廣き水田を見る。

道路

本道の主要道路は(一)京元街道、(二)春川街道、(三)江陵街道、(四)海岸街道是れなり。

京元街道

京元街道は京城より抱川、永平(以上京畿道に屬す)、金化、金城、淮陽(以上本道に屬す)等の諸邑を過ぎ
鐵嶺を越へて元山に至り、咸鏡道の幹道に連絡するものにして全線の延長七十餘
里、本道の地を通過する唯一の國道なりとす、本街道は元と山地を通するものなれ
は坂路多く殊に咸鏡道界に於ける鐵嶺は古來本街道の一大難關として謠はれし
所なり、然るに甲庚及甲辰の役(日清及日露戰役)に際し日本軍の兵站線路に撰まれしかば

春川街道

當時全線に互りて改修を加へられしこと幾十回、爲めに鐵嶺の如き尙ほ且つ車行
自由となり、全線の道幅廣くして車馬を遣るに妨げなく、國中屈指の街道たるに至
れり、現時京元間の陸送郵便物は本街道を遞送せらる、其到達日數は大概五日間な
り、鐵嶺の南側(本道)は傾斜緩なりと雖も北側(即ち咸鏡道側)は急にして險崖を爲す場所少
なからず、故に本道より登るは易く、咸鏡道より登るは難なり。
此道路の西に方り鐵原、平康の諸邑を経て元山に通する道路あり、元と一逕路に
過ぎざれども幹道に較らへて峻坂少なし、故に曾て京元鐵道の豫定線路に撰まれ
しことあり、然れども本線布設に方りて孰れを採用せらるゝに至るや實測成るの
日ならては知ること能はず。

春川街道は京城より京畿道の加平邑を過ぎ春川に至るものにして京城、加平間
は十六里、加平、春川間は六里、通して二十二里なり、春川は本道觀察道廳の所在地た
り、道廳と京との連絡道路なれば路幅廣く往來頻々にして人馬絡繹たり、然れども
峻坂多くして車行難なり、春川邑より南方洪川、橫城、原州の諸邑を経て平昌邑に通
する道路あり、又春川より東方楊口、麟蹄の二邑を経て襄陽に通するものあり、春川

より驛跡に至る十八里、此間は嶺西の地にして郵便物の遞送ありと雖も、驛跡より襄陽に至るには大關嶺の難關ありて交通至難なり、又春川邑より北方華川邑を経て金化に出て京元街道に連絡するものあり、(春川、華川、金化、間九里)

江陵街道

江陵街道は忠清北道の忠州より同道の堤川及本道の平昌等各邑を過ぎて江陵に通ずる道路なり、此道路は大關嶺山脈を通過するものなれば道甚だ險惡なりと雖も、嶺東第一の盛邑と京城とを連絡する主要道路なれば旅客の往來割合に多し、大關嶺は本道著明の高岳なること前に一言したる所なり、本嶺の西側は曲折無數、山又山を以てし、險惡なりと雖も特に高峻なるを悟らず、これに反して、其東側即ち日本海に面する側面は急峻にして削壁千仞、俯瞰すれば足蹙まり、覺へず逡巡するに至るは行客みな感を等しくする所なり、若し夫れ快晴の日に於て本嶺を通過せんか、展望遼遠宏大にして爽快極まりなく、豪壯の圖、絶大の景實に海内無比といふを憚からず。

此街道中平昌邑より東方旌善邑に至る支道あり、其間七里なり、又西方原州を経て更に北進し、横城、洪川を過ぎ、春川邑に至る支道あるは前に述べたる所なり、此

海岸街道

支道は通して三十四里あり、(平昌、原州、間七五里、原州、横城、間四里)、又原州より西方に降り、京畿道の驪州、利川の二邑を経て水原邑に至るものあり、此間二十四里なり、▲忠清北道の忠州より清風、丹陽、永春及本道の寧越、旌善等の諸邑を経て三陟に至るものあり、此道路は丹陽より寧越に至る間險仄にして殊に忠北丹陽、永春最も難路たり、(清風、丹陽、永春、寧越、旌善の諸邑は孰れも漢江の南支に沿ひて永春以下は舟筏を通過すべし)、又旌善、三陟間は、大關嶺山脈を横断するものなれば、險惡なること言語に絶す、故に輕装して僅に通過するを得べきのみ。

海岸街道は元山より東南に進行して本道嶺東の九郡を縦貫し、慶北の寧海其他諸邑を経て慶州に出て大邱に連絡するものなり、沿道各邑間の距離大率ね左の如し。

- 元山、歙谷間十一里十八町 ▲歙谷、通川間六里六町 ▲通川、長箭(長箭は邑にあり、第一の良港なり)間八里十八町 ▲長箭、高城間四里 ▲高城、杆城間九里 ▲杆城、襄陽間九里 ▲襄陽、江陵間十二里 ▲江陵、三陟間十二里 ▲三陟、蔚珍間十五里 ▲蔚珍、平海間八里 ▲平海、寧海間四里 ▲寧海より慶州に至る二十一里、慶州より

第二章 江原道 概勢

大邱に至る十六里、乃ち元山より大邱に至る通して百三十六里六町なり。
此道路は元山より通川に至る十七里十八町間較や平坦なるも通川より高城に至る十二里半の間は金剛外山長箭洞の西方に聳へ、支脈東に延ひて月移臺を爲せるあり、故に道險にして馬匹を通し難き場所なきにあらず、高城以南江陵に至る三十里の間は平坦にして海岸街道中殊に良好なるものに係る、江陵以南慶北寧海に至る三十九里の間は時に展開せる谷野を横断することありと雖も概して崎嶇たる坂路なり、殊に江陵の南方なる火飛嶺、三陟の南方なる馬轉峙及召公台の如きは此街道中著名の難所として知らるゝ所なり。

海路交通は沿海直線を爲し港灣乏しきか故に東岸航路中の難關として名ある所なり、従來本道沿岸に在りて汽船の寄港せしは通川郡に屬する長箭灣及蔚珍郡に屬する竹邊灣に過ぎざりき、然るに沿海各邑の發展に伴ひて海路交通の必要を促すや先年政府は航海者を補助して重要諸邑に毎月二回若くは三回寄航せしむることにしたたり、其寄航地左の如し、(第十一輯 第一章 第四節 參照)

蔚珍郡

竹邊灣

杆城郡

巨津

三陟郡

汀羅津

高城郡

水源端

江陵郡

安木

通川郡

長箭灣

襄陽郡

東津

長箭灣は本道第一の良港灣なるのみならず、東岸稀に見る所の良港なり、又竹邊は東岸航行汽船の重要寄航地なると共に鬱陵島に至るに最も近く、且つ潮流風向等の關係上此より渡航するを便なりと稱せらるゝ所なり、前示各寄航地間及重要港との距離を概示せば即ち竹邊灣より浦項(慶北延 郡)に至る六十五哩五、鬱陵島に至る六十餘哩、汀羅津に至る二十七哩一、汀羅津より安木に至る二十四哩二、安木より東津に至る二十五哩九、東津より巨津に至る十七哩七、巨津より水源端に至る十五哩餘、▲水源端より長箭洞に至る十哩餘、▲長箭洞より元山に至る五十一哩五なりとす。

通信機關は未だ完備せずと雖も江陵、金化、春川の三箇所に郵便局あり、其他の各邑に郵便電信及郵便取扱所又は郵便所、郵便所等あり、而も亦重要地に在りては電報をも取扱はるか故に甚しき不便を感せず、其局所所在地を表示すれば左の如し、

通信

第二章 江原道 概勢

郵便局	管理事務 分掌局	郵便電信 便取	扱所	郵便所	郵便所
江陵(語電) 金化(語電) 春川(語電)	元山	淮陽(郵電) 杆城(郵電) 襄陽(郵電) 三陟(郵電) 蔚珍(郵電) 長箭(郵電)		金城(郵電)	平海、歙谷、高城、通川
	京城	鐵原(郵電) 楊口、洪川、平昌(郵電) 伊川		安峽、平康、華川、麟蹄、橫城、寧城、旌善	

行政區劃

本道の地は天然區劃に依りて嶺東及嶺西に大別すること前に一言したる所なり、茲に天然區劃の下に行政區を配して表示すれば左の如し。

- 嶺東 九郡
 - 歙谷郡 通川郡 高城郡 杆城郡 襄陽郡 江陵郡 三陟郡 蔚珍郡
 - 平海郡
- 嶺西 十七郡
 - 淮陽郡 金城郡 平康郡 伊川郡 安峽郡 楊口郡 麟蹄郡 橫城郡
 - 平昌郡 旌善郡 寧越郡 鐵原郡 金化郡 華川郡 春川郡 洪川郡

理事廳官 轄區域

戶口

原州郡

此の如くにして嶺東の各郡は皆海に沿へり、而して此等諸郡を統轄する觀察道は春川邑に在り。

本道には未だ統監府所屬理事廳の設置を見ず、現時本道の地は京城、大邱、釜山、元山の各理事廳にて分管せり、左の如し。

- 京城理事廳 西部一帯の地域 鐵原、金化、橫城、春川、洪川、原州、以上六郡
 - 大邱理事廳 南部一帯の地域 平昌、旌善、寧越、以上三郡
 - 釜山理事廳 南沿岸一帯の地域 平海、蔚珍、三陟、以上三郡
 - 元山理事廳 東北部一帯の地域 歙谷、通川、高城、杆城、麟蹄、以上十四郡
- 平康、金城、楊口、華川、麟蹄、以上十四郡
- 戶口は隆熙元年の調査を見るに嶺東三萬四千二百四十戸、六萬九千八百七十九人、嶺西十萬四千七百三十四戸、二十一萬五千〇一十一人、通して十三萬八千九百七十四戸、二十八萬四千八百九十人なり、此外に日本人の現住者全道を通して三百餘戸、六百五、六十名許あるへし、其居住地を列記すれば、嶺東にては、通川、高城、杆城、江陵、襄陽、三陟、蔚珍、平海の各邑、其他長箭、麻次津、巨津、束津、注文津、安仁津、燈明津、臨院津、竹邊

第二章 江原道概勢

裁判所

等にして集團地は江陵、蔚珍二邑なり、嶺西にては春川、原州、金化、金城、伊川、淮陽、鐵原、平昌、楊口、麟蹄、平康等の各邑にして集團地は春川、原州、金化、金城等なりとす。
地方裁判所は春川邑に置かれ、又區裁判所を主要地に配置せらる、而して此等は京城控訴院の管轄する所なり、各裁判所の所在地左の如し。

地方裁判所 春川邑

區裁判所 春川邑、金城邑、原州邑、通川邑、江陵邑、蔚珍邑

警察署

警察署は嶺東に在りては通川、江陵、蔚珍の三邑に、嶺西に在りては春川、鐵原、原州、金城、平昌の五邑に置かれ、其他の各邑には普く巡查駐在所を置かる、表示すれば左の如し。

警察署	所屬巡查駐在所
春川	春川、麟蹄、楊口、華川
鐵原	鐵原、伊川、平康、安峽
原州	原州、橫城、洪川

財務署

財務署は主要邑に在り、而して其總ては現時漢城財務監督局の管理する所なるも、東北海岸諸邑の如きは遼遠にして不便少なからざれば、遠からず元山監督局の管理に移さるへしといふ、財務署所在地左の如し。

財務署所在地	管轄區域	財務署所在地	管轄區域
通川	通川郡、歙谷郡	金城	金城郡、金化郡
高城	高城郡	淮陽	淮陽郡
襄陽	襄陽郡、杆城郡	鐵原	鐵原郡、平康郡

第二章 江原道概勢

鱒は沿岸一帯に饒産し其移轉の方向及漁期等大概鱒に同し竹邊、長齋里、佛來、漢津、正東津、銅山、注文津、東津、巨津、猪津、烽燧津、靈湖津、長箭、頭白、致弓、麻次津、七寶洞、蓮花洞、鴨龍等は其著名なる漁場なり、漁具は刺網及曳繩を用ひ、又地曳網にて鱒、鯛、鯖と共に混漁す、邦人甚た之れを嗜食し、生鮮鹽藏共に需用廣く豐漁の時は元山に轉送す。

鯛も亦本道に饒産する魚類の一なれども邦人從來之れか漁獲を專業とするものなく、適々地曳網にて漁獲することあるのみ、日本延繩漁船の來漁して長箭、致弓、鴨龍等を根據とするものあり。

鯖は沿岸一帯に饒産し春秋の二季來游特に多し、體頗る肥大にして重量三百五十匁位に達するものあり、僅に地曳網を用ひて漁獲するものあるのみ。

鱈は鯖と同時に沿岸各地に來游すれども其群甚た多からず、専ら地曳網を用ひて漁獲す。

鮪は鴨龍附近に來游を見ることあり、往々地曳網又は鱒流網に罹り來ることあり。

鯉

鯉も亦多少來游す、然れどもそうだがつをに屬するものは頗る多く、時に大群をなして沿岸に顯はる。

鰻

鰻は冬季全沿岸に來游すれども其産多からず、大敷網、防簾及刺網を用ひて漁獲す、厚里浦、長箭、蛤津、湏津等を主なる漁場とす、生鮮、鹽藏共に需用多し。

鱈

鱈は沿岸到處に饒産す、四時漁獲われども春二月下旬より四月初旬、秋九月より十一月までの間最も多し、而して春季には形體小なるもの多く、秋期には大なるもの多し、手繰網及刺網を用ひて漁獲し、乾製して放賣す、販路頗る廣し。

鱒

鱒は十一月より翌年四月まで沿岸に來游すれども其産多からず、東津、巨津、猪津附近にては刺網を用ひ、長箭にては鰻と共に防簾にて漁獲す、刺網は沖合二、三里、水深七、八十尋なる岩礁の周圍に設く。

明太魚

明太魚は冬季高城、通川兩郡の沿岸に來游すれども其群甚た多からず、巨津、黄金津、猪津、立石、末九味、未茂津、浪汀津等の住民は専ら延繩を用ひ十一月より翌年三月までの間之れを漁獲す。

玉筋魚

玉筋魚は沿岸各處に大群をなして來游す、春秋の二季特に多し、然れども未だ之

れを漁獲するものなし。

鮫鱈

鮫鱈は沿岸到處に棲息すれども未だ專業として之れを漁獲するものなし、但た刺網、曳網、手繰網等に入り來ることあり、

かわはぎ

かわはぎは沿岸各地に饒産す、主として刺網及手繰網を用ひ叢石津にては大敷網にて漁獲す、漁期は三月中旬より十一月初旬に亘れども三月より五月までの間を盛季とす。

河豚

河豚沿岸到處に棲息す、殊に靈湖津は其最も著名なる産地なり、種類はとらふくを主とす、生鮮の儘又は乾製して販賣す。

鱒

鱒は五、六月頃内灣に來游するもの頗る多し、未だ專業として之れを漁獲するものなし、鱒地曳網にて混獲するのみ。

目張

目張は全岸に饒産す、一本釣又は四つ手網にて漁獲すれども未だ盛んなる漁業たるに至らず、漁期は周年に亘れども春秋の二季漁獲最も多し。

火魚

火魚は刺網を用ひて他の磯魚と共に混漁すれども漁獲多からず、漁期は春より秋に至る、冬季は沖合深水の處に潜むものの如し。

鱈

鱈は多少來游を見ると雖も未だ之れを漁獲するもの多からず、冬季群泳を見ることあり。

黒鯛

黒鯛は甚だ多からず、雖も地曳網にて混漁せらる、三、四月の候特に多し、日本人も亦鯛延繩にて混獲することあり。

鱒

鱒は五、六月頃及九、十月頃の二期沿岸に來游す、體長六、七寸大なるものは一尺に達す、専ら延繩にて漁獲す。

鱈

鱈は内灣河口到處に來游すれども多からず、地曳網にて他魚と共に混獲するの外未だ特殊の漁業をなすものなし、漁期は四月より十月までとす。

鮭

鮭は河川の稍大なるものには毎年潮上すれども其産多からず、體長僅に二尺内外質甚だ劣等なり、潮上期は九月下旬に始り十二月下旬に終る、河中にて曳網、藉及防簾等を用ひて漁獲す。

鱈

鱈も亦其産多からず、往々河中に特殊の装置をなして漁獲するものあれども多くは河口に於て地曳網にて鱈と共に混漁す、漁期は四月より七月に至る。

鮎

鮎は到處の河川多少産せざるはなし、高城の赤壁江、杆城の明波川、南川、襄陽の南

大川、江陵の沙川及南大川、三陟の五十川、交柯等には稍多し、防簾又は投網にて漁獲す。

鯉は河川湖沼到處に産す、形頗る大にして長三尺以上に達するものあり、然れども味佳ならず、防簾を設けて漁獲す。

鱖は全岸棲息せざる處なく、殊に内灣、河口等の泥底に多し、未だ專業として之れを漁獲するものなし。

鱒は全岸一帯に棲息し、特に春夏の候沿岸に來游するもの多し、まぐろ、どた、しろ、ばか、をなが、のこぎり、かせ等の數種あり、然れども未だ特更に之れを漁獲するものなし。

蛸は全岸一帯に棲息す、竹邊、長鬱里、銅山、注文津、東津、鵜也津、巨津、黄金津、猪津、末九味、靈湖津、長箭、頭白、致弓等は著名の産地なり、特に靈湖津附近最も多し、其形大なるものに至りては二頭を以て四斗樽を滿すものあり、周年一本釣及掛釣にて漁獲し、

乾製して販賣す、其價頗る貴し、卵子も亦乾製して販賣す、一個の價格十錢乃至二十錢なり。

蟹は沿岸各處に棲息す、いばらがにずわいがに等あり、竹邊附近にては刺網を以

て一月より三月まで漁獲し、通川郡及歙谷郡沿海にては三、四月の候、蟹手繰網にて混漁す。

蟹は平海郡沿海に多し、車蟹に屬す、十月より翌年一月まで刺網を用ひて漁獲し、又手繰網にて他魚と共に混獲し、乾製して日本に輸出す。

鮑は沿岸到處に棲息す、元と形大なるもの多く、殻長七、八寸のものありしも、濫獲の結果今は著しく小形となり、二、三十個を以て漸く乾鮑一斤を得るに過ぎず、主として日本人潜水器を用ひて之れを採取す、期節は三月より十月までとす。

贗貝は全沿岸に饒産す、然れども質甚た劣等なり、是れ亦主として日本潜水器業者が閑散時に採取するものあるのみ。

牡蠣は全岸岩礁の間に棲息するものあり、と雖も形甚た小にして品質劣等なり、海扇は長箭灣口、靈湖津附近に饒産す、れども主として日本潜水器業者が閑散時に採取するのみ、採取したるものは熟煮乾製して清國輸出品となせども、又多少生

鮮のまゝ附近の住民に販賣するものあり、其殼は邦人好んで之れを買求め、鍋に代用す、一個の價五、六錢なり。

海鼠

海鼠は全岸に産すれども邦人は日本潜水器業者の採取に委して顧みず、潜水器業者の渡來し始めしは實に十數年前の事にして當時は一日能く七、八樽の收穫ありしも年々減少して今は僅に一、二樽を得るに過ぎず、厚里浦、長鷺里、漢津、沙津、注文津、東津、鵜也津、巨津、黄金津、猪津、未九味、鹽湖津、長箭、南涯、頭白、金蘭、致弓等は其著名の根據地なり、期節は春三月下旬より六月下旬まで及秋九月初旬より十一月初旬までとす。

和布

和布は全岸に饒産し、邦人之れを採取すること盛んなり、期節は三月下旬より六月までとす。

海苔

海苔は全岸各地の岩礁に産す、二月下旬より五月までの間沿岸の女子之れを採取して乾製し各地に輸送す。

青苔

青苔は全沿岸に饒産す、是れ亦女子の副業として三月初旬より四月まで之れを採取し圓形の篩にて漉し乾製して市場に出す、需用頗る廣し。

天草

天草は全岸一帯に産すれども邦人及日本人共に未だ採取するものなし、蓋し海波荒く操業困難なるに由るものなるへし。

主たる漁業

漁具

本道水産物の概要此の如くにして就中重要なるを鱈とす、蓋し本道に於ける鱈漁業は咸鏡道の明太魚漁業、全羅道の石首魚漁業と並ひ稱せらるゝ所にして即ち本邦三大漁業の一なりとす。
漁具は一般に地曳を使用すること盛んなり、而して其大なるものに至りては一統一千二百圓を價ひし其修繕費尙ほ且つ年々一百五十圓乃至三百圓を要すといふ、此の如く地曳の盛んなるは蓋し沿岸の形勢に伴へる自然の發達たらずんばあらす。

製鹽

沿岸砂濱に富むと雖も概ね直線をなして浪高く、鹽田開拓に適地少なし、然れども沿海の各郡大抵之れを營む、但し其多分は農家家用を目的として煮熬するに過ぎざるなり、觀察道の報告に依れば平均一年の製産五千五百十八石にして其價額二萬九千二百二十一圓と稱す、即ち一石の單價平均約五圓三十錢の割合なりとす。

第一節 欽谷郡

沿革 本郡を置かれしは建陽の改革後に在り、其以前は江陵大都護府の屬縣として鎮管地たりしなり。

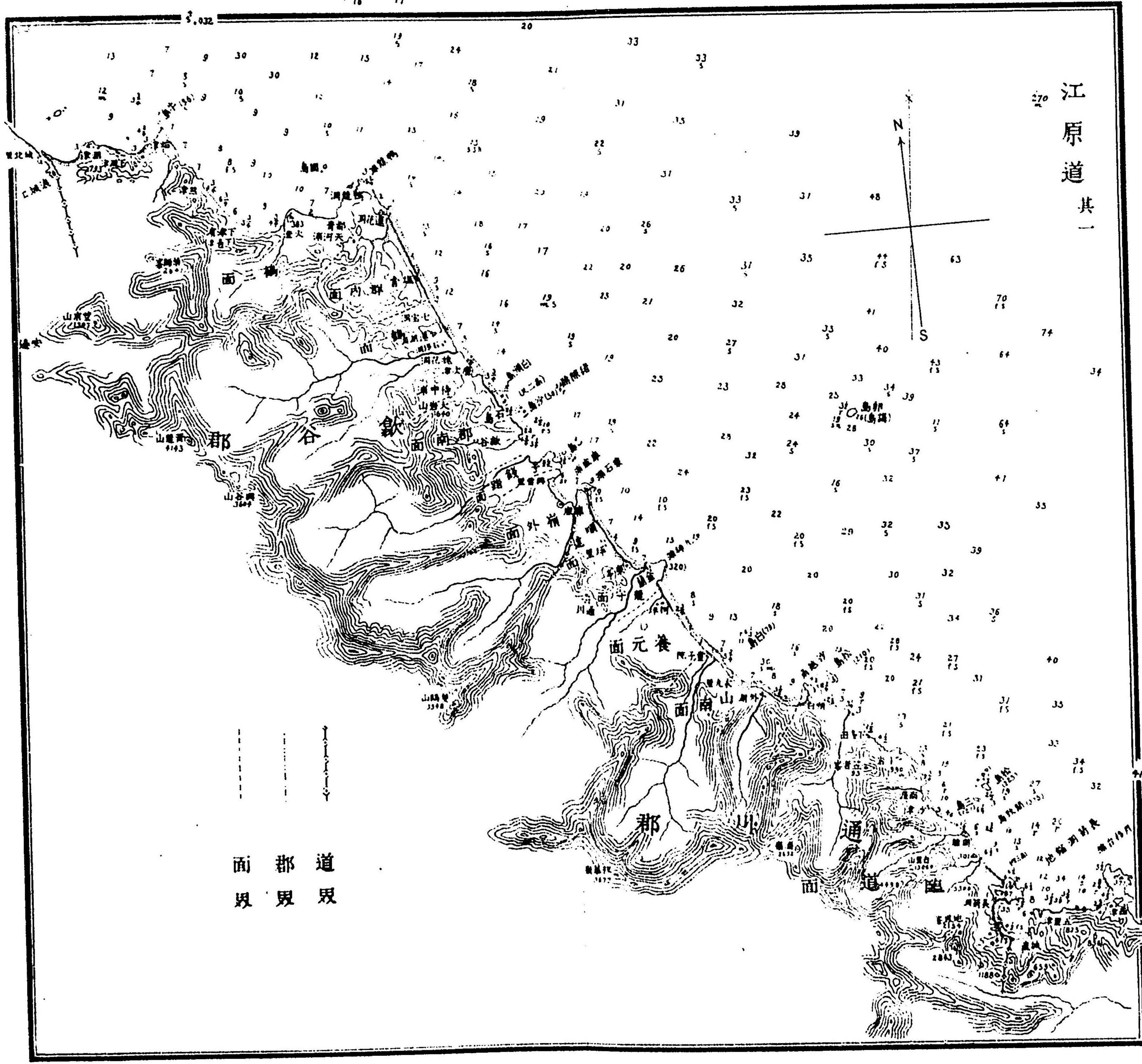
境域 本道の最北に位して西方咸鏡南道安邊郡に、南方通川郡に接し、北及東の二面海に沿ひ、屬島に國島、牛島等あり。

地勢 郡の西方は山岳重疊すれども海岸附近は割合に平坦なり、而して地勢は西方に隆起し、東方に低下す。

河川 河川は南方通川郡界に於けるもの稍、大なり、然れども運輸を利するにあらず、又水産の利あるものにあらず。

海岸線

海岸線は二面海に面するを以て割合に長く約三十三哩あり、而して其形勢は咸南安邊郡界の突角、鵬龍岬及致弓附近其他一、二の箇所を除けば、渾て平坦なる砂濱にして、殊に麻次洞より蓮花洞に至る間は砂濱連続して、四里に亙り、沿岸附近の水深十七、八尋に及び、海底砂質にして平坦なれば、地曳網の使用に恰適し、鱈の漁場と



江原道 其一

道界
郡界
面界

郡邑

交通

通信

場市

物産

して著明なり、其期に入れば附近の漁夫又は日本漁夫の來漁するもの少なからず。郡内主要漁村にして且繫船に便なるは致弓、麻次洞及鴨龍なり、就中致弓は規模大ならざるも漁船泊地として本道屈指のものに係れり。

郡邑歙谷は郡の南方通川界に在り、郡衙の外に巡査駐在所及郵便所を置かる、人煙稍密此地方に於ける一集散地たり。

交通は元山を主とす、安邊邑を經て至る十一里半なるも道路良好なれば割合に便なり、隣邑通川に至る七里餘、是れ亦道路不良ならず。

通信機關は郵便所を設置せらるゝに過ぎざれども邑は元山、江陵間往復の通路に當れるを以て殆んど隔日に交互の便あり、而して郵便は元山に二日目にして到達す。

郡内場市は邑場及舊邑場の二場あり、開市は邑場二、七▲舊邑城一、六にして集散物貨は米、大豆其他の雜穀、麻布、木綿、魚類等とし、共に稍盛んなり。

物産は水産を主とす、其重要なるものは鱈、鱒、鱧、鱒、鯛、小鯖等にして就中鱈は漁獲多大なり。

郡内を區劃して鶴三郡内、鶴一郡、南踏錢、岑外の六面とす、而して各面北より順に並列して皆海に沿へり、臨海部落の概況左の如し。

鶴三面

西方咸鏡南道安邊郡に、南方郡内面に接し、北の一帶朝鮮海灣に沿ふて海岸線割合に長し、臨海部落を列擧すれば溷津、蛤津、熊津、長津、慈山、道清、鴨龍等あり、左に各部落の配列及沿岸の概勢を述へん。

溷津 蛤津 熊津 長津

溷津(구진)は面の西方安邊郡界に位して二部落よりなる、西なるは單に溷洞と稱し、東方なるは下溷洞と呼ぶ、而して此二洞の間は砂濱なり、下溷津の東方小丘北方に延ひて一突角を爲し其岬端に一部落あり、之れを蛤津(갯진)といふ、岬端に接して浮へる一島は即ち牛島なり、蛤津の南方約一哩の間は砂濱なり、其内方に面積稍大なる沼澤あり、此沼澤以東は丘陵海に枕みて海岸には岩礁錯落たり、此丘陵の東側に部落あり、之れを熊津(웅진)と爲す、熊津以東鴨龍端に至る間は緩漫なる灣形を爲して砂濱連續し、長津、慈山、道清等並ぶ、長津(장진)は松陽洞及下長津の二部落より爲

慈山 道清

鴨龍洞

る慈山(자산)は此灣内の凸出部にして人家は小丘の東西に部落す、道清(도청)は海圖に都青と記す、鴨龍端の西方約一哩に在り、此より東北鴨龍に至る間は小丘互りて沿岸に岩礁點在す。

鴨龍洞(안룡동)永興灣の南東端コトリカ角の西北側に位す、左右兩岸に並立せる奇岩怪石は自然に灣形を成し良港にあらすと雖も水深四尋乃至九尋を有し、漁船の繫留に便なり、戸數二十九ありて岡陵に圍繞せられ、内二十戸は漁業を主とせり、薪材飲料水共に充分ならず、漁獲多きは鱈にして鯖、鱈、河豚、小鯖、鱈、順次これに次ぐ、毎年日本潜水器船の來漁するもの少なからず。

郡内面

西北方鶴三面に、南方鶴一面に接し、東方海に面して一大鹹湖を入れ、其臨海區域甚た狭小なり、此鹹湖は之れを天河浦と稱す、本道中最大のものに係れり、本面臨海部落に蓮花洞及鹽倉あり。

蓮花洞

蓮花洞(연화동)は鴨龍端の南方鹹湖開口の北側に位する一小部落なり、里人皆漁を

生業とす、鹽倉(鹽倉)は鹹湖と外海を隔つる砂丘地にあり、是れ亦一小部落にして里人の多くは漁業に従事す、蓮花洞以南鶴一面に屬する麻次洞に至る一帯砂濱にして地曳の好網代なること本郡の概勢に一言したる所なり、鱸の漁期に入れば里人其漁獲に従事す。

鶴一面

北方郡内面に、南方郡南面に接し、東方一帯海に面して其中央に一溪流開口す、本面臨海部落を列擧すれば、七寶洞、蓮湖洞、石埕洞、槐花洞、麻次洞等あり、而して就中主要なるを七寶洞及麻次洞とす。

七寶洞(七寶洞)麻次洞の約半里北東に位置す、海岸の屈曲少なく、繫船の便を缺くと雖も一帯砂濱にして地曳網に適す、人家四十三戸を有し漁業を主とするもの二十戸、薪材、飲料水共に乏し、漁獲物は鴨龍洞に異ならず。

麻次洞(麻次洞)七寶洞の南半里にあり、灣入少なく繫船に便ならざれども部落の北方約三町に一小流あり、河口狭く、幅五、六間、水深三尺に過ぎざるも漸く遡れば幅廣

北方鶴一面に、南方蹈鏡面に接し、東方面に面す、沿岸の形勢は岩礁點々として砂濱を爲せるは中央の一小部分に過ぎず、臨海部落に石島洞及梧梅洞あり、而して石島洞の西北に待中湖あり。

石島洞(石島洞)麻次洞より南半里に在り、屈曲少なく砂濱にして繫船に便ならずと雖も傾斜の度少なきを以て船を曳揚ぐることに容易なり、地曳網代に適す、人家三十戸あり、漁業を主とするもの十五戸、薪材、飲料水共に乏し、海産の主要なるものは鱸、小鯖、鮑等なり。

梧梅洞(梧梅洞)石島洞を距る南半里、北面して南に灣入せるも灣口廣く、北風を避くるに足らず、西方丘陵下に人家十戸あり、薪材、飲料水共に十分ならず。

踏錢面

北方郡内に、南方嶺外面に接し、東方海に面す、臨海部落としては致弓洞唯一あるのみ。

致弓洞

致弓洞(チキウ)灣口南に面し、其北東に突出したる一角より漸次西南方に螺旋して天然の良波止場を形成す、灣内廣からすと雖も水深三、四尋にして二、三百石積の帆船を泊するに足る、灣口の東南に三箇の島嶼あり、東徳島、乙島、穿島といふ、風濤を遮断するの便あり、人家四十餘戸、灣の西澳丘陵下にあり、人情靜穩にして概ね農業を營み生計稍可なり、内商家五、六家あり、薪材乏しけれども飲料水多し、近海鱸、鱒、鯛等の回游饒多なり、此地春季日本潜水器船の根據地として郡内第一に推さる、又數年來秋季鱒流網の出漁するものあり、將來根據地として屬望すへき所とす。

嶺外面

北方踏錢面に、南方通川郡に屬する順達面に接し、東北一帯海に面して其沿岸は

興雲

庫底

概ね砂濱なり、而して臨海部落に興雲、庫底の二あり。
興雲(キウウン)は致弓の泊地を擁する南東角の南側に在りて踏錢面に跨る、前面は砂濱にして地曳に適す。

庫底(コソコ)も亦通川郡に跨り、灣入を隔て、興雲と相對し、南東風を避くるに宜し、人家一百九十餘多くは農を生業とし、漁戸は五、六戸に過ぎざるなり、然れども毎年鱸の漁季に入れば里人其漁獲に従事して稍盛んなり。

第二節 通川郡

沿革

本と高勾麗の休壤郡(金名)新羅金壤に改め、高麗忠烈王の時通州と稱し、防禦便を置きしか本朝太宗の時復た郡と爲し今名に改む。

境域

北方欽谷郡に、南方高城郡に接し、東方一帯日本海に臨み、屬島に松島、卵島、猪島、荒島、沙島、其他の小嶼あり。

地勢

郡の西方には高岳連亘し、南方高城郡界には金剛外山(海拔一、八八六呎)巍然として聳へ、海潮其脚を洗ふあり、故に此附近は傾斜急にして平地を餘すに至らずと雖も北方沿海には平地展開して邑城を中心とし童子院より庫底に至る約三里半に亘れるを見る、此平地は所謂通川平地にして地味良好ならずと雖も開拓届きて耕地面積の廣大なる嶺東一と稱せらるる所なり。

河川

河川は廣橋川其他數條ありと雖も孰れも細流にして舟楫の便、灌溉の利共に缺けり。

海岸線

海岸線は約三十一哩の長きに亘ると雖も出入少なし、然れども南方高城界に接して本道一の良好たる長箭灣の錨地あり、灣は大艦巨舶を容るるに足り、又漁船を繋ぐに宜し、其他金蘭、荳白、南涯等の津浦あり、何れも繫泊安全にして又盛漁地たり。

郡邑

郡邑通川は郡の沿海平地に位して人煙稍密なり、郡衙の外に區裁判所、警察署、財務署、郵便所を置かれ、日本商人も亦若干居住するものあり。

交通

交通は本道海岸街道に沿ふて隣邑歙谷に至る七里餘、長箭洞に至る八里半なり、長箭洞は長箭灣奥に於ける一小部落に過ぎざるも灣は本道一の良灣にして定期

通信

船其他不定期船の寄航するを以て海路各地に至るに便あり、通信機關は通川邑に於ける郵便所の外に長箭洞に郵便電信取扱所あり、且つ陸送便の外に海路便あるを以て稍便なり。

區劃及臨海面

郡内を區劃して七面と爲す、其海に瀕するは順達、龍守、養元、山南、臨道の五面なり、而して順達は北端歙谷郡に屬する嶺外面に接し、其他は順に並ひて臨道は高城郡に屬する二北面に接續す。

揚市

郡内揚市は邑内、庫底、月峴店の三所にあり、而して其開市は邑内五、十、▲庫底三、八、▲月峴店四、九にして集散物は米、大、小豆、其他の雜穀、綿布、金巾、棉花、石油、煙草等なり、

物産

郡の物産は農産を主とす、其他魚、鹽の産も亦少なしとせず、主要漁獲物は鱈、鱧、鯉、鱒にして一年中の漁獲大約六千三百圓内外と稱す。

製鹽地

製鹽地を列舉すれば順達面に屬する鐵山▲龍守面に屬する東亭▲山南面に屬する童子院、外濂城、外湖▲臨道面に屬する荳白、多田、斗谷、周驗、長田等にして一箇年の製産三百四十餘石、價額七千二百九十圓に上るといふ。

順達面

郡の沿海最北に位して北方歙谷郡に屬する嶺外面に、南方本郡の龍守面に接し、東方一帶海に面す、沿海部落に庫底、叢石、浦項、錢山等あり、而して庫底は歙谷郡に跨る、其概況は前既に述べし所なり。

叢石

叢石(寺石)南面する砂濱にして人家三十一戸あり、内漁戸十五、春秋二期間、鱧、鱒、鮭等の漁利多く、一年の漁獲一千四百圓内外に達すへし、漁船五隻あり、漁具は擧網を用ふ、網代は個人の所有に係り、典賣又は貸借せらるる慣行を有す。

此地本道八景の一を以て其名高し、數十の石柱海中に叢立して、皆六方形を成し、高さ各五、六丈、海風に吹かれ、潮水に洗はれて削成玉の如く、就中四柱最も高し、呼んで四仙峰といふ、斷崖に亭あり、所謂叢石亭にして、風景絶佳、騷人一遊の價値あるへし、又部落の西方に一丘あり、魚望山といふ、此處も亦眺望に富める一勝地なり。

浦項

浦項(豆苴)は叢石の南方凹入部に位し、鐵山(豆苴)は其南方に在りて一溪流開口の右岸に位す、一帶渾て平地にして沿岸は砂濱なり。

龍守面

北方一溪流を以て順達面と劃し、南方養元面に接し、東方海に面す、面の南境に近く稍、大なる一川開口す、西方淮陽郡界に發源し、郡邑通川の南方を通過し來るものにして之れを廣橋川と爲す、本面臨海部落に坪里、東亭、金蘭、前津あり。

坪里

坪里(刈里)は順達面を劃する一溪流開口の左岸に位し、東亭(亭)は其南方に在りて廣橋川開口の右岸に位し、金蘭と相對す、附近も亦一帶平地にして沿岸は渾て砂濱なり。

金蘭

金蘭(言甘)往時萬戸の地たりしことあり、郡邑に近く兩地の間往來繁し、北東に面する砂濱にして人家七十餘戸、漁を營むもの多し、主たる漁獲物は鱧、鱒、鮭等にして一年の産一千四百餘圓と稱す。

養元面

北方龍守面に、南方山南面に接し、東方海に面す、一帶平地にして耕地多く、本郡の

主要農産地たり、而して其臨海部落に柯坪ありと雖も亦農を主とし、漁業に従事するものあらず、本面の前面に一島あり、卵島即ち是れなり。

山南面

北方養元面に、南方臨道面に接し、東方海に面して臨海地域極めて狭まし、面の中央に一溪流を通す、其流域に多少の耕地ありと雖も本面以南は山岳丘陵起伏して平地少なく、海岸も亦砂濱に富まず、臨海部落に童子院、末九味、外湖等あり、又本面の前面に白島及松島浮ふ。

童子院

童子院(童不院)は養元面界に位し北東に面する砂濱なり、人家二十餘戸、鱈、鱒、鱒の盛漁地たり、部落の附近に鬱蒼たる樹林あり、薪材、飲料水共に潤澤なり。

末九味
外湖

末九味(末九味)外湖(外湖)相並ひ前面は緩漫なる灣形を爲せる砂濱なり、地曳網代に宜し。

臨道面

北方山南面に、南方高原郡に屬する一北面に接し、東一帯海に面す、本面は海岸線最も長く殊に其南端高城郡界には一大灣入を容るゝあり、本道著名の良灣たる長箭灣即ち是れなり。

臨海部落を列擧すれば、萱白、長龍、下多田、斗岩、南涯、沙津、周驗、長箭等あり、此中長箭に次きて繁船可なるは萱白及南涯とす、又屬島に三島、兄弟島等あり。

萱白

萱白(干白)又頭白とも書す、沿岸は砂濱なれども背後の丘陵は延ひて北東に斗出し、又前面に松島浮ひて南西北の風浪を避くるに宜し、部落は灣の北東側に在りて戸數八十餘、漁戸其半を占め、此地方に於ける盛漁地なり、主要漁獲物は鱈、鱒、鱒にして一年の漁獲八、九百圓と稱す、毎年春季日本潜水器船の來漁するものあり。

長龍
下多田

長龍(長龍)●下多田(下多田)共に屈曲緩漫なる砂濱に並列す、長龍の北東方に浮へる島嶼は即ち三島なり、三島より成る故に此名あり。

斗岩

斗岩(斗岩)下多田の南方稍凸出せる所にありて萱白を距る一里餘、北面する砂濱にして人家十數戸あり。

南涯

南涯(南涯)斗岩の南方約一里にあり、北東に面す、灣口稍廣しと雖も避泊に適す、人

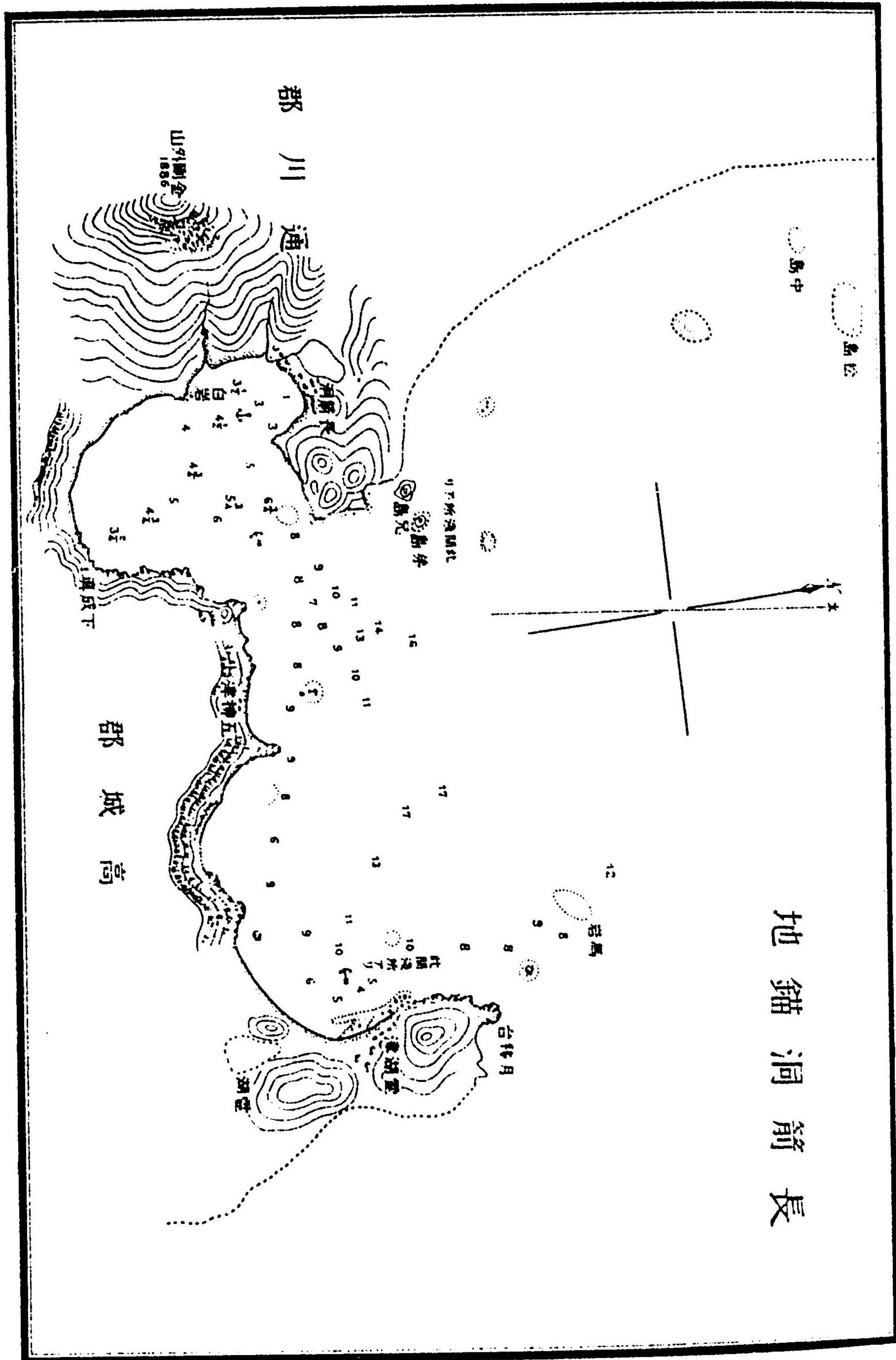
家三十餘戸、人情靜穩なり、部落の東方に鬱蒼たる樹林ありて薪材に富めり、漁採物の主なるものは鱧、鱒、鮒等にして一年の漁獲八百圓内外に上る、沿岸の水深は二尋乃至七尋なり。

沙津(沙津)南涯の南方約五町内外にして長箭を距る北方二里にあり、北東に面する沙濱にして地曳網漁場に適すれども繫船に便ならず、斗出する部分は樹木鬱蒼として繁茂せり、人家三十四戸、内漁戸七あり、薪水共に多量なり、漁採物は鱧、鮒、鱒等にして一年の漁獲八百圓内外と稱す。

長箭(長箭)本道第一の良港にして日本漁夫は軍艦港と呼ぶ、蓋し灣内廣く水深くして巨船の碇泊に適し、各國軍艦時々入津せるを以てなり、灣口東に面し東南月移臺より折れて西方に彎入し、背後には金剛外山、長安山等聳ち、其支脈走りて灣の南西北を包圍するか故に北西南の風を避くるに宜し、漁船碇繫場は灣の北隅長箭洞部落の前面にして諸風共に安全なり、然れども冬季に至れば金剛山嵐猛烈に襲來するありて入港難なること屢々あり、近海は鯨、鱒、鮒等の漁場として多望なり、毎年日本鯨網船の出漁するもの少なからず、此地往年露國捕鯨船が割截場を置きし

沙津

長箭洞



處にして當時捕鯨船の寄航するもの多く、其季に入れば附近部落より出稼労働者集合して繁榮を極めしも日露戦後露國捕鯨船は去て來らず、其割截場は日本東洋漁業會社及長崎捕鯨會社に於て承繼したりしも兩者共に主として蔚山長承浦に根據して此地に來るは稀なり、隨て往年の如き盛況を見るなしと雖も近頃日本人の定住者日を追ふて増加し、釜山北關間航海の汽船寄港するあり、運輸交通の便開け漸く發展の氣運に達せり、港内には擧網及防簾を定置せるものあり、里人共同の經營に係る。

第三節 高城郡

本と高勾麗の達忽、新羅眞興王の時州と爲せしも後郡と爲して今名に改む、高麗を経て本朝も亦これに因り以て今に至る。

北方通川郡に、南方杆城郡に接し、西方は金剛山脈に依つて劃せられ、東方一帯日

第二章 江原道 第三節 高城郡 概勢

沿革
境域

本海に面す、其沿海に渴島、浦島の小嶼あり

郡の西北境に方り金剛外山蟠屈して支脈東に走り長箭灣を擁する月移臺の斗出となる、故に水源端附近より長箭灣に沿へる沿岸は傾斜急にして平地を除さすと雖も其南側は稍、緩傾斜地を爲し殊に郡の中央を流るる赤壁江流域は割合に展開して美田連互せるを見る、即ち此展開地は所謂赤壁江平地にして嶺東第一の米産地たり。

河流は赤壁江を除きては大なるものなし、赤壁江は麟蹄及杆城郡界に發源し、北東に流れて杆城郡を通過し、郡邑高城の西方に來り、折れて東流し、高城の南を過ぎ烽燧津に至りて開口す、本江は流域の長大なる、河幅の廣き、嶺東一に位すと雖も尙は舟楫の便なし、然れども灌溉を利する少なからずして其流域に美田を有せること前示の如く、而も雖其他淡水魚を産して水産の利も亦少なからず。

海岸線は長箭灣奥より月移臺に至るの間東西に走ると雖も、同岬を一廻すると同時に南に轉し、以て杆城郡界に到達せり、其延長二十二哩餘に及ぶ、而して其沿岸の概勢、水源端以北は多少屈曲を爲し、月移臺に至る間は砂濱に富むと雖も水源端

地勢

河流

海岸線

區劃及臨海面

郡邑

交通

通信

場市

物産

以南は殆んど直線を爲せる砂濱なり、故に本郡に於て漁船繫留に適する地は大概同端以北に在り。

郡の行政區劃は八面なり、其海に沿へるは二北、一北、東面、安昌の四面とす、而して二北、一北の二面は水源端の以北に位し、東面及安昌の二面は其以南にあり。

郡邑高城は古名を農巖と稱す、赤壁江の右岸に在りて海岸街道に沿ひ河口に於ける烽燧津に至る一里に足らず、郡衙の外に警察署、郵便所を置かれ、日本人も若干居住して市街稍、賑はへり。

交通は通川郡に屬する長箭洞に至る四里、水源端に至る一里に足らず、此二地は汽船定期に寄航すれば稍、便なり。

通信機關は邑城に郵便所を置かるるに過ぎざれども長箭を距る遠からざれば甚しき不便を感せず。

場市は邑内に唯た一あるのみ、毎月陰曆三、八に開市せられ一市の集散八百圓内外と稱す。

物産は農産及海産を主とす、農産に在りては米穀最も重要なり、又麻布、生牛、牛皮

水産物

を出すこと少なからず。

水産物は鱈、鯨、鱒、鱈、鱈、はたはた、鮭、蛸、海參等にして毎年春秋二季鱒の漁期に入れば日本漁夫の來漁するもの少なからず、又年々潜水器船の來漁するものあり、本郡に於ける一年中の魚類水揚高は大約五六百圓なりといふ。

製鹽地

食鹽も亦多少の産あり、製鹽地を列擧すれば二北面に於ける城直津▲一北面に於ける梨洞津、浪汀津▲安昌面に於ける浦外津、松島津、地境津等にして一年の製産一百三十石、價額三千三百七十餘圓と稱す。

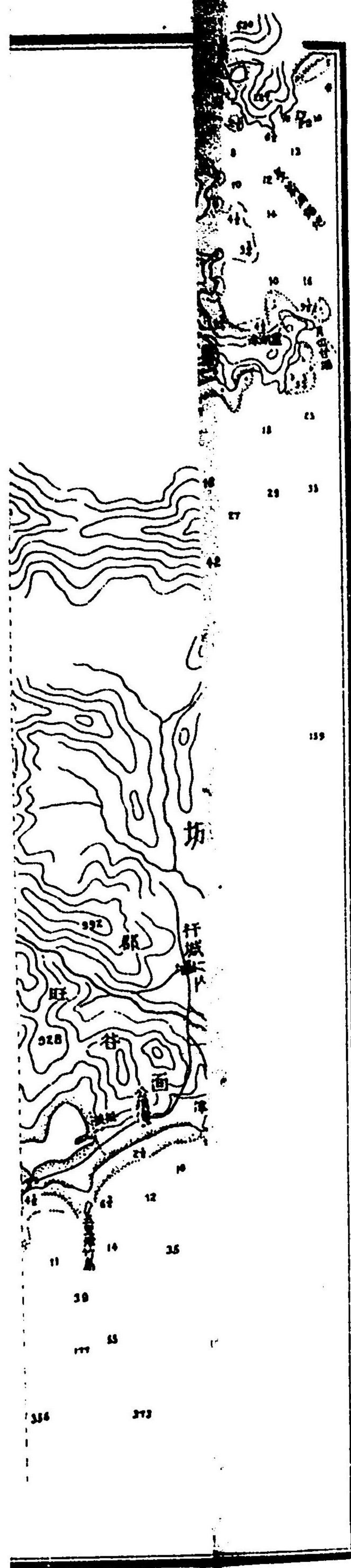
以下各面に就て臨海部落の概況を敘述せん。

二北面

北方通川郡に屬する臨達面に、東方本郡の一北面に接し、北方長箭灣に瀕して其海岸線は短小なり、臨海部落に城直津及五里津の二あり。

城直津(성직)は長箭灣奥の南隅に位して漁船を繋ぐに宜し●五里津(오리진)は城直津の東方十七、八町に在り、海底砂質にして往々岩礁の横はるれば地曳網を使用

五里津



すること難し、人家は共に二、三十戸あり、主要漁獲物は鯧、鱈、鱒、鱒、鱒等にして就中鯧漁盛んなり。

一 北面

西方二北面に、南方東面に接し、北東の二面海に面す、而も本面には月移臺の斗出あり、故に海岸線は割合に長く其延長は大約八哩半に及へり、本面臨海部落に靈湖津、西津、梨洞、後津、浪汀津等あり。

靈湖津(リオンカ)長箭灣の南東角月移臺の北端に位して漁船を繋ぐに足る、人家數十戸、多くは漁を以て生業と爲す、漁獲物は蛸、鱒、鱒を主とす、殊に蛸は此地の名産にして形體甚だ大なるを以て名あり、其大なるは二頭にして四斗樽を滿すに至る、此地日本潜水器船の重要なる根據地にして年々來漁するもの少なからず。

月移臺(ワネイ、エト)又月位臺と書す、遠く北方に斗出して其岬端は樹木克く茂り濃黒色を呈して航海者の好目標たり、然れども其突角より北西方六百五十間許に方りて馬岩あり、洗岩なるを以て認め得へしと雖も其附近には暗礁あり、汽船航路の警

靈湖津

月移臺

戒區たり。

四津

西津(西津)又西城と呼ぶ、月移臺の東側に於て大陸に、灣入する緩漫なる一小灣是なり、部落は灣の北隅にありて南東に面す、灣は砂濱にして地曳に適す。

梨洞

梨洞(梨洞)西津の東南十六、七町に在り、背後は丘陵にして北東に露開せる砂濱の西北端に在り。

後津

後津(後津)前掲砂濱の東端に位して梨洞と東西相望む、孰れも一小部落に過ぎざれども、邑城を距る遠からず、殊に本津より邑城に至る一里に足らずして道路平坦なれば往來便なり。

浪汀津

浪汀津(浪汀津)後津の東方十町許に在り、郡邑高城の北方を通過する一溪流は本津の東方を流れて海に入る、此附近は即ち本面の東界なり。

東面

北方一北面に、南方安昌面に接し、東方海に面す、本面海岸には水源端の斗出あり、又其南方に赤壁江の開口あり、而して其臨海部落は末茂津、立石津、烽燧津の三ある

末茂津

のみ、概況左の如し。

末茂津(末茂津)水源端の北側に位せる一小部落なり、一北面に屬する汀浪津と東西相望む、本津の前面は岩礁暗岩錯落たり、水源端に寄航の汽船は本津に入港す、

水源端

水源端(水源端)本道著名の岬角にして其位置は之れを最近刊行の海圖(明治四年十月六日刊行)に就て見るに北緯三十八度四十一分五秒、東經百二十八度二十一秒三分三秒に相當す、岬端に燈臺あり、其燈火は速閃白色にして毎十二秒を隔て、三秒時間に二連光を發し、明弧は南三十六度十三分南より南西を経て北二度西まで、二百五度十三分とし、光達は十七哩なり、霧笛を備ふ(第一章參照)此岬端より長箭灣奥に至る海路約十哩とす、

立石津

立石津(立石津)水源端の南側に於ける一津なり、灣入淺くして繫船に適せざれども沿岸砂濱にして地曳網を使用し得へし、部落は岸を距ること二、三丁に在り、戸數三十餘戸、其大半は漁に従事す、部落の北方には鬱蒼たる樹林ありと雖も、一帯禿山にして薪材に乏し、然れども飲料水は多量なり、此附近各種魚類の回游饒多にして殊に近海十、十一月の頃鱒の濃群を見ること屢次あり、主要漁採物は鱒、小鯖、鮫、鱈、鱒、鱒、鱒

等なり。

烽燧津(烽燧津)立石津の南方赤壁江開口の右岸に在り、其位置は那の呑吐口に當ると雖も露開せる砂濱にして繫船便ならず、東方一哩餘に渴島浮ひ小嶼岩礁點々散在す。

安昌面

北方東面に、南方杆城郡に屬する縣内面に接す、郡の南東端の地は即ち本面なり、沿岸は砂濱にして直線を爲せり、而して其臨海部落に浦外津、松島津、地境洞あり、屬島に浦島あり、概勢左の如し。

浦外津(浦外津)烽燧津の南に位置して灣は半月形を形成す、其北端は丘陵より成れる突出角にして其下には岩礁累々として點在し自然の防波堤を爲す、故に北西の風波を避くるに足る、水深五、六尋、沿岸砂濱なるを以て地曳網の使用に適し、鯷漁業甚だ盛んなり、部落は灣の北西部にありて人家五十三戸、内漁業を主とするもの三十、飲料水多量なれども質不良、地曳網、刺網を有し又た鮓曳釣を營むものあり、主要

烽燧津

浦島

浦外津

松島津

地境津

沿革

漁採物は鯷、小鯖、鱒、鮓等なりとす。

松島津(松島津)浦外津の南方に在りて沿岸は砂濱なり、然れども沖合半里許に至れば岩礁散在するを以て漁具の使用に適せず、又沿岸繫船に不便なり、人家二十六、内漁業を主とするもの十戸、飲料水及薪材は多量なり、敷網、地曳網を有す、主要漁採物は鯷、鱒、小鯖、鮓等なりとす。

地境津(地境津)松島津の南方一里許、郡の南端に位して杆城郡の猪津を距ること十八町なり、北東海に面す、沿岸水深五、六尋にして岩石多く繫船の便を缺く、人家十七戸、内漁業を爲すもの三戸、製鹽を兼ね、薪材及飲料水の供給に乏しからず、漁業は鯷、地曳網、鮓、敷網及鮓曳釣等とし、又鮓、小鯖、鮓等の漁獲多し。

第四節 杆城郡

本と高勾麗の達城郡(一名加)新羅守城と改む、高麗に至りて縣と爲し後郡に復す

ると共に今名に更へ高城郡を併領せしか其末年恭讓王の時還た分離し以て今日に至れり。

北方高城郡に南方襄陽郡に接し、東方一帯海に面す、鴈島に猪島、草島、竹島、白島、鵜島、無路島、廣浦、竹島等ありと雖もみな小島嶼に過ぎざるなり。

海岸より西方に連亘する脊梁山脈に至る五里乃至十里にして支脈縦横するか故に平地極めて狭し、然れども海岸附近は比較的緩傾斜地に富めり。

海岸線の延長は二十二哩に亘ると雖も大概砂濱にして平調なり、就中稍突出せるを北方に於ける猪津端、南下して巨津端、德浦端、望浦端とす、然れども顯著なる目標あらざれば航海者孰れを孰れと見分くること難し、津浦中稍可なるは巨津及鵜也津にして巨津は沿岸航行汽船の寄航地たり。

河川は郡の中央を流るるものに北大川、南大川あり、之れと並行して北に明波川、巨春川あり、南に城川ありと雖も孰れも細流に過ぎず。

湖沼には沿岸の北方に花津湖あり、中央に松池浦あり、南方に康湖、永郎湖等あり、此中康湖、永郎湖は淡水湖なるも他は海潮出入す。

境域

地勢

海岸線

河川

湖沼

耕地

區劃及臨海面

郡邑

交通

耕地に見るべきものならず、沿岸に於ける主要耕地は巨津及五里津附近なり、共に水田四、五百町歩あり、此等耕地は本郡一に位する米産地たり、賣買價格は水田一反歩、上田三十圓許、下田十二、三圓畑五百坪許にして十四、五圓なり。

山岳重疊綿亘すれども唯た稚松、雜木粗生するに止まり、森林として見るべきものなし。

郡内區劃十四あり、其中海に瀕するは縣内、梧岨、大岱、旺谷、竹島、土城の六面なり、縣内面は北方に位して高城郡に屬する安昌面に接し、以下順に並ひて土城面は襄陽郡に屬する所川面に接續す。

郡邑杆城は別名を遊城及水城と呼ぶ、郡内面に在りて巨津を距る西方二里に足らず、郡衙の外に巡查駐在所、郵便電信取扱所ありて、商業稍賑はへり、日本人の居住者は本年末現在九戸、十五人あり。

通信

場市

物産

水産物

製鹽地

通信は邑城に郵便電信取扱所あるを以て割合に便なり。

場市は邑城及土城面に屬する橋岩の二箇所にあり、開市は邑城二七▲橋岩一六とす、集散物は雜穀、魚類、生牛、綿布、金巾、其他雜貨にして集散區域は邑城中央以北一圓、橋岩は南部一圓なりとす。

物産は農産及水産を主とす、然れども平地狭く耕地寡少なれば穀類の産多からず。

水産物は鱧、鯉、鱒、鱈、鯛、鱈、明太魚、鮭、和布等にして就中鱧の漁獲多大なり、製鹽高は之れを觀察道の報告に従へば一年の産一千六十八石、價額三千二百五十八圓なり、其製鹽地を列記すれば左の如し。

- 縣内面 明波里、麻次津、草島、泗川
- 梧峴面 水外里
- 大堡面 松湖津
- 旺谷面 仙遊里
- 竹島面 五里津、望浦里

猪津

明波里

麻次津

- 土城面 橋岩里、天津里、沙津

縣内面

北方高城郡に屬する安昌面に、南方本郡の驪山及梧峴の二面に接し、東方一帶海に面す、本面臨海部落に猪津、明波里、麻次津、大津、草津、草島里あり、又屬島に石島及草島あり。

猪津(지진)本郡の北境に位し高城郡地境の南方一里許に在り、灣口東に面す、灣の南西角には海拔七、八十呎の小丘延亙して目標たり、部落は灣澳の西南に散在して人家五十六、其大半は漁を主とし地曳網一統、漁船一隻を有す、灣内各所に危岩點散し、地區も亦狭小なるを以て地曳網は現在の外容れ難し、然れども此處は潜水器船の根據地として適當ならん、主要海産物は鱧、鯉、鱒、目張、鮑、海苔、青苔等なり。

明波里(명하)猪津の南方明波川開口の左岸に位す、鹽業地にして漁は盛んならず、麻次津(마차진)猪津の南方に位す、灣口東に面して幅約百間あり、灣澳は一帶砂濱にして南北兩端即ち灣の岬角を爲す所は樹林繁茂して白砂青松碧海と映し風景

擲すへし、部落は沙濱に沿ふて五十六戸あり、内漁を營む者二十戸、薪水共に乏しからず、地曳網一統、漁船三隻あり、主なる海産物は鱈、鱧、鰯、目張、蛸、海鼠、和布等なりとす、此地に日本人の居住者一戸四人あり、又毎年春季に至れば其潜水器船の來漁少なからず。

大津

大津(オキナ)一に黄金津(オウゴン)と稱し麻次津の南方草島里の北方に位す、灣口東に面して背面丘陵を負ひ西北の風を避くるに宜し、灣の兩端には二、三の岩礁點在すと雖も危害なし、灣内水深一、二尋にして稍、大形の漁船を繫留し得へし、部落は灣澳の正面にあり、人家五十戸、其大半は漁を營む、此地薪材に乏しと雖も飲料水は多量なり、海産には鱈、鰯、鱧、鯛、明太魚等饒産し、春秋二季日本鯖、鱈漁船の來漁するものあり、又春季には潜水器船の根據するものあり。

草島里

草島里(カサジマ)大津の南方草津の北方に位し一帯沙濱にして前面に一小島あり、草島と呼ぶ、部落は灣の正面に在りて人家三十戸、内漁を營むもの十戸、背後に水田十數町歩あり、飲料水不足を告げざるも薪炭に乏し、海産物は麻次津に同じ。

梧峴面

北方縣内面に、西方驪山、邱山二面に、南方大岱面に接し、東方海に面す、沿岸に一大鹹湖あり、之れを花津湖といふ、湖に沿ふものに長坪津、花津浦あり、沿海に水外里、巨津あり、巨津は本郡一の良津にして汽船の寄航地なること前に一言したる所なり。

長坪津

長坪津(ナガヒラ)花津湖開口の右側に在りて人家二十餘、内漁戸五あり、地曳網一統、漁船三隻を有す、近海地曳に適せざるも大敷網を營むに恰適せり、鱈、鱧、鱧、鯛の回游多し。

巨津

巨津(オキナ)本面の南東端に位す、丘陵より成れる岬角は其東方に斗出して北及北東を保障す、然れども南東は露開なり、灣内より南西一帯は渾て砂濱にして地曳に恰適す、此地本郡に於ける唯一の汽船寄航地にして月二、三回定期船の寄航するあり、本津より北方長箭に至る航路二十九哩、南方襄陽郡の束津に至る十七哩餘とす、邑城に至る二里にして道稍、遠しと雖も平坦なれば車馬を通するに足る、南方水外里に至る一帯は耕地克く開拓せられ水田廣行するを見る、此は即ち本郡主要の米

産地たり。

此地本道中屈指の盛漁地にして日本人の居住するもの本年末現在三戸八人あり、主要漁獲物は鱈、鱒、鱒、鯛、海鼠、鮑等なり、鱈、鮑は春季三月より六月まで、秋季八月より十月までとし、鱒は九、十月の頃敷網を以て捕ふ。

水外里(今以)巨津の南西方一小流巨春川の右岸に在りて大岱面に屬する松湖と相對す、鹽業地にして漁は盛んならず。

大岱面

北方邱山及梧嶋の二面に、南方郡内及旺谷の二面に接し、其沿岸は直線を爲せる砂濱なり、臨海部落に松湖、盤巖、竹洞等あり。

松湖里(今以)は本面の北方に在り、蛇川を挟みて梧嶋面に屬する水外里と相對す、里人鹽業を營むものあり。

盤巖(今以)松湖里の南方に在りて前面は露開せる砂濱なり、里人地曳を營むものあり。

水外里

松湖里

盤巖

竹洞

仙遊

加津

公須津

松枝浦

旺谷面

竹洞(今以)盤巖の南方に在りて一溪流に沿ふ、此地にも亦鹽業を營むものあり。

北方郡内及大岱の二面に、南方竹島面に接し、其沿海に北川及南川開口す、臨海部落に仙遊、龍浦、加津、德浦、公須、松枝浦等あり。

仙遊(今以)は北大川の左岸に位し、龍浦(今以)は南大川の右岸に位す、共に製鹽地なり。

加津(今以)又可津と書す、南大川の左岸にあり、●德浦(今以)は本面中央突出部の北側にあり、前面は露開せる砂濱なり、●公須津(今以)は德浦の南方に在り、沿岸に岩礁錯落して地曳に適せず、●松枝浦(今以)は一大鹹湖に沿ふて竹島面に屬する五里津と相對す、以上みな小部落にして漁業振はす。

竹島面

北方郡内、旺谷の二面に、南方土城面に接し、臨海部落に五里津、望浦、掛津あり、沿海は

五里津

岩礁暗崑錯落すれども亦砂濱に富む、屬島に竹島、白島、鴛島、無路島等の小島あり。
五里津(오리진)本面の北方に位して鹹湖、松池浦の開口に位す、前面は緩慢に彎曲せる砂濱なりと雖も附近に岩礁散在し、又南北に二小島浮ふ、北なるは竹島にして南方なるは白島なり、竹島は古來箭竹の産地として名あるもの、而も其四近は海鼠、鮑其他海藻の産多し。

松池浦

松池浦(송지포)は旺谷面界に於ける一大鹹湖なり、又仙遊潭と呼ふ、浦の西北に一部落あり、湖と名を一にし、松池浦といふ、又松枝浦と書す、湖の南西隅に溪流注ぐ、此附近は水田克く開拓せられ本郡屈指のものに係れり。

望浦

望浦(망포)五里津の南方突角の西側に在り、故に西及北風を避け得へし、然れども其規模極めて小なり。

掛浦

掛浦(고포)望浦の南方一溪流開口の左岸に在りて望浦と相對す、前面は稍彎入すれども岩礁多し、其南方に浮へる一小島は即ち鴛島なり、本津にも亦製鹽に従事するものあり。

土城面

郡の南端に位して北方竹島面に、南方襄陽郡に屬する所川面に接す、臨海部落に橋岩里、鵝也津、清洞、天津、廣浦、沙津あり、屬島に廣浦、竹島、沙津、兄弟嶼あり。

橋岩里

橋岩里(교암)竹島面に屬する掛浦と接續す、場市あり、陰曆每一、六の日に開かれ本郡南部の集散地なり、漁は振はす、里人鹽業に従事するものあり。

鵝也津

鵝也津(아얌진)竹島面に屬する掛浦の南方に位して巨津を距る南八里半に在り、灣は東面して南北の二に分たる、北灣は口二十間許、水深一尋にして岩礁多しと雖も南灣は口約百間、水深二尋半、砂泥底にして環らすに丘陵を以てし、南西北の風を避くるに宜し、故に漁船の避港として從來日本漁夫間に其名知られき、然れども灣口には岩礁散在するか故に東北風少しく荒むときは出入甚た危険にして時に難破するものあり、部落は灣の西奥に在りて人家七十五戸、殆んど漁を生業とし、巨津と併ひ本郡の一盛漁地たり、漁船六隻、鱒、鱈、鮫、網二統を有す、主要海産物は鱈、鱒、鯛、鰹、明太魚、目張蛸、海鼠、鮑、和布、海苔等なり、日本人森萬次郎なるもの七、八年來此地に

居住して商業及漁業に従事す、邦人間に信用を博して森萬の名數十里外に知らる、此地毎年春季日本潜水器船の來漁するもの多く、其季に入れば灣内南北兩岸に納屋を構へて盛況を呈す、又近時沿岸航行の汽船月一往復寄航するものあり。

清澗里(チロシカ)、鵝也津の南十町に位置して一小溪流、至誠川の河口に在り、戸數三十餘戸、大半は漁に従事す、漁船十二隻、地曳網二、敷網一あり、海産の主なるものは鵝也津に同じ、沿岸白砂互りて風景に富む、關東八景の一として清澗亭の名あるは即ち本里なり。

廣浦(クワンボ)、清澗里の南方十七町許にあり、戸數五十餘、殆んど皆漁を生業とす、漁船十隻、地曳網、敷網共に二を有す、此地に淡水湖あり、庚湖即ち是れなり、又廣湖と書す、又汝隱浦と呼ぶ、面積五十町餘、水深一尋内外にして多少鱸、鮒、鯉等を産す。

砂津(サヅ)、廣浦里を距る南三十町、郡の南端に位し、戸數四十餘、其大半は漁戸にして漁船六隻、地曳網、敷網共に三統を有す、附近に面積約五百町、水深二、三尋に達する湖水あり、永郎湖と呼ぶ、湖岸曲折して奇巖點々たり、湖水に一小峰峙ち延ひて湖心に入る、山青、水碧相掩映して風景佳、此地も亦關東景勝の一として著名なり。

第五節 襄陽郡

沿本 本と高勾麗翼峴縣(一に伊文)、新羅郡と爲して守城と稱し、高麗高宗の時襄州と呼ぶ、本朝太宗十三年都護府と爲し、其十六年今名に改む。

境域 北方杆城郡に、南方江陵郡に接し、東方一帶海に面す、屬島二あり、北方に在るは卵島にして、南方江陵郡界附近に浮へるは鳥島なり。

地勢 西方一帶分水嶺に限られ、其支脈域内を縦横綿互すること、杆城郡に異ならず、然れども山頂概ね廣澗にして比較的峻險ならず、海岸附近に在りては緩傾斜を爲せる丘陵地多し。

海岸線 海岸線は其延長約二十二哩に互ると雖も概ね砂濱にして直線を爲せり、沿岸中稍突出せるは北境なる束津の飛仙場、南下して雲津、端山、端水、山端、其士門、端南、涯端等なり、港灣の良好なるものあらず、就中稍可なるは束津及雲津なり、共に郡の北方に位せり、而して束津は本郡に於ける唯一の汽船寄航地たり。

河流 數條ありと雖も皆細流に過ぎず、就中稍大にして名あるを南江とす、郡の中

央を流れ郡邑の南方を通して海に入る、舟楫の便を缺くと雖も多少鮭其他淡水魚を産す

山林

山林は概して杆城郡に等し、多くは雜木茂生するを見るのみ、前津附近に松樹林一所あり、遠く一里に亙りて面積約二萬坪に及ぶ、中に廻り三尺乃至五尺に達する大樹少なからず。

湖沼

湖沼に青幸湖、雙湖、庚湖あり、青幸湖は北境なる永郎湖と相並ひて就中大なり、鹹水湖にして周圍約五十町に及び、水深き處二尋内外に達す、雙湖は中央なる水山津附近に在りて最も小なり、庚湖は南端南涯附近に在りて其大さ青幸湖に次ぐ、此二者も亦多少鹹水を混す。

區劃及臨海面

郡内區劃十二面、内海岸を有せるを所川、道門、降仙、沙峴、位山、東面、南面、縣北、縣南の九面とす、而して其配列は所川面は最北に位して杆城郡に屬する土城面と界し、道門以下順に並ひて縣内面は最南に位し、江陵郡の新里面に接續せり。

郡邑

郡邑蕨陽は位山面に在りて東津を距る南西四里に位す、昔時都護府を置かれし所にして人煙稍密なり、郡衙の外に財務署、郵便電信取扱所、巡查駐在所あり、本年末

交通

日本人の現在者は十五戸、二十人にして商業稍賑はへり、交通は江陵邑を主とす、同邑に至る十二里なり、稍遠しと雖も道險ならず、車馬を遣るに支へなし、海路交通は東津に汽船寄航すれども月一往復に止まれり、其直接交通地は北方杆城の巨津、南方江陵の注文津なり。

通信

通信機關を置かるるは唯た郡邑蕨陽あるのみ、然れども其地に在ては電報をも取扱はれて稍便なり。

場市

場市は邑下、沕溜、洞山の三所に在り、其開市は邑下四、九、▲沕溜五、十、▲洞山五、十にして邑下最も盛んなり、集散物貨の主なるは生牛、魚類、綿布、金巾、棉花、石油等とす。

物産

物産は雜穀、牛、麻布、及魚鹽等なり、牛は年々二、三百頭を出し、麻布は三千餘疋を製産す、牛は元山又は釜山在住の日本商人買収するもの少なからず、麻布は附近場市に出して販賣し、又元山、京城地方へ輸送せらる。

水産物

水産物中主要なるは鱈とす、これに亞くは鱒、鱈、鯖、鯛、鮭、鮪、海鼠、貽貝、和布、鮭、鱒等にして一年の産額二千三、四百圓と稱す。

製鹽高及製鹽地

食鹽の製産高は之れを觀察道の報告に依れば平均一年の産二千三百四十五石、

價額四千六百八十八圓と稱す、其製産地を列記すれば左の如し、

所川面	扶月里	南面	如雲浦
道門面	内湧溜	縣北面	下光丁
沙峴面	釘岩里	縣南面	洞山里、南涯、北境
位山面	造山里	東面	柯坪、學浦、屈浦

所川面

北方杆城郡に屬する土城面に、南方本郡の道門面に接す、海岸線は短小ならずとも、雖も永郎湖、青草湖等の大鹹湖臨海地域の大半を填塞するか故に餘地狭く、部落には地境、東津、扶月里、外瓮津あるのみ、而して其沿海に卵島、浮ふ。

東津(今、シラ)杆城郡砂津を距る南十町に在り、南北に小突出ありて灣形を造る、而して灣澳の西より北方なる突角即ち飛仙場に互りて稍、高き丘陵環り以て西及北を屏障し、且つ其突角附近には露岩點々并列し、灣口に臨みて外海より襲來する波濤を碎く、故に本津は西及北の風を避け得るのみならず、東風をも稍、凌くに足れり、灣

東津

扶月里

外瓮津

内水深約三尋、底質砂土なり、大抵の船舶出入碇泊に支へなしと雖も、灣内廣からず、且つ適當に灣口を屏障するものあらざれば、元より良港と云ふべきにあらず、唯た郡内各津浦中稍、可なるものに屬するのみ、されど本津は郡内唯一の汽船寄航地にして、月一往復定期に寄航するものあり、此地薪材及飲料水共に豊にして、入津船舶の供給に支へなし、灣口及其附近には岩礁出沒すれども、灣内は無碍なり、地曳網及沖取網等の使用に支へなし、漁獲多きは鱈にして、其他鱈、鱈、鱈等これに次ぐ、部落は灣の北西に在りて、戸數七十八、人口三百六十有餘を有す、内漁を營むもの六十七戸あり、漁船十六隻、地曳網三統、刺網六統を有す、春秋二季日本漁船の來漁するもの少なからず。

扶月里(今、シラ)鹹湖、青草湖の南岸に位す、漁は鱈漁を主とす、又製鹽に従事するものあり。

外瓮津(今、シラ)は面の南端に在りて、道門面に屬する内瓮津と共に一部落を爲せり、灣は一小丘より成る突角即ち瓮津端の南北兩側に在り、乃ち北側なるは本津にして、南側なるは内瓮津なり、本津は東面して弓状を爲すの、外何物の灣口に屏障す

るものあらされは、元より風波を凌ぐに由なしと雖も、内瓮津は漁船を繋ぎて安全なり、状況は其地に於て述ふる所あるへし。

卵島(ワシ)は東津の南方一湮内外に浮へる、周回三町許の小島にして、海圖三百六號(明治四十三年六月十八日刊行)に鳥島と記さる、熊笹蒼々として茂生すれども、樹木の大きなものあらず、其最高は八十三呎なり。

道門面

北方所川面に、南方降仙面に接して、其海岸線は極めて短少なり、故に臨海部落には内瓮津及内瓮溜津の二あるのみ。

内瓮津(ウツシヅ)前示の如く所川面に属する外瓮津と南北表裏して一部落を爲せり、本津は瓮津端に向つて南より北方に彎入し、灣口極めて狭く、恰も巾着状を爲せり、故に東西南北如何なる風波も襲來するの虞なしと雖も、灣口狹隘なるに、加ふるに附近には岩礁無數に散在せるを以て、風波に際して入津せんこと至難なり而も、灣内も亦廣からず、僅かに數隻の漁船を容るゝに足るのみ、但し風波の襲來に先た

卵島

内瓮津

内瓮溜

沓溜

ち入津せは最も安全なり、人家は内外瓮津を合せて約五十戸、農を主とし、漁は鱈地曳網、鱈刺網、鮮流網等行はる、漁船數隻あり。

内瓮溜(ウツシユ)外瓮津の南方に位す、一帯沙濱にして、繫船便ならず、漁は鱈地曳を主とし、又製鹽に従事するものあり。

降仙面

北方道門面に、南方沙峴面に接す、海岸線短少にして、其臨海部落には沓溜唯一あるのみ。

沓溜(ウツシユ)は道門面に属する内瓮溜の南方に位して、一溪流に沿へり、郡内に於ける場市の一にして、陰曆每五十を開市日とし、集散區域は本郡沿海北部の地及杆城郡に属する南部の地域とす。

沙峴面

北方降仙面に、南方位山面に接す、其沿岸稍突出せるは、即ち洛山端なり、臨海部落

釘巖里

釘巖里(釘巖)は降仙面に屬する沔溜市の南方に在る農村にして里人製鹽に従事するものあり。

後津

後津(辛烈)本郡沿岸の一突出洛山端の北側に在りて露開せる砂濱なり、漁は鱸地曳網、鮓流網等行はれ一年の漁獲一千圓許と稱す。

前津

前津(烈烈)又北津ともいふ、洛山端の南側に在りて後津と南北相表裏す、里人農を主とし漁を生業とするは少なし、漁採物は後津と等しく其漁獲高は一年二、三百圓に過ぎずといふ。

位山面

郡の中央に位して北方沙峴面に、南方東面に接す、土地は平坦にして海岸は渾て砂濱なり、其中央に南江開口す、河口右岸に造山里あり、之れを本面唯一の臨海部落とす。

造山里

造山里(五山)南江下流の北岸に在り、南江の河口は堆積土砂横はりて水路を狹窄すと雖も而も漁船帆装の儘入津に支へを見す、且つ江内は稍、廣く水も亦淺からざれば普通の帆船を繋ぐに足れり、此地概勢此の如くにして郡邑に至る最も近し、故に其吞吐口として商船の出入絶へず、例年冬季十一月末頃より薄氷を結ふと雖も船舶の出入に大なる障害を與へず、翌年三月半頃より解氷す、漁業は鱸地曳を主とし、又南江にて鮭其他淡水魚を捕ふ、又鹽業を營むものあり。

東 面

北方位山面に、南方南面に接す、其沿岸に於ける突角は即ち水山端なり、臨海部落に柯坪里、鰲山津、水山津、學浦、屈浦等あり。

柯坪里

柯坪里(カヒン)又葛坪里と書す、南江の左岸に位せる一小部落にして里人主として農に従事し、又鹽業を營むものあり。

鰲山津

鰲山津(オサシ)南江河口の南方一湮餘に在り、●水山津(オサシ)鰲山津の南方水山端の南側に在り、此附近の海岸線は多少屈折を爲すと雖も港灣を形成するに至らず

學浦

祥雲里
如雲浦

第二章 江原道 第五節 襄陽郡 南面 祥雲里 如雲浦 縣北面 下光丁、其士門津

二津の中間に雙湖あり、淡水湖にして鮎を産す。

學浦(學浦)水山津の南方に在り●屈浦(屈浦)學浦の南方に在り、二浦共に漁は鱸地
曳を主とし孰れも鹽業に従事するものあり。

南面

北方東面に、南方縣北面に接し、其沿岸は一直線を爲せる砂濱なり、而して其中央
に稍大なる一溪流注く、此の溪流の河口南北兩岸に部落あり、北方なるは祥雲里(祥雲里)
にして南方なるは如雲浦(如雲浦)なり、共に農村に係ると雖も如雲浦には鹽業に従
事するものあり。

縣北面

北方南面に、南方縣南面に接し、沿岸に稍著しき突角あり、其士門端即ち是れなり、
同岬角以北、杆城郡界に至る間は海岸附近緩傾斜の小丘又は平地にして沿岸に登
津、浴山、水山等の突角ありと雖も概して一直線を爲せる砂濱なり、而して同岬角以

下光丁

其士門津

北盆里

南江陵郡界に至る間に海拔四五百呎より八百二十三十呎に達する山岳、丘陵海に枕
みて海岸に險崖地少なからず、本面臨海部落に下光丁、其士門津あり、又屬島に屬島
あり。

下光丁(下光丁)其士門端の北方一小溪流に沿ふて海岸は砂濱なり、里人鹽業に従
事するものあり。

其士門津(其士門津)其士門端の南方に在り、東南に面して北西の二面繞らすに高丘
を以てし且つ灣口の東端には巨巖岩礁散在して其前面に浮へる島島にまて連続
す、故に東風をも凌くに足ると雖も時化に方りては繫船に耐へ難し、人家三十餘戸、
漁を主とし、鱸地曳、鮎流網、鱒刺網等行はる、漁船五隻あり。

縣南面

北方縣北面に、南方江陵郡に屬する新里面に接し、其沿海に北盆里、洞山津、廣津、南
涯津、地境津等あり。

北盆里(北盆里)其士門津の南方に位して部落は海岸より數町の溪谷に在り、農を主

第二章 江原道 第五節 襄陽郡 縣南面 北盆里

とし、又漁業に従事するものあり。

洞山津(동산진)北盆の東南方に方り小岬角東方に突出するものあり、其南北兩側に小灣入を爲すもの即ち洞山津なり、岬角北側の灣入は稍廣しと雖も北東に面して且つ何物の屏障なし、故に風波荒るれば碇繫難し、之れに反して南側の灣入は東南に面し北部は一帶丘陵に依て蔽はれ東南は巨巖點々無數に叢立して波濤を遮るか故に東及南の風尙は避くるに足り、碇船安全なること本郡一に位せん、然れども灣内狭小にして多數の船を容れ難し、部落は斗出地に散在して北灣及南灣に臨み、戸數四十餘戸、其大半は漁を主とし、鱸地曳、鱒刺網、鱒流網、疑餌釣等行はれ、漁船八隻を有す、此地に場市あり、毎月二、七の日開市し、集散稍盛んなり、又鹽業を營むものあり。

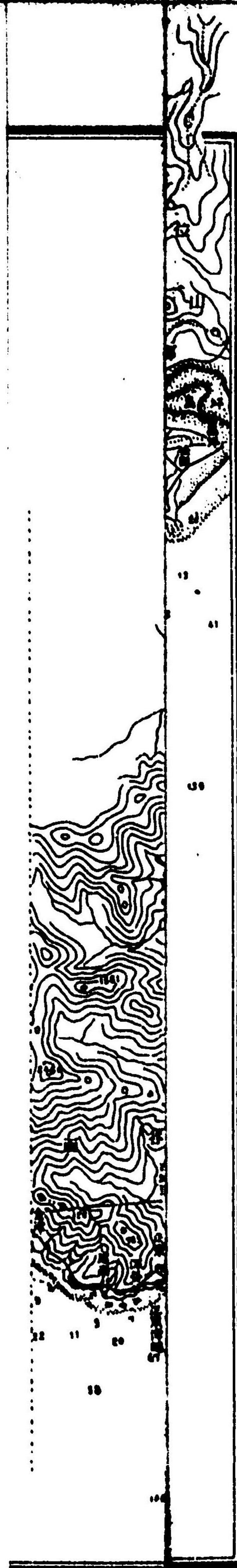
廣津(광진)洞山津の南方一小溪流の南岸に在りて沿岸小灣入を形成す、主として漁を營み、又鹽業に従事するものあり。

南涯津(남연진)廣津の南方なる南涯端の南側に於ける一小灣なり、灣の北東角即ち南涯端の東南には巨巖岩礁錯落して稍、東の波浪を遮断せり、然れども本灣も亦規

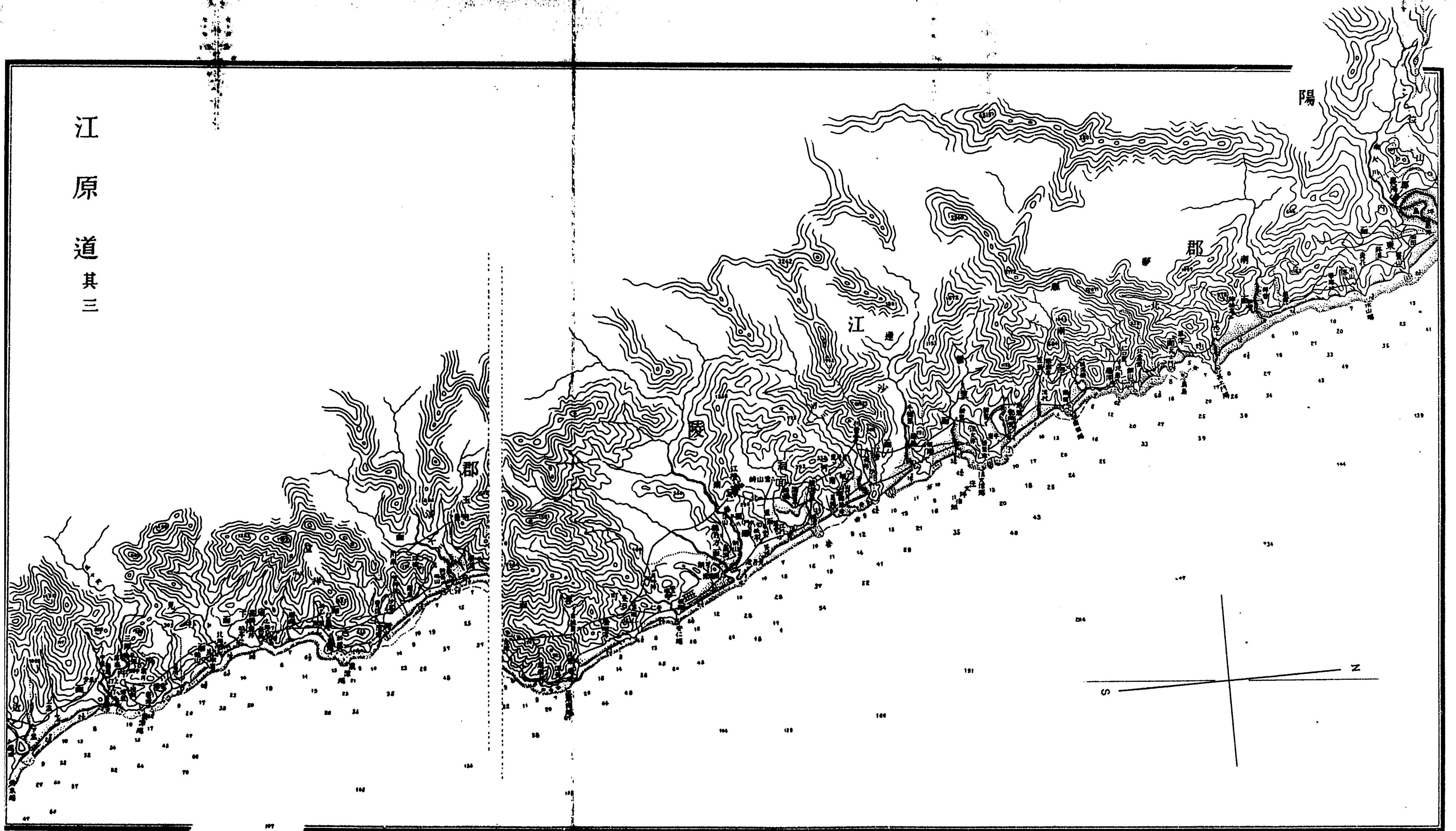
洞山津

廣津

南涯津



江原道其三



模小にして漁船數隻を容るゝに足るのみ、人家四十戸内外大概は農家にして漁戸は二、三戸に過ぎず。南涯端より廣津に至る間は直線を爲せる砂濱なり、其間沿岸附近に一湖あり、庚湖即ち是れなり、湖は又廣湖とも云ふ、水深二尋内外にして鹹水を混し鱈、鰻を産す。

第六節 江陵郡

古へ濊國(濊國又濊國)の據る處、高句麗之れを略して河西良(又河羅州)と稱す、新羅の時小京と爲せしも地味耦に隣れるを以て改めて州とし、後溟州と稱したり、高麗太祖に至り東原府と號し、成宗の朝に河西府と稱し、尋て溟州都督府と爲し、牧に進む、後團練使と爲し、又防禦使に改めしか、元宗の朝都護府に陞せて慶興と稱し、忠烈王の時今名に改め、又恭讓王に至りて大都護府に陞せたり、本朝之れに因りしも今より十數年前郡と爲し以て今日に至る。

北方襄陽郡に、南方三陟郡に接して、東方一帶海に面す、東西約十四里、南北十五里

餘にして其廣袤本道各郡中第二位を占む。

郡邑江陵の南東方なる安仁以北襄陽に至る間は其西方に五臺山及大關嶺等の高岳並列せるにも拘はらず其海岸附近は割合に傾斜緩なる丘陵又は平地に富めり殊に江陵邑附近即ち南川流域一帯に於ける平地の如きは嶺東稀に見る所なり本郡中部以北の地勢此の如くなるに反し南部即ち安仁津以南一帯三陟郡界に至る間は險山峻峰重疊して海に迫り平地を除くこと極めて寡少なり。

地勢此の如くなれば沿岸も亦これに伴ひ其北一半即ち北方襄陽郡界より安仁津に至る間は渾て砂濱なるも安仁津以南は砂濱險崖相半せり而して海岸線の延長は北一半十五里にして南一半も亦相等しく通して三十餘里に及へり然れども全線殆んど一直線を爲して屈折少なく沿岸中多少突出せるは北方に於ける注文津端南方に於ける正東端あるのみ而も此二突出と雖も著しきものにあらざれば元より航海者の目標に供することを得ざるなり形勢此の如くなれば港灣の良好なるものなく就中稍可なるは注文津沙火津及南項津(二)に安木あるのみ三津中注文津は本道港灣中の名あるものに係ると雖も郡邑を距ること遠し故に定期船の

海岸線

地勢

河流

寄航地は南項津を撰めり。

河流は數條ありと雖も其中稍大なるは北川及南川の二流に過ぎず北川は五臺山群峰東側の諸水を聚め東流して沙火面に屬する傾津に至り海に入る本川は流域最も長大なりと雖も峻峰高岳の間を通過し來るものにして河床の傾斜甚だ急なり故に平素水を湛へる少なしと雖も一朝降雨あれば奔湍矢の如く四近に氾濫するを常とす南川は城南川といふ大關連嶺に水源し郡邑江陵の南方を過ぎ召見南項津の間を貫きて海に入る本川は河口より近距離の間舟楫の便あり。

沼湖に香湖鏡浦楓湖あり香湖は郡の北境附近に鏡浦及楓湖は中央に位して孰れも海水と相通す鏡浦最も大にして周回二里水淺く僅に人肩を没するに過ぎざれども頗る清澄にして水底透徹一碧鏡の如し故に此名あり關東八景中の最たるものとして古來其名高し。

森林は大關嶺又は邑を距る西方十三里許なる毛老峴山に鬱蒼たるものあり樹木の種類は松、栗、樺、山毛、樺等にして嶺東中著名のものたり。

郡内を區劃して十五面とす内海岸を有するは新里沙火河東丁洞南一里德方資

可谷、玉溪、望祥の九面とす、而して新里は最北に位して襄陽郡に接し、望祥は最南に在りて三陟郡に界せり。

郡邑江陵は南一里面に在りて郡の殆んど中央に位す、往昔畿國の都したる所に於て高勾麗其地を併せし以來新羅、高麗を経て近代に至るまで幾星霜を重ねるも常に此地に首府を置き以て嶺東一帯の地を支配したり、小京(新羅善德王の時命名す)、東原京(高麗太祖十九年改稱)、河西府(高麗成宗二年改稱)、溟州府(同五年改稱)、慶興府(元宗元年改稱)等と稱するは即ち此地の古名とす、此地此の如き沿革を有せるを以て人煙稠密なる、商業の盛んなる、嶺東一に位し日本人の居住者も亦少なからず、昨年末現在の調査に従へば戸數五十一戸、人口一百六十五人なるを見る、郡衙の外に警察署、郵便電信取扱所等あり。

交通は海岸街道及江陵、忠州街道と通するあり、而して海岸街道は江陵邑以北平坦なりと雖も其以南は險路多し、江陵、忠州街道は渾て險惡にして車馬を通し難き場所少なからず、江陵邑より北方諸邑を経て元山に至る六十里、南方三陟以南の諸邑を経て大邱に至る七十六里、西方平昌邑に至る十七里二十町、同邑寧越及忠清北道の堤川を経て忠州に至る三十七里三十一町とす、海路交通は南項津に定期船寄

江陵邑

交通

航するあり。

通信機關は郡邑に郵便電信取扱所唯一あるのみ、然れども北方元山、西方忠州、西方大邱及海路便等四方の集配あり、而して忠州、江陵間は月五回の差立にして其到達日數は四日目乃至六日目 ▲江陵、大邱間月五回にして四日目乃至九日目 ▲江陵、釜山間同上 ▲江陵、元山間一日一回の差立にして到達は二日目乃至十二日目とす、場市は邑下、連谷、玉溪の三所に在り、開市は邑下二、七 ▲連谷三、八 ▲玉溪四、九にして主なる集散物は綿布、生麻、石油、生牛、牛皮、魚類、海藻等とす。

物産は雜穀、麻、藥草、蜂蜜、梨、栗、銀杏、柿、木苳、生牛、海産物等にして、生牛は京城地方に輸送せらるるもの一年約三百頭に上り、一頭の値段大概五貫文乃至十五貫文なりといふ、又弓幹に用ふる桑樹及竹箭は古來本郡の産物として著名なり。

水産物の主要なるものは鱈、鱒、鱒、鱒、鯛、鰻、鮭、比目魚、蛸、海鼠、鮑、蛤、和布等にして一年の産高約四、五千圓とす。

製鹽高は之れを觀察道の報告に見るに一年の産五十四萬四千二百五十餘斤にして價額一萬六千一百七十餘圓と稱す、其製産地を列記すれば左の如し。

製鹽地

第二章 江原道 第六節 江陵郡 新里面 牛巖津

新里面	碑石里	堤長浦	河南面	揮羅屯	尊浦里
沙火面	柯坪里		南一里面	見召津	
資可谷面	鹽田里	正東里	玉溪面	助山里	
望祥面	沙峰里				

新里面

北方襄陽郡に屬する縣南面に、南方本郡の沙川面に接し、其沿海に堤長浦、碑石里、牛巖津、梧里津、注文津等あり。

牛巖津(우암)東面する砂濱にして屈曲少なく繫船に便ならず、然れども地曳の好漁場なり、戸數二十四、人口百十有餘、農漁兼業にして漁船八隻、地曳網二張、刺網三張を有す、重なる水産物は鰻、鱒、鱈、鱈、比目魚、鯨、蛸、鯛、和布等にして▲鱈地曳の漁期は春季四、五月、秋季八、九月の兩期とし▲鱒、鯨地曳は六月より十月まで▲鯨地釣は八月より十一月までとす、遠く出づる時は沖合二十里内外の處に至ることあり、本津の北東五、六哩の沖合に干出一呎の露岩あり、又東方より南方注文津端に至る間岩

牛巖津

梧里津

注文津

礁多し、又本津の北方に當り稍大なる鹹湖あり、これを香湖と爲す。

梧里津(우리진)斗巖津の南方に接續する一小部落なり、漁は大概斗巖津と同様にして特記するの價値あらず。

注文津(주문진)南面して稍北方に彎入す、其南東角は即ち注文津端なり、丘陵西北を環り延ひて岬端に隆起す、故に北西風を避くるに足る、本津は本郡第一の良津にして汽船碇泊し得へしと雖も南及東の風浪を避くるに由なし、人家八十三戸、灣の北奥にあり、内漁業を主とするもの二十有餘、農商兼業のものも亦少なからず、地曳網二統、刺網五統、漁船八隻を有し、漁業甚だ盛んにして最も地曳網の漁場に富めり、漁採物の主要なるものは鰻、鱒、鱈、鯛、鯨、比目魚、鯨、大蛸、和布等にして鰻の漁場は沖合四、五哩、水深一百四、五十尋の處、漁期は十月より翌年二月まで、一期の漁獲豐漁なれば一萬尾内外、不漁なるも尙ほ二千尾内外に達す、本津は日本潜水器船の重要な根據地にして盛漁期に至れば其幅狭するも二、三十隻に及ふことあり、納屋は灣内の北奥部落の附近に構へらる、民情靜穩なり、薪材の供給に不足を告げずと雖も飲料水は質良好ならず、此地には巡查駐在所あり、日本商人も亦居住す、本年末現在調

査に従へは其戸數七戸にして人口男十四、女七、通して二十一人なりとす。

沙川面

北方新里面に、南方河南面に接し、其沿岸は直線を爲せる砂濱なり、中央に一溪流開口す、北川即ち是れなり、本面臨海部落に領津、沙川津、沙川鹽田村あり。

領津(영진)注文津泊地の西方に位して北方遙に注文津を望む、沿岸砂濱にして露開なれば繋船に便ならず、然れども地曳網の好漁場なり、人家約四十、内漁業者三十戸にして漁業盛んなり、▲鱈の漁期は春季四、五月、秋季八、九月にして▲鯛は四、五月の頃▲鱒、鱒は七、八、九月の頃漁獲多し、其他漁採物の主なるものは比目魚、鱧、大蛸、和布等とす。

沙川津(사천진)一に沙月又沙火といふ、領津の南方一溪流沙川の右岸に在り、河口狭く且つ岩礁散在するを以て出入に際し深く注意を要すれども此を通過すれば江内稍、廣く漁船二十餘隻を繋ぐに足る、然れども水深くして大形の船を入るること不可能なり、本津を以て郡中三良津の一に數へるは唯た漁船避泊に安全なるに止

領津

沙川津

河坪里

揮羅里

尊浦里

まれり、但し本津の正面即ち東に面する場所は砂濱にして屈折少なく、又障屏なきを以て避風に適せず、然れども地曳漁場に恰適す、人家は正面砂濱の澳より背後なる河流に沿ふて部落す、即ち外海と河流との中間に挟まれてあり、人家八十餘戸、其大半は漁戸にして漁業頗る盛んなり、人情醇樸にして薪水の供給豊かなり、例年日本潜水器船の來漁するもの少なからず、漁採物の主なるものは鱈、鱒、鱒、鱒、比目魚、鱧、大蛸、和布、海苔、貽貝等なり、鱈の漁期は春季八、九月にして▲鱒は八月より十月まで▲鱒は十一月より翌年正月までとす。

河南面

北方沙川面に、南方丁洞面に接し、沿海に揮羅屯、尊浦里あり、●揮羅屯(가토리)は沙川の南方に位して其前面は直線を爲せる砂濱なり、●尊浦里(진포)は揮羅屯の南方に位して一小流の注口に跨る、此小流は内廣まり一浦を形成す、之れを尊浦といふ。

二里共に漁は鱧地曳を主とし、又鹽業に従事するものあり。

丁洞面

北方河南面に、南方南一里面に接し、其沿海は一大鹹湖を以て填塞せられ餘地を存せず、此鹹湖は即ち鏡浦なり、湖に沿ふものに望海亭あり、小丘に倚り南面して湖に臨む、景勝の區にして關東八景の一たり。

南一里面

北方丁洞面に、南方南川を以て德方面と劃し、沿岸は一直線を爲せる砂濱なり、沿海に江門洞、八松亭、見召津等あり。

江門洞(カクシム)河南面に屬する鏡浦開口に跨りて地曳の好漁場なり、里人漁を生業とするもの多く、此附近に於ける一盛漁地たり、主要漁採物は鱧、鱧、鱧、鯛、比目魚、和布等とす。

八松亭(パムシム)は江門洞の南方に位す、里人農を生業とし、漁は主として鱧地曳を

八松亭

江門洞

見召津

營むに止まれり。

見召津(カクシム)南川の北岸に位し、德方面に屬する南項津と相對す、人家五十餘戸、大部落を爲すと雖も住民は農を主とし、漁は鱧地曳に止まれり、又鹽業に従事するものあり。

德方面

北方面南一里面に、南方資可谷面に接し、其海に沿へるは甚だ小區域に止まれり、隨て其臨海部落には南項津唯た一あるのみ。

南項津(カクシム)一に安木と稱す、南一里面に屬する見召津と相對して南項津の南岸に在り、河口廣からすと雖も漁船の出入を防げず、而も河内に入れば稍廣く其十數隻を容るるの餘地あり、殊に本津は郡邑江陵に至る最も近く、道路平坦にして往來便なれば其吞吐港として商船の出入繁し、本津は從來日本潜水器船の寄航するもの多かりき、然るに近時江陵邑の發展に伴ひて沿岸航行汽船月一往復寄航するに至れるを以て此地も亦漸く進境に向はんとせり、本津河口の北岸なる突角附近に

南項津

は岩礁散在するを以て出入の船警戒を加ふへし、部落は河の南岸に在り、戸數五十八、漁を主とするもの八分を占む、漁船九隻、地曳網三統、刺網六統を有す、薪水共に豊かなり、東方外海に面する沿岸は砂濱にして地曳網の使用に適す、漁採物は鰻、鱈、鯛、鱈、鱈比目魚、鱈、大蛸等にして、▲鱈は六月より八月まで、▲鱈は九月十月を期節とす、又南川には晩秋より冬季に涉りて、鮭魚湖上す、本川の鮭は味ひ甚た佳良なるを以て名あり

資可谷面

北方徳方面に、南方玉溪面に接す、其沿岸は北方徳方面界より安津端に至る間砂濱なれども同岬角以南玉溪面界に至る一帯は險崖地多し、海岸線は本郡中にて最も長く其延長は約八哩に及ぶ、隨て臨海部落少ならず、主なるものに安仁、燈明津、古城里、正東、深谷、建南等あり。

安仁津

安仁津(安仁)本郡沿岸の平地と、丘陵地との分界點に方り、低丘東に延ひて小突角即ち安仁端を爲し緩慢なる一灣を形成するものあり、之れを安仁津と爲す、灣は南

燈明津

東に面して露開なれば繫船便ならず、部落の北方に一溪流を通し岬角の北側に開口す、其北方に一鹹湖あり、之れを楓湖といふ、水路溪流と相通して一口を爲せり、湖と外海との間人家點々す、之れを安仁鹽田村といふ、附近に鹽田開拓せられて皆製鹽に従事す、故に此名あり、安仁は往時鎮を置かれ萬戸の地たりしなり、廢鎮以來歳を閱すること幾十年今や當時の觀なしと雖も尙ほ人家五十餘、人口二百二十餘を算す、漁業は鰻地曳網、刺網等行はれ、其他鱈、鱈、鱈比目魚、鱈、鮑、和布等の産あり、漁期は鰻は五月より十月まで、▲鯛は五月、▲鱈は六月より九月まで、▲鱈は八、九、十月、▲鱈は十一月より翌年二月頃までとす、此地に本年末現在日本人一戸、三人あり。

古城里

燈明津(燈明津)西方山に倚りて前面は露開せる砂濱なり、主として鰻、小鮭を漁獲す、此地に日本人の居住者一人あり。

正東津

古城里(古城里)燈明津の南方に位す、里人農を主とし、漁は振はす。正東津(正東津)古城里の南方一溪流注口の左岸に在りて前面は多少砂濱を有すと雖も南方の突出地即ち正東端に至る一帯は概して險崖地なり、本津は此地方に於ける要地にして日本人の居住者本年末現在二戸七人あり、住民は農を主とすれど

も亦漁を營むものあり、而して漁は鯖、曳釣、鱒、流網、鱒、刺網等行はる。

深谷(심곡)正東端の南側に位して北西に高丘連互し延ひて正東端と成り、海に没して夥多の岩礁と成る、されは此等は相待つて多少外海より襲來する波濤を遮断するの用を爲すと雖も時化に方りては到底安全なること能はず、正東端は日本漁夫、東學黨の舟と呼ぶ、蓋し前年東學黨蜂起に際し其潜水器船大なる傷害を被むりしに因る、人家六十餘戸、農漁相半す、今も尙ほ日本潜水器船時に來漁するものあり、主要水産物は鱒、鱒にして其他は大概安仁津に同じ。

建南津(건남진)深谷の西南に位して南東に面す、沿岸は岩礁多くして繫船に便ならず、部落は玉溪面に跨りて人家四十餘戸、其大半は漁を營めり、漁は鱒、曳釣七月より十月まで、▲鱒流網四月より七月までとす。

玉溪面

北方資可谷面に、南方望祥面に接し、其沿岸は北方資可谷面に屬する正東端及南方望祥面に屬する漢津端の突出に依りて一帯に緩慢なる凹入を形成し、其中央に

金津

一溪流注きて砂濱に富めり、本面沿海部落に建南、金津、廣津、助山、新基、道直等あり、但し建南は資可谷面に跨る、其概況は前示したる所なり。

金津(금진)建南の南方に位して其沿岸は砂濱なり、前面に岩礁横はりて稍、波浪を遮さると雖も區域狭くして僅に四五隻の漁船を容るるに足るのみ、部落は灣の北西隅一小溪流の左岸に在りて人家八十餘戸、多くは農を生業とすれども漁を營むものも亦少なからず、鱒地曳網、鱒、鱒地曳網各二統を有す、薪水共に豊富なり。

廣津(광진)金津の南に位して本面の中央を貫流せる溪川の開口する右岸に在り、沿岸は砂濱にして繫船便ならず、此地本郡に於ける場市の一にして開市は陰曆毎一、六其集散區域は南部一圓とす、住民は農を主とし商業を營むものあり、又鹽業に従事するものありて稍、盛んなり、漁は鱒地曳を主とし、其他の漁業は盛んならず、

助山(조산)五斗溪流開口の南岸に位して廣津と相對す、此地も亦農及鹽業を主とし漁は振はず。

新基(신기)助山の南方に位す、一直線の砂濱なるも部落の北端二十餘町に岩礁蟠屈して波浪を遮断す、故に其内方には二、三の小汽船尙ほ繫くを得へしと雖も時化

を凌ぐに足らず、住民は専ら農を業とし、漁は唯た餘業とするに過ぎざるなり。

道直(도직)新基の南方に在り、沿岸新基と等しく直線を爲せる砂濱にして地曳の好漁場たり。

沙峯洞(사봉동)玉溪面界に近く一小溪流の開口に位し沿岸は平砂なり、里人農を主とし、又製鹽に従事するものあり。

漢津(한진)郡の南端に於ける突出地即ち漢津端に在りて小灣を形成す、灣口北面して周圍繞らすに峨々たる岩礁を以てす、故に一見凄然として危険に耐へざるの感あり、而も此恐るへき岩礁中俊に漁船二十餘隻を繫留するに足り、尙ほ且つ大抵の時化にも安全ならんとは意想外の憾なき能はざるなり、加ふるに灣内緩傾斜の砂濱あり、故に若し大時化に際會せんか船を曳揚ぐるゝこと容易なり、然れども岩礁竝立して灣口狭きか故に一朝海荒るれば怒濤岩を噛みて凄愴たるの狀言語に絶へ、船舶の出入企て及ふへきにあらず、人家二十餘戸、農を主とし、漁は餘暇に營む、沿岸岩礁多きを以て地曳網に適せざるも少しく沖合に出つれば流網又は刺網を使用し得へし。

漢津

沙峯洞

道直

日本漁夫は本津を瀬の港といふ、蓋し荒瀬中に在るを以てなり、本津は此地方に於ける避泊地なるのみならず、潜水器船の根據地とし適當なり、附近海鼠鮑の漁場多く、例年日本器械船の來漁するもの少なからず。

望祥面

北方玉溪面に、南方三陟郡に屬する道丁面に接し、沿岸は概して險崖地なり、本面臨海部落の主なるものは沙峯洞、漢津、於達、墨湖、外墨湖等なりとす。

於達(오달)漢津の南方漢津端の略中央に位す、沿岸の形狀は漢津と等しく岩礁錯落して繫船可ならず。

墨湖(묵호)●外墨湖(외묵호)漢津端の南側に於ける灣入にして墨湖は北東に、外墨湖は西南に在りて相對す、灣は南東に面して北西環らすに高丘を以てし、尙ほ其東南角の前面に岩礁横はりて稍、東の波浪を遮斷す、規模小ならず水深六、七尋に達するを以て汽船尙ほ且つ避泊し得へく、本郡良津の一に數ふへし、鱸地曳網、鰈刺網、鮭曳釣等行はれ、又大蛸を産す。

墨湖

於達

第七節 三陟郡

沿革

古へ悉直國の地、新羅婆娑王の時之れを併す、後悉直州と爲し、景德王に至りて郡とし、今名に改む、高麗成宗の時陟州團練使とし、後縣に降し、復た知郡事に陞せしか、本朝太宗の二年穆祖の外郷たるの故を以て陞して府と爲し、太宗に至り更に都護府に進め、今代に至りしか建陽の改革によりて復た郡と爲し、今に至る。

境域

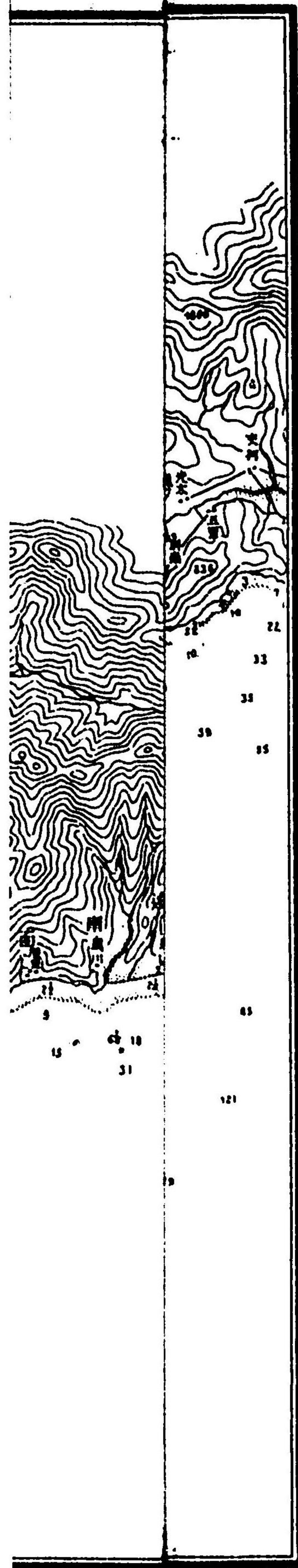
北方江陵郡に、南方蔚珍郡に接し、東方一帯海に面し、東西十一里、南北十四里の廣袤を有す。

地勢

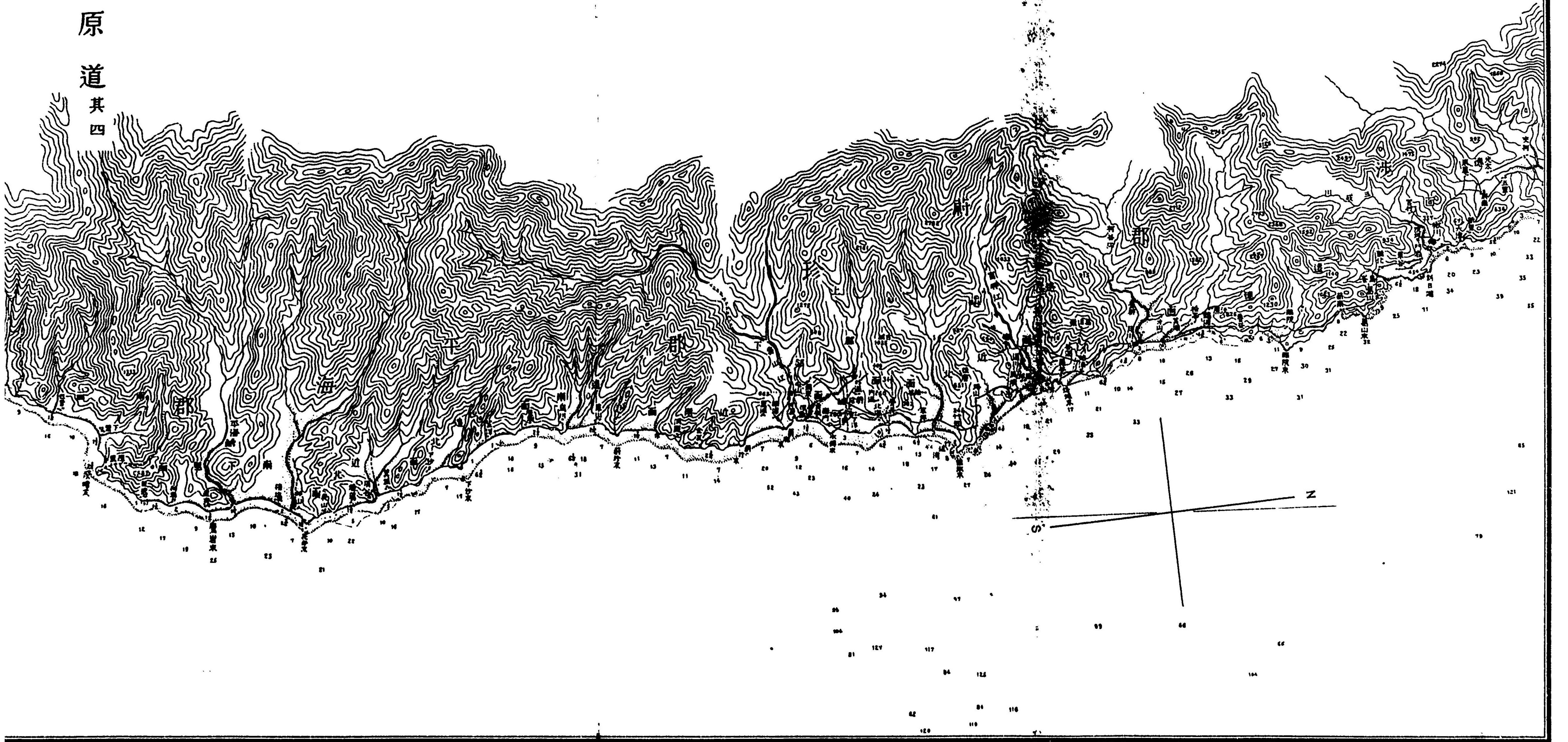
地勢は江陵郡の中部以南と等しく脊梁山脈の逼迫に依り概して高く、山岳重疊して峻險なり、河川は悉く細流にして其流域に平地を形成するもの少なく、又舟楫の便あるものなし、就中稍大なるは郡邑の北方を通過して汀羅津の南方に開口する五十川是れなり。

海岸線

海岸線は延長三十里餘に及ぶと雖も屈曲少なし、沿岸中多少突出せるは飛末、斜日端、葛山末、臨院末にして、就中臨院末稍著し、而して其形勢は斜日端以北は砂濱に



江原道其四



耕地

區劃及臨海面

郡邑

交通

富むと雖も同端以南は概ね險崖地にして波浪岩礁を囓むの間少許の砂濱を見るのみ、港灣に良好なるものあらず、就中稍可なるは莊湖、汀灘津及墨湖の三港とす。郡内山岳重疊して平地少なき故に耕地拓けず、水田は楸川院坪、美湖津附近に少許あるのみ、畑も亦面積大なるものなく、所々緩傾斜地に散在するを見るに止まれば、山林は椎、松、雜草の繁茂するのみにして何等見るべきものあらず。郡内を區劃して十二面とす、其海に沿へるは道下、見朴、府内、近徳、遠徳の五面なり、而して道下は北方江陵郡に屬する望祥面に接し、以下順に並ひて遠徳は蔚珍郡に屬する遠北面に接續す。

郡邑三陟は古名を悉直、陟州、眞珠等と呼ぶ、汀灘津の西方近距離に在り、元と都護府を置かれし處にして江陵大都護府の管轄に屬し、本部南方の郡縣を支配したりき、邑内人家七十、人口約三百、日本商人も亦居住して商業稍盛んなり、郡衙の外に郵便電信取扱所、巡查駐在所等あり。

交通は山岳地なるを以て道路險にして歩行困難を極む、北方江陵邑に至る十二里、南方蔚珍邑に至る十五里とす、又西方旌善邑に至る道路ありと雖も險惡甚たし

通信

交通容易ならず、海路交通は汀灘津に月一往復定期船の寄航あるのみ。通信機關は邑城に唯一あるに止まれども電報を取扱はるを以て幾分か不便を免かる。

物産

物産は農産及水産を主とすれども農産物は寡少なり、水産物は鱈、鱚、鱈、鯛、鮫、比目魚、鱈、大蛸、海鼠、鮑、和布等にして又各河川に鮭、鱈、鮎、其他の淡水魚を産す、觀察道の報告に依れば此等水産物一年の産額平均八千圓内外なりといふ。

場市

場市は邑下、北坪(見朴面に屬す)、交柯(近嶺面に屬す)の三所に在り、開市は邑下二、七▲北坪三、八▲交柯一、六とす、水産物中多く出市せらるるは鱈にして其他は鹽藏の鱚、鮎、鱈等なり。

道下面

北方江陵郡に屬する望祥面に、南方本郡の見朴面に接し、沿岸は砂濱に富めり、而して沿海部落に西浦、下坪、北坪、龍井、松亭等あり。

北坪

北坪(号型)本面沿岸の略は中央に位す、前面は平砂にして地曳に適す、場市ありて本郡北方の一集散地なること前一言したるか如し、漁は鱈を主とし、他の漁業は盛

嶽岩津

嶽岩津唯一あるのみ。北方道下面に、南方府内面に接して沿海區域甚だ狭し、故に其臨海部落としては

嶽岩津(号型)道下面に屬する松亭津の南方一里に在りて一小溪葛川に沿へり、沿岸は直線を爲せる砂濱にして地曳に適す。

府内面

北方見朴面に、南方近徳面に接し、沿岸は砂濱に富めり、故に其臨海に後津、廣津、汀灘、五分津等ありと雖も繫船稍可なるは汀灘津唯一あるのみ。

後津(号型)面の北方に位して見朴面に接近す、沿岸北東に面して岩礁多く砂濱を

後津

見ること少なし、人家二十餘戸、漁は鱈、鯧、刺網、鯊、曳釣等行はる。

廣津

廣津(廣津)後津の南方なる突出地即ち廣津端に在り、此地も亦沿岸岩礁多く地曳の適地なし、漁は大要後津に同じ、此地方大蛸又は蟹を産すること少なからず。

江瀧津

江瀧津(江瀧津)に古目津、又佛來とも稱す、略昔三陟浦と唱へしもの即ち是れなり、本津は五十川の河口に在りて郡邑三陟に至る一里に足らず、五十川は其河口瀉出の土砂に依りて南北二口に分たる、而して其南口は水淺く、且つ時に閉塞することありと雖も、北口は稍水深を有して大抵の漁船出入自在なり、但し北口の前面には岩礁突出せるを以て風浪荒き日に在りては危険を免かれずと雖も、一度河内に入れば如何なる天候にても波濤襲來の虞なく、礎磐甚た安全なり、河口内に於ける水深は約一尋にして潮汐干満の差極めて少なく、底質砂土なり。

外海に沿へる部分は一帯沙濱にして地曳漁場に恰適せり、部落は河の兩岸に跨り人家六十有餘、農を主とすれども漁も亦盛んなり、漁船三隻、地曳網二統、刺網六統を有す、其漁採物の主なるものは鱈、鯊、鯧、鯛、鱒、蟹等にして就中鯧の産多し、蓋し此地は從來鱈の盛漁地として名ある處、而して其漁場は沖合三里、泥底にして水深一百

五分津

三十尋内外の所とし、漁期は十一月より翌年三月迄にして、漁場は沖合十七、八丁、海底砂利水深七十尋内外の所を可とす、本津は人情穏和にして薪水の供給に乏しからず、出漁者の根據地とするに足る。

五分津(五分津)江瀧津の南方に在り、北東に面して沿岸一帯岩礁多く、繫船可ならず、人家三十戸、人口三十有餘、専ら漁業を以て生を營み、漁船四隻、刺網五統を有す、鯧、鯊の漁獲多し。

近徳面

北方府内面に、南方遠徳面に接し、其沿岸は砂濱險崖相半す、海岸線の稍、斗出せるは即ち飛末なり、本面臨海部落に徳山、府南、大津、湫川等あり。

徳山津

徳山津(徳山津)飛末の北側交柯川注口の南岸に位す、而して其海岸砂濱なれども岩礁多し、戸數七十二、人口二百七十八にして農及商を生業とするもの多く、漁も亦盛んなり、漁船四隻、地曳網二統、刺網七統を有し、主要漁採物は鯧、鯊、鯧、和布等なりとす、本津の西方十四、五町許、交柯川の北岸に交柯市あり、其開市は一、六にして本部南

部の一集散地たり。

府南(早津)徳山津の南方に位す、沿岸少許の砂濱あり、然れども岩礁多くして繫船便ならず。●大津(引込)府南の南方に位す、沿岸險崖甚たしく又附近に露岩、暗礁錯落して繫船の便なし、二津共に人家二十戸内外あり、漁は鱈、鱧、蟹等の刺網及鱒曳釣、鰯延縄等行はる。

湫川津(寺村)南方遠徳面に屬する斜日端より西に向つて凹入せる一淺灣の北西隅に位して一溪流湫川注口の北岸に在り、本津以北の沿岸は險崖を爲し岩礁多しと雖も、以南遠徳面に屬する草谷に至る間は砂濱連続して地曳の好漁場なり、漁業は鱈地曳、鱧刺網、鱧流網、鱒曳釣、鰯延縄等行はる。

遠徳面

北方近徳面に、南方蔚珍郡に屬する遠北面に接し、其沿岸には斜日端、葛山末、臨院末等ありて海岸線多少の屈折を爲すと雖も、彎入の著しきものなく、且つ險崖地多し、故に其延長は十二哩餘に及び、臨海部落に院坪、草谷、鳥嶺、粉土、莊湖、葛山、新南、臨院、

飛花、蘆谷、鶴津、芙湖、才山、月川、姑浦等ありと雖も、繫船便なるは莊湖、新南及臨院の三あるのみ。

院坪(瓦山)一溪流湫川を挟みて近徳面に屬する湫川津と相對す、里人農を主とし、又鹽業を營み、漁に従事するものなし。

草谷津(豆牙)斜日端の北側に位して湫川津と南北相望む、本津以北湫川津に至る間は砂濱連続すれども、以南は險崖地多く、隨て岩礁も亦少なからず、人家三十餘戸、漁は鱈地曳を主とし、其他鱧刺網、鱒曳釣等行はれ、又近岸に和布を産す。

鳥峯津(釜石)北方斜日端より海岸線西に折れて一小灣を形成し、灣内更に小許の出入を爲して部落三あり、其北西なるは本津にして、中央なるは粉土、南なるは莊湖なり、本津は東面する砂濱にして、灣口廣く、保障なきを以て繫船便ならずと雖も、地曳網代に恰適せり。

粉土津(釜石)本津位置は前示の如くにして、西南に彎入すること稍、深しと雖も、水淺く、繫船可ならず、鳥峯及本津に於ける漁は鱈地曳を主とし、又鱧、鰯、刺網、鱒曳釣を行ふこと附近各地と一様なり。

莊湖津(장호진)一に長鬱里と稱す、本郡沿海第一の良港たり、故に往時に在りては水軍の鎮營を置かれ、今は日本漁業者の根據地として主要のものに數へらる、港口北東に面し、南面に灣入すること深く、南東高丘を環らして松樹鬱蒼たり、以て航海者の目標と爲すべく、又南西風を保障す、灣内水深六、七尋に達し、大形の漁船を繫ぐに足ると雖も、港口を遮蔽するものなく、且つ巖礁散點するを以て北東風荒む時は巨濤襲來して碇泊の船往々難破の厄に遭遇することなきにあらす、毎年春季に至れば日本潜水器船輻輳して多きは四、五十隻に達することあり、納屋は灣の東西兩岸へ構へらる、此地人家二十三戸にして、其生業は漁を主とし、又農商を兼ね營むものあり、漁船二隻、刺網九統を有す、民情穩和にして、日本出漁者との間甚た親密なり、三陟邑に至る約六里、交通便ならざるを惜む、此地方に於ける主要漁採物は鱈、鱧、鮮和布等なり。

葛山津(갈산진)莊湖の南方葛山端の北側に位す、灣口北に面して開き附近に岩礁多し、故に繫船便ならず、戸數三十二、人口一百五十餘にして、漁船三隻あり。

薪南津(신남진)葛山端の南側に於ける灣入の奥に位す、而して其西方及南方には海

拔一千呎以上一千百四十呎に達する峻峰峙ち、延ひて北東に走るものは葛山末となり、南東に走るものは臨院末となる傾斜甚た急にして、灣は西及南北の各側面渾て險崖を爲し、恰も屏風を以て圍へるか如し、故に東を除き各風共に凌ぐを得べく、殊に西風に安全なり、戸數三十餘、人口一百六十有餘、漁船五隻を有して、漁は鱈地曳、鱧、鮮刺網、鮮曳釣等行はる、鱧、鮮は地曳を以て漁獲すること屢次あり、又近岸和布の著生多きを見る。

臨院津(림원진)薪南の南方臨院末の南側に於ける川入の西北隅に位す、臨院末は本郡沿岸に於て稍著しく突出するか故に本津は北及西風を保障すること、薪南に優ると雖も、沿岸に岩礁多きを缺點とす、然れど少しく岸を離るれば無碍なり、其水深は汽船碇泊に支へなし、灣奥に少許の砂濱あり、地曳を營むに足れり、戸數九十七、人口四百三十餘を算し、漁船六隻、地曳網三統、刺網十一統を有す、本郡沿海第一の大部落にして、又沿海一の盛漁地なり、此地巡查駐在所あり、蔚珍警察署の管轄する所なり、日本商人も亦居住するものあり。

飛火津(비화진)又飛花津とも書す、臨院の南方に位して南北相對す、戸數九、人口三十

餘に過ぎざる一小部落なり、其前面には岩礁散在すれども臨院に至る間は砂濱にして無碍なり、此處を地曳の漁場とす。

蘆谷津(呂弓)飛火津の南方一丘を隔て、相表裏す、南東に面する砂濱なれども屈折少なく且つ岩礁多し、戸數二十六、人口一百二十餘を算し、漁船三隻、刺網三統を有す。

鵝津(オカサ)蘆谷津の南方に接續す、沿岸の状況其他蘆谷津と撰むなし、然れども此地凹入較や深く繋船の便前者に勝れるを見る。

美湖津(早立)散津の南方に位す、北東に面する砂濱にして地曳に適す、然れども前面の南方に暗礁あり、戸數五十四、人口二百六十餘を算し、漁船五隻、地曳網二統、刺網九統を有す。

才山(オヤシ)美湖の南方に接續する一小部落にして戸數七、人口三十餘に過ぎず、里人鹽業に従事して漁を營むものあらず。

月川津(ツクシ)才山の南方に在り一溪流を挟みて南北相對す、前面砂濱にして地曳に適す、此地より才山に至る一帯には鹽田克く開拓せらる、戸數四十餘にして農及

蘆谷津

鵝津

美湖津

才山

月川津

姑浦

鹽業を營み、漁は鱧、地曳其他採藻に止まれり。

姑浦(コト)月川津の南方蔚珍郡界に位す、西方郡界なる砂質嶺二、三八七呎は延びて海に枕み、本浦の背後直ちに九百十五呎の高度を示す、隨て其沿岸は傾斜急にして斷崖を爲す所ありと雖も亦割合に砂濱に富めり、戸數二十一、主として漁を生業とす、漁船八隻、地曳網二統あり、漁採物は鱧、鱒、鯉、鯪、和布等にして就中鱧漁盛なり。

第八節 蔚珍郡

本と高句麗の千珍縣、新羅今名に改めて郡と爲せしか高麗復た縣に降す、本朝これに因りしも建陽の改革に郡と爲し以て今に至れり。

北方三陟郡に、南方平海郡に接し、東方一帶海に面して其廣袤は東西十一里、南北九里に及へり。

地勢は山岳重疊すること三陟郡に比して事ろ甚たしきを見る、故に平地は極め

て乏しく、竹邊龍湫岬の南北兩側及郡邑蔚珍附近に於て少許の緩傾斜地を存するに過ぎざるなり。

河流

河流の稍大なるもの三あり、興富江、邑川、壽山江是れなり。▲興富江は郡の北部を流るるものにして西方鷹峯山に水源し、西面の温井谷を過ぎ、遠北面徳邱洞附近に於て三陟郡より南走し來る一水を合せ、興富場城を繞り、鹽邱津に至りて海に入る。▲邑川は郡邑の南方を流るるものにして源を西面冷水亭附近に發し、可原洞を繞り、南東に流れて九萬洞、旨老洞を過ぎ、貢税に至りて海に入る。▲壽山江は其南方に開口するものにして三川中最も長大なり、源を平海及慶北奉化郡界に發して北走し、濫水山の西麓を繞りて東流に轉し、近南面水營に於て東方より來るものと相合し、守山洞に至りて深江と成り、屯山、細浦の間を貫きて海に入る。

此等諸流は流域長大なるも尙ほ六七里にして短小なるは五里餘に過ぎず、而も地勢に伴ひて河床の勾配甚た急なれば平時水を湛へること少なく、旱天に當りては下流と雖も渴水することあり、然れども夏季降雨連日に涉れば忽ち汎濫すること比年なり、運輸の便なく、灌溉の利も亦少なく、唯た僅に鮮鱒其他淡水魚を産する

海岸線

のみ。

海岸線の延長は二十一哩に亘ると雖も屈曲に富まず、稍著しく突出せるは竹邊の龍湫岬あるのみ、而して沿岸は地勢に伴ひて險峻地多し、然れども其間所々地曳に適する砂濱なきにあらず、其最も名あるは竹邊灣、鹽邱、曲海、黒浦、全反、草山等の各附近とす。

耕地

耕地少なしと雖も就中開拓届けるは遠北面、上下兩郡面及近南面の四面とす、驛土の名あるは遠北面の興富驛土▲近南面守山驛土▲遠南面徳所驛土等なり、里人は之れを呼ぶに大田土の名を以てす、肥料を施すこと少なしと雖も適度の降雨あれば豊作を見る。

森林

森林は往時到處に鬱蒼として甚た豊富なりしも濫伐の結果今や沿岸附近は幾んど全部薪山と化せり、然れども若し夫れ少しく西方山壑の地に踏み到らんか、松檜の類森然として大木を成し、又竹林も葱々として雲の如く、中には頗る巨幹を成すものあり、されど道路崎嶇にして運搬困難なれば利用開けず、空しく深谷中に朽腐するもの少なからず。

第二章 江原道 第八節 蔚珍郡 概勢

郡を區劃して遠北、近北、上郡、下郡、近南、遠南、西面の七面と爲す、而して遠北面は最北に位して三陟郡に屬する遠德面に接し、以下順に並ひて遠南面は南方平海郡に屬する遠北面と交はる、獨り西面は山地に在りて慶尙北道の奉化、英陽二郡と界せり、郡邑蔚珍は竹邊を距る南方二里に位して邑川の北方に在り、人煙稠密、商業稍繁盛の一區にして郡衙の外に警察署、財務署、郵便電信取扱所あり、日本人の居住者少なからず、本年末現在調査に従へば本郡に於ける其居住者三十二戸、七十四人にし、て其多部分は本邑に、一部は竹邊に在住する者なりとす。

交通は道路概ね險惡にして便ならず、北方三陟邑に至る十五里、南方平海邑に至る八里、又平海及慶尙北道に屬する沿岸諸邑及慶州を経て大邱に至る四十九里とす、海路交通は竹邊灣に寄航する定期船の外に臨時汽船あるを以て稍便なり、通信機關は郡に唯た一あるのみ、蔚珍邑より觀察道所在地なる春川邑又は京城に至る郵便到達日數は八日乃至十二、三日を要す、然れども近頃電報を取扱はるるに至りしかは稍不便を免かる。

物産は海産物を主とし、其他漆、藥草、蜂蜜、竹筴(竹邊附近に産す)等とす、米穀は産少なく、釜山

地方より供給を仰けり。

海産物中其産多きは鱈、鱒、鯛、鮓、鱈、鱈、比目魚、鱧、鮑、海鼠等にして之れに次くは蟹、和布、海苔等なり、漁期は慶尙北道の沿海と大差なしと雖も鱒及鮓は多少後るるの氣味あり、一年中に於ける水産物の産額は大約七千圓内外と稱す。

食鹽の産額は一年平均七百七十石、價額二千五百四十圓と稱す、其製產地左の如し。

遠北面	興富洞	近南面	守山洞	屯山洞	細浦洞
上郡面	曲海洞	遠南面	草山洞	德洞	厚理洞

場市は邑下、興富(遠北面に屬す)、梅花里(遠南面に屬す)の三所に在り、其開市は▲邑下毎二の日▲興富毎三の日▲梅花毎一の日とす、三場中盛んなるは邑下及興富二場なり、集散物は夏季に金巾、木綿、麵粉、土器等、秋季に木綿、煙草等多し、每一市に於ける集散高は邑下、興富共に三百圓乃至一千圓にして梅花は一百圓乃至三百圓許なり。

遠北面

北方三陟郡に屬する遠德面に、南方本郡の近北面に接し、其沿海の中央に興富江注く、其開口以北の沿岸は山岳海に枕みて砂濱少なしと雖も、以南は一帯直線を爲せる平砂なり、而して其臨海部落に姑浦、羅谷、石湖、鹽邱、馬墳等あり、但し姑浦は三陟郡界に跨りて其郡と、本郡とに兩屬す、興富江の上游河口より一里半許、德邱洞に温泉あり、皮膚に有效なりとし浴客絶へず。

羅谷洞(叶牙)又羅室とも書す、弓状を爲せる小灣なり、西風を除きて其他の風を避くるに足らず、灣澳は砂濱にして其中央に細流注く、部落は此細流の南岸に在りて人家二十三戸を算す、其大半は漁戸にして漁船四隻、地曳網、刺網各二統あり。

石湖(石)羅谷の南方に位して亦た一小灣を形成す、避風に適せずと雖も地曳の好漁場たり。

鹽邱(子)興富洞の一部にして又た鹽田村とも稱す、興富江口の左岸に在りて其沿岸は直線を爲せる砂濱なり、郡の一鹽業地にして漁は地曳を主とし、鱈、小鮪、鱒、鮮

馬墳

鱈、小鮪等の産あり●馬墳(叶)は其南方に位せる一小部落なり、沿岸の状況及漁採物等鹽邱と同様なり。

近北面

北方遠北面に、南方上郡面に接し、沿岸の中央に龍湫岬突出す、故に其以北は北東に面し、以南は南東に向へり、臨海部落に烽岬、竹邊、草坪、曲海等あり。

烽岬

烽岬(岬)龍湫岬の北側に位して北東に面す、沿岸急斜にして前面に岩礁多し、部落は丘陵に散在して戸數三十五、其殆んど全部は漁に依りて生を營む。

竹邊

竹邊(岬)龍湫岬は高丘を頂きて北西より南東に延び、其南端は稍、西に向ひて其南西側に半月状を爲せる一灣を形成す、竹邊灣即ち是れなり、灣は竹邊岬端より對岸谷長の洞臺岬に至る幅一裡四鍵灣入竹邊岬端附近より北方竹邊部落の沿岸に至る約三百間にして西及北の風浪を避け得るのみならず東風をも稍、凌ぐに足る、然れども此灣入は水淺く岬端附近より北方灣奥に至る間深き處にても尙ほ且つ二尋内外に過ぎされは巨船を容るゝこと能はず、岬端より西方大陸に至る對角線

附近にては水深五、六尋に達して砂底なり、此は汽船の泊地にして西北の風浪を避くるに足ると雖も而も北風強烈なるに至れば繫錨に堪へ難し、灣の沿岸は渾て白砂なり、灣内廣く遠淺にして無碍なれば地曳の好漁場として著名なり。

部落は灣の北岸南面せる緩傾斜地に在り、戸數七十二を算し、其大半は漁を營めり、漁船六隻、地曳網三統を有す、主要漁採物は鱈、鮮鱈、鱈、鯖、鯛、大蛸、蟹等にして一年の産一千五百圓許とす、鱈は日乾して釜山に送り、又は其地の出買商に賣渡す、其他のものは郡邑又は各地に輸送して放賣す。

此地方民情は善良ならず、往時は日本漁夫と争闘したること屢次なりき、然れども今は感情相和し互に親近するに至れり。

此地従來日本潜水器船の重要な根據地として其名知られき、毎年四、五月の頃に至れば其來漁するもの數十隻に及び頗る盛況を極む、近頃島根縣は此處を其漁業根據地に選み、漁民の住舎を建築して年々事業を擴張し、其漁民を移住せしめんと計畫せり。

本灣より陸路蔚珍に至る二里、海路迎日灣の浦項に至る六十五里、三陟郡の汀灘

草坪

谷長

津に至る二十七湮とす、本灣には沿岸航行の定期船寄航するのみならず、龍湫岬以北水源端に至る一百十二湮に互れる長距離の間には適當の寄航地なく、釜山、元山間の航路中著名の艱所に屬するを以て北行の船舶此に風待ちするもの少なからず、又鬱陵島に至るには此地最も近距離にして且つ航海便なれば往來の船多くは寄航せり、郵便物集配は蔚珍郵便局の管轄に屬して此地未だ其機關の設置なし、然れども兩地間の往來頻繁なれば甚しき不便を感せず、

日本水路部刊行朝鮮海水路誌に依れば潮は朔望高潮三時十三分にして大潮升一呎、小潮升半呎、小潮差四分一呎なりとす、其他暗礁警戒區等は同四八九頁參照を要す、

草坪(五里)竹邊の南方十五、六町に在り、沿岸は竹邊より本里を経て南方竹邊灣の南西角洞臺岬に至る間渾て直線を爲せる砂濱なり、故に繫船可ならずと雖も地曳に恰適し、其漁場として著名なり、

谷長(耳長)又滑長と書す、洞臺岬の南側に位して前面は砂濱なり、洞臺岬は小丘を頂きて東方に突出し其前面に巨巖岩礁錯落して北の風浪を保障す、又部落の南方

に方り小突出ありて其前面に岩礁散在し、多少南西風を遮る、故に漁船は其間に碇泊することを得へし、然れども大浪起らば安全ならず、人家三十餘戸、漁は鱧地曳、鱧刺網、鱧曳釣等行はる。

上郡面

北方近北面に、南方下郡面に接し、其沿岸は竹邊灣の南西洞臺岬より緩漫なる灣入を爲し渾て砂濱なり、而して其沿海には曲海、下津の二部落あり。

曲海洞

曲海洞(クハエ)竹邊灣の南角洞臺岬より南方に灣入する一小灣なり、沿岸の水深二尋より七尋に達すと雖も岩礁多く、且つ灣は東に展開するが故に繫船便ならず、人家四十六戸、其多部分は漁を生業とす、漁船三隻、地曳網三統を有し、鱧、鱧、比目魚の漁獲多く、一年の産七、八百圓と稱す。

下洋洞

下洋洞(フヤエ)曲海の南方に位し、上洋洞と一部落を爲す、上下總稱して羊亭洞といふ、上洋洞は邑川に沿ふと雖も海岸に位せるは下洋洞なり、本洞は人家僅に十二戸、農を主とし、漁は振はす、漁船一隻あり、漁獲物は比目魚、大蛸、其他の雜魚とす。

下郡面

竹津

北方上郡面に、南方近南面に接す、其沿岸の中央に稍突出せるは水傳末なり、此尖端より遠南面界に至るの間、緩漫なる灣入を形成して、此に開口する二流あり、北方なるは邑川にして、南方なるは壽山江なり、本面は郡邑の所在面にして、邑は水傳末の西方十五、六町に在り、邑城附近より邑川流域を過ぎ壽山江に至る間は緩傾斜地にして、開拓届けり、然れども海岸は低丘一帯に亘りて傾斜緩ならず、到處礫濱にして、岩礁も亦所々に散在せり、本面にて海に沿へる部落は竹津、縣内、貢税の三里なり、竹津(チヌ)上郡面に屬する下洋洞の南方に在り、沿岸露開にして繫船の便なく、又礫多くして地曳に適せず、人家三十餘戸、農村なり、漁は鱧地曳、鱧刺網等行はると雖も盛んならず。

縣内洞

縣内洞(チヌ)竹津の南方に在り、沿岸多少砂濱を形成すと雖も概勢竹津と相似たり、人家四十戸許にして、亦た農村なり、然れども漁は鱧地曳、鱧刺網等行はれ前者に較へて較や見るへし。

第二章 江原道 第八節 蔚珍郡 近南面 飛來、揮羅、屯山、細浦、黒浦、全反、洞庭
賈稅洞(공서)縣内洞の南方、邑川開口の北方に位す、漁業其他一般の概勢前二洞と大差を見す。

竹津以下本洞に至る沿岸和布其他藻類の著生稍多し。

近南面

北方下郡面に、南方遠南面に接し、其沿岸は砂濱險崖相半す、本面臨海部落に飛來、揮羅、屯山、細浦、黒浦、全反、洞庭等あり。

飛來(비치) 揮羅(기라) 屯山(둔산)共に邑川及壽山江の中間に位し相接近して一部落を爲せり、沿海は邑川、壽山江の二流不斷土砂を運へるを以て水尋一帶に淺し、然れども其沿岸は平砂連續して海底も亦平坦なれば地曳使用に恰適す、揮羅の里名蓋し其實を失はす。

壽山江は潟出の土砂堆積して其口狭く、且つ北東風強吹せは時々閉塞することなきにあらすと雖も入れは稍廣く、水も亦二三尋に達して漁船避泊するに宜し。

細浦(서포) 黒浦(흑포)共に壽山江口の南方に在りて相接近す、沿岸一帯砂濱にし

て屈曲少なく、繫船の便なしと雖も亦地曳の適地なり、戸數二里合せて六十餘、漁船六隻、地曳網四刺網九を有して漁業稍盛んなり。

全反(전반) 黒浦の南方に接續す、海岸砂濱にして其形勢黒浦と大差なし、戸數四十餘、漁船八隻、地曳網六を有す、本浦も亦此地方の一盛漁地なり。

洞庭(동정) 全反の南方に在り、沿岸の形勢は黒浦、全反等と一樣にして繫船便ならず、部落は上下に分れ一は西方に、一は東方海岸に位置す、其海岸に於けるは即ち下洞底なり、戸數は通して五十に足らず、漁船四隻、地曳網三統刺網六統を有す、以上諸部落に於ける漁採物は鱈、鱧、鱈、小鯖、鱈、鯛、蟹、和布等なりとす。

遠南面

北方近南面に、南方平海郡に屬する遠北面に接し、其沿岸には岸礁點々せる場所少なからすと雖も亦砂濱に富み、概して近南面と同様なり、臨海部落に草山、烏川、厚理、徳信、望洋亭等あり、但し望洋亭は郡界に跨りて其一半は平海郡の所管なり。

草山(초산) 近南面に屬する洞庭の南方に在り、沿岸は南の一部に岩礁散在すれど

も北方一帯は砂濱連続して地曳を營むに適地なり、而も南方なる岩礁の間には漁船を繋ぐの餘地あり、部落は上下の二より成る、北方なるは上草山にして農商を主とし、南方なるは下草山にして漁を主とす、戸數通して一百餘、本郡南部に於ける一集散地にして漁も亦盛んなり、漁船二十一隻、地曳網六統、刺網六統を有す。

島川(五刈)草山の南方に在りて其沿岸は砂濱なり、戸數六十餘、漁船七隻、地曳網三統、刺網五統を有して草山に次ける盛漁地たり、而も亦商戸ありて商船の出入するもの少なからず。

厚理(辛刈) 徳信(可刈) 順次島川の南方に並ぶ、共に一小部落にして各戸數二十餘、漁船二隻、地曳網一統を有して僅に鱧地曳を營めり。

望洋亭(可刈)は本郡と平海郡とに分屬する部落にして其中央は即ち郡界線なり、沿岸岩礁錯落すと雖も南下して平海郡の管地に至る里許なれば砂濱なり、戸數通して四十に餘る、漁船四隻、地曳網、刺網各二統あり、漁を生業とするもの多し。

島川

厚理
徳信

望洋亭

第九節 平海郡

本と高勾麗の斤乙於高麗に至りて郡と爲し今名に改む、後ち禮州(今の寧)の屬縣と爲せしも還た郡に復す、本朝これに因りて今に至れり。

地勢は山岳重疊して峻險なること蔚珍郡に異ならず、中央に通する二流あり、源を西方英陽郡界に發し、直下東走して東海に入る、平地寡少なりと雖も蔚珍郡に比して幾分か優れるものあり、而も沿海附近には割合に廣き緩傾斜地存在す。

沿岸の形勢は所々に險崖地少なからずと雖も亦甚た砂濱に富めり、岬角の名あるもの四つ、則ち下沙末(岬の西北に在り高さ三百七十五)花母末(下沙末の南約四里に在る間最も遠く突出せる岬角にして高さ)鷹岩末(花母末の南約)水嶺末(鷹岩末の南約三里に在る樹木なき圓)是れなり、然れども此等は小突出にして港灣を形成するに至らず、故に其海岸線は甚だ單調なり、されは其延長は僅に十三里に過ぎずして境域の狭少なると等しく本道各郡中最も短小なるを見る。

沿岸

地勢

沿岸

臨海及
區劃面

郡邑

物産

場市

第二章 江原道 第九節 平海郡 概勢

郡内區劃八面あり、而して其海に沿へるは遠北、近北、南下里、南面の四面なり、但し遠北面は北方蔚珍郡に屬する遠南面に接し、近北以下順に並ひて南面は慶北寧海郡に屬する北二面と界せり。

郡邑平海は南下面に在りて一溪流の右岸に位置す、附近土地平坦にして其形勢郡治所在地として適地なり、郡衙の外に郵遞所、巡査駐在所あり、北方蔚珍邑に至る八里、南方慶北の寧海に至る四里、道路崎嶇として往來困難なり、而も本郡は未だ汽船の寄航地なし、故に其交通は海陸共に便ならず、通信も亦等しく不便なるを免かれず。

物産は海産を主とし、陸産に富まず、而して其海産は蔚珍郡と同様にして鱈を主とし、小鯖、鯖、鱈、鯨、鰈等も亦重要なものに數へらる、其他食鹽を産するあり、觀察道の報告に従へば本郡海産物一年の産、魚類二千餘圓にして食鹽五百三十六石、價額一千六百餘圓なり。

場市は邑下に唯た一あるのみ、其開市は毎陰曆二七の日とし、一市の集散四五百圓と稱す。

遠北面

北方蔚珍郡に屬する遠南面に、南方本郡の近北面に接し、其沿岸は東北に面して砂濱に富めり、臨海部落は望洋、下沙、箕城の三里なり、望洋里は蔚珍郡に跨り、同郡にては望洋亭と稱す、其概勢は既に敘述せしを以て本郡に在りては之れを省略すへし。

下沙里

下沙里(하사)望洋里の南方二裡餘、即ち下沙末の南側に在り、附近の沿岸は險崖地にして岩礁多しと雖も本里の北方下沙末に至る間は稍、凹入して砂濱を爲せり、人家七十有餘、漁船九隻、地曳網三統、刺網三統を有して本郡中の一盛漁地なり。

箕城里

箕城里(기성)下沙里の南方一裡、一溪流注くものあり、其開口右岸に方りて北に丘陵を環らし、西南に平地を控へ、東面する一部落あり、是れ即ち本里なり、沿岸は砂濱にして屈曲に富ますと雖も前面の北東に方り岩礁横はりて波浪を碎くか故に小船は其間に假泊することを得へし、本里は往昔萬戸在治の地にして城壁今に現存す、是れ箕城の名ある所以なり、人家九十餘、郡中屈指の大都落にして其殷賑なるこ

と邑城と比肩すへし、住民は農を主とすれども漁も亦盛んなり、漁船九隻、地曳網及刺網各三統あり。

漁採物中最も主要なるは鱧にして其他小鯖、鯖、鱈、和布等も亦重要中に數へらる、毎年春季となれば日本潜水器業者の來漁するものあり。

近北面

北方遠北面に、南方南下里面に接し、其沿岸に花母末突出す、花母末は本郡中最も遠く突出せる岬角にして、同時に本道の極東を示すものなり、低丘を頂ける沙角なるも其附近には露岩、暗礁散在するもの少なからず、本面にて海に臨める部落は項谷、燧燧、表山、邱山なり、項谷以下表山に至る三里は花母末の北方に位し、邱山獨り其南方に在り。

項谷里
燧燧里

項谷里(ウツノ) 燧燧里(ヒシヤ) 箕城の南方に相並ぶ、戸數前者は十四、後者は四十餘戸あり、共に沿岸は砂濱にして繫船に便ならず、附近一帯は緩傾斜地にして耕地克く開拓せらる、住民は専ら農事に力め、漁は唯た農家の餘業として鱧地曳を營むに止

表山

邱山

まれり、二者共に鱧地曳網一統を有す。

表山(ヒシヤ) 燧燧里の南方花母末の北側に在り、沿岸砂濱岩礁相半す、人家四十戸内外、其多くは農を主とすれども漁も亦稍、行はる、漁船四隻、地曳網三統、刺網一統を有して鱧、鯖、鱈等の漁獲多し。

邱山(ウツノ) 花母末の南方に方り開口する本郡中主要溪流の北岸に在り、其沿岸は北方花母末より南方南下里面の鷹岩末に至る約二哩の間緩漫なる灣入を形成して一帯砂濱なり、邱山より北方花母末に至る間は前面に暗礁點々せるありと雖も邱山以南は無碍にして地曳の好漁場なり、此地も亦本郡沿海の一大部落にして戸數九十餘を有す、附近平地稍、廣く郡中主要の農業地に屬し、住民は専ら農耕に従事すと雖も漁も亦盛んなり、主要漁採物は鱧、鯖、鱈、鯛、鰯等にして漁期は鱧、鯖、八、九の兩月中 ▲ 鯖、鯖、六、七、八月 ▲ 鯛、四、五月 ▲ 鰯、一、二月の頃なり。

南下里面

北方近北面に、南方南面に接し、其沿岸は鷹岩末より、氷嶺末附近に至る間にして

險崖地多しと雖も砂濱も亦少なからず、而して其海に沿へる部落は猪場直古狗岩、巨逸等なり。

猪場里(チカキ)鷹岩末の北側に位し岩礁の間少許の砂濱を存するのみにして繫船便ならず、十戸未満の小部落にして農業の餘暇鱈地曳を營む。

直古里(チコリ)鷹岩末の南方稍凹入せる砂濱なり、西南には高丘環り、又北方は鷹岩末ありて多少風浪を保障すと雖も東方は全然露開なり、人家三十餘戸、漁を主とするもの少なからず。

狗岩里(イヌイ)直古の南方に接續して北東に面する砂濱なり、人家三十戸許にして本里も又漁を主とするもの多し。

巨逸里(イサキ)狗岩の南方嶺の東麓に在り、嶺は氷嶮末の北方に聳ふる一峰にして海拔七百八十五呎に達し、西側は緩斜なるも東側は急斜なり、故に其沿岸も亦これに伴ひて且つ附近には岩礁多し、然れども此邊は鱈刺網を營むの適地なり、鱈刺網は九月より十一月初旬に涉りて行はる。

上記の各部落に於ける主要漁採物は鱈、鱈、蟹等にして和布も亦其産少なから

南 面

す。

北方南下里面に、南方慶尙北道寧海郡に屬する北二面に接して其沿岸の北端には氷嶮末の突出あり、同岬角以南の海岸線は西方に屈曲して緩なる凹入を成し渾て砂濱なり、而して此間に竝列する部落に厚浦、下栗、也音、地境等あり。

厚理(フリ)氷嶮末の南西側に於ける彎入なり、氷嶮末は丘陵を頂き南東に向つて稍、斗出せるか故に灣は北西風を避くるに足り、又北東風をも凌ぐを得へし、沿岸は砂濱連互して地、曳の好漁場なり、部落は灣の北側にありて戸數七十九、農を主とすれども漁も又盛んなり、漁船十三隻、鱈地曳網三統、鱈地曳二統、各種刺網七統を有す、漁採物及漁期等前掲各地と大差なきを以て省略すへし。

此地より慶尙北道丑山浦に至る陸路四里、道路海岸に通して稍、平坦なり、又例年春季となれば日本漁船の寄航するもの少なからず、部落の北方氷嶮末の北側海岸に清泉湧出す、清澄にして其最多し、船舶の汲水所として甚た便なり。

氷嶮末の北側海岸に清泉湧出す

第二章 江原道 第九節 平海郡 南面 下栗、也音、地境

下栗(하갈) 也音(야음) 地境(지경) 厚理の南方に並ひ、下栗は凹入部の中央に、也音

地境は南方に位す、而して地境は慶尙北道と本道との境上に跨り、本郡と寧海郡とに分属す、戸数は下栗三十餘戸▲也音、下栗と相等しく▲地境二十餘戸とし、漁は各部落とも鱸地曳を主とし、鱒、鯉、刺網、鱒、魚釣等行はれ、稍見るべきものあり。

第三章 慶尙道

三韓の時に在りては辰韓、卞韓の地にして、三國に在りては新羅の地たりき、(三韓は馬韓、辰韓、卞韓即ち是れなり、馬韓最も強大にして辰、卞二韓は其統御する所なり、辰韓は秦韓といふ、其民秦の遺民なるに因れり、三國とは高麗、新羅、百濟即ち是れなり。) 三韓當時の事蹟は逸として知り難しと雖も、辰韓の地は本道東北部にして、卞韓の地は其南西部より全羅道の南端にまで互りしか如し、新羅の始祖は辰韓の故地に起りしなり、(始祖は箕居世といふ、建國は日本崇神天皇四十四年なり、都城は今慶州邑の地にして建國以來歴世遷ることなかりき、其地は又雞林と稱したり、因て以て國號と爲せしことあり、(脱解王)新羅の九年) 國運未だ振はざるとき、卞韓の故地に新羅國興る、新羅國は又た伽倻國又た金官國と稱したり、(始祖は金首露といふ、建國は新羅儒理王十九年、(日本垂仁天皇七十二年)にして新羅建國後九十九年に相當す) 都城は今金海邑の地にして亦た歴世移ることなかりき、其四境は國勢盛んなるときに於て北東伽倻山に至り、東洛東江を限り、北西全羅南道界の智異山に至り、西蟾津江を限り、南大海に及へり、即ち今金海、昌原、咸安、晉州、宜寧、三嘉、丹城、河東、南海、昆陽、泗川、固城、龍南、巨濟、鎮

第三章 慶尙道 概勢

海等の各郡は其領土にして殆んど南道の大半に互りしか如し然れども建國以來三百十三年を経て遂に新羅の爲に併せらる。駕洛國滅ひて全道の地悉く新羅の領有する所と爲れり、新羅は本道に興りて恒久の間本道の地を領せしも建國後九百九十三年を経て遂に高麗の爲に滅さる。高麗全國を統一するや東南道都部署使を今慶州邑に置き以て本道を統轄せしめしか、尋て成宗十四年經理漸く成り境土を分ちて十道を置くや本道の地は即ち嶺東嶺南山南の三道を爲すに至れり、後ち一道と爲して慶尙晋州道と稱し(睿宗の元)又分ちて慶尙道晋陝州道の二とし(明宗の元)に(改)又た合して尙晋安東道と爲し(神宗七年)又た慶尙晋安道に改めき、高宗四十六年蒙古入寇の時、今盈德青松以北平海に至る一帯の地を溟州道に移せしか、後ち復舊し、忠肅王の元年に至り始めて今名を稱したり、本朝これに因り改むることなかりしも建陽の改革に於て南北二道に分ち以て今に至れり。

國の東南端に位し北は江原道に、西は山脈を負ふて忠清、全羅兩道に界す、東は日本海に枕み、南は朝鮮海峡を隔て、日本九州の北端と相對す、東西約四十一里、南北約四十二里、其の面積約千八百八十方里、之れに附屬する島嶼の數二百餘、其面積合

境域及
廣袤

地勢

計約五十八方里なり、分ちて南北兩道となす、蔚山の北なる孝嶺を以て兩道の界とす、北道は東西約三十七里、南北約四十二里、面積一千百三方里、南道は東西四十一里、南北二十五里、其面積七百八十五方里なり。

本道の地は脊梁山脈の變位に當れるを以て山脈縱横して走向一ならざること殊に甚たし、然れども其大體は東北より西南に走れり、但し東岸に在りては脊梁山脈の一支別に海岸を走るものあり、此如くにして地勢北東に隆起し、西南に低下す。

山脈の主要なるものは太白山脈、小白山脈及海岸山脈是れなり、太白山脈は江原道より來りて永川、廣州の間を過き、釜山附近に至るものなり、支脈多しと雖も其主なるは洛東山に起りて東南に走り、星州の北に於て金舞山となり、又馬山浦の發時となり、泗川郡を経て海に入るもの及び龍宮郡、大谷山に起りて比安、仁同を過き、漆谷郡の西山となり、西南に走りて玄風郡の琵琶山となり、遂に海に入るものの二脈とす。

小白山脈は全羅、慶尙の間を南走して兩道の境界をなせるものなり、其本道内に於ける主なる支脈を秋風嶺山脈及び智異山脈とす、前者は金山郡大徳山に起りて

山脈

智禮郡の東方を南下し、後者は秋風嶺の南に起りて南走す。

海岸山脈は全羅、慶尙兩道の南部海岸に沿ひて東西に走る。其主要支脈には全羅南道光州、潭陽の間に起りて東走し、本道に入りて智異山の北を過ぎ道計峴に至るものあり、又全羅南道綾州郡の西部に起りて東走し熊川、金海の間を過ぎて釜山鎮に至るものあり、又靈岩の月出山に起りて樂安を過ぎ本道黃峙に至るものあり、又全羅南道海南郡に起りて光陽を過ぎ泗川の北を経て鎮海に至るものあり。

河流の長大なるものは洛東江一あるのみ、江は本邦五大江の一にして北東江原及忠清北道界に水源す、支流甚だ多し、雖も其大なるは西方より來る龍江(南江又巨令江又ふい)なり、其他琴召川、星州川、琴湖江、草溪川、密陽江等あり、本流と龍江との會合點は靈山邑の南西方なり、密陽江との會合點は密陽邑の南東方即ち三浪津の西北方なり、此の會合點附近は平地及卑濕地の大なるものあり、本江は金海郡に至り、許多の三稜洲を作りて數派に分れ多大海の西方に於て海に入る、其全長は七十餘里と稱す、三浪津附近まては潮汐干満の影響あり、所々流砂堆積すと雖も小舟なれば數十里の上流まて溯上することを得へし、河口より龜浦附近に至る間は鰻及鰻の産多

河流

し、又各支流共に鮎、鱈、鯉等を産し、殊に密陽鮎は身長大にして、味ひ美、其地の名産として知らるる所なり。

其他東方日本海に注ぐものに寧海邑の北方を通ずる寧海江▲盈徳邑の南方を流るる江口江▲迎日灣に開口する兄弟江▲蔚山灣奥に注ぐ大和川▲蔚山灣の南方西生に開口する西生江▲東萊邑の西方を流れ水營灣に開口する水營江等あり、雖も孰れも一溪流に過ぎず、蓋し東側の斜面は江原道嶺東の地と等しく分水嶺海岸に迫れるを以てなり、然れども各川共に河口より一里内外の間は潮汐の影響ありて小舟常に上下することを得へきなり、各川みな鰻、鮎、鱈を産し、又河口には牡蠣を産す、就中大和川には鮭、鱒、稍多く、水營江の下流にては又た多少白魚を産す、耕地面積は未だ統計の正確なるものあらずと雖も諸種の方法に依りて調査せられたるものを見るに、其民有地のみにては實に左の如きものあり。

耕地

民有地

南道	畚	田	計
	(水田)	(畑)	
	六六九二二五二 <small>畝</small>	三五二八二七六 <small>畝</small>	一〇二一九五二七 <small>畝</small>

北道	七〇、七九〇、九八	五七、五三〇、六六四	一、二七、七〇九、六六二
計	二、七〇、九〇三、四九	九二、八二二、九四〇	三、九、九〇三、二八九

試に前表を日本の反別に換算すれば左の如し。

南道	二五、九五七、一九	七〇、八四六、七八	一、八六、八〇三、九七
北道	二二、六二〇、三七	一一、五五二、五三	三、七二、四二、九〇
合計	三、七、五七七、五六	一、八六、三六八、三二	四、三、九四、五、八七

更に官有地即ち度支部所管地の地積を見るに左の如し。

南道	二、五六八、九七	四、七七〇、九七	七、三三九、九四
北道	四、二五五、九五	七、九三三、九三	一二、二五九、八七

計	六、八二四、九二	一二、七〇四、八九	一、九四九、八一
---	----------	-----------	----------

是れに依つて見れば本道の總耕地地積概數は水田二十四萬四千四百〇二町四反八畝畑十九萬九千〇四十三町二反にして計四十四萬三千四百四十五町六反八畝なり。

本道の地は此の如く耕地に富みて地味も亦良好なるに鐵道又は河流通して運輸交通共に便を有すること諸道に冠たり、されは日本人の居住者多數なると同時に其農事を經營するものも亦少なからず、龜浦、三浪津附近の如き、馬山鐵道に沿へる進永附近の如き、大邱、密陽附近の如き、金海又は昌原附近の如き、其他各停車場附近の如き、其自營者の茅屋各地に點々散在して宛然日本の農村を見るか如きものあり、其經營者員數、所有地積投資金額等は之れを統監府第三次統計年表に就て見るに左の如きものあり。

第三章 慶尚道 概勢

理事應別	經營者員數	所有地面積(町)		投資金額	生産額
		既墾地	未墾地		
計	二八二	八〇〇九〇	四二四四二	一三三三三	二八三三二
大邱	四六	七〇七八	五三一	七六〇九	二七六五三
馬山	一九	八二二三	三〇五	八四一七	三二二六九
釜山	二七	六四九〇〇	四一六〇六	一〇六五〇六	三二四四九九

又前表を投資金額の多寡に依りて區別せるものあり、左の如し。

理事應別	投資額十萬圓以上		同五萬圓以上		同一萬圓以上		同五千圓以上		同五千圓以下	
	營業者	投資額	營業者	投資額	營業者	投資額	營業者	投資額	營業者	投資額
計	六二九八九〇	八	六二九八九〇	四七〇六五〇	二五	六三三、五〇〇	三三	三三三、八九九	二二	三三三、八九九
大邱	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
馬山	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
釜山	六二九八九〇	六	六二九八九〇	四七〇六五〇	一九	四八三、七六八	三三	三三三、八九九	二二	三三三、八九九

又是等經營者か土地を購入したる平均値段を見るに大凡左の如きものあり。

地方	上田(一反歩ニ付)		中田(同上)		下田(同上)		平均
	山	馬	山	馬	山	馬	
釜山	密陽	一〇〇、〇〇〇	七五、〇〇〇	四〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	七五、〇〇〇
金海	三浪	六〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	三九、〇〇〇
蔚山	蔚山	一〇〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	五八、〇〇〇
泗川郡	昌原府大田面 村井農場 (元鎮海郡)	七〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	四一、〇〇〇
龍南郡	昌原府	六八、〇〇〇	四〇、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	四一、〇〇〇
固城郡	固城郡	一三〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	七三、〇〇〇
山	山	四〇、〇〇〇	二五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二五、〇〇〇

第三章 慶尚道 概勢

陶藏浦、多太浦、竹林浦あり、固城半島の西側に東島灣、固城澳あり、其西方に子郊灣あり、南海島に彌助灣、木島灣、鷲江灣あり。

更に小船寄泊に適するものを列擧すれば、東岸に丑山浦(寧海郡)、江口(盈徳郡)、島項、汝南、湖浦(以上興海郡)、九龍浦、牟浦、甘浦(以上長豊郡)、田下浦、日山津、方魚津、長生浦、内海、細竹浦、達浦、西生、毛湖浦、太邊、龍湖等あり、南岸に甘來、多太海(以上東萊郡)、柳洞、玉浦、長承浦、知世浦、舊助羅、多太浦、竹林浦(以上巨濟、統營、欲知島、南郡)、三千浦(泗川郡)等あり、其他鎮海灣内に至りては到處として小船寄泊に適せざるはなく、茲に枚擧するの煩に耐へず。

氣温は北部に比すれば常に高く、全羅、忠清二道と共に國中最温の地と稱せらる、而して内地は海岸を距るに従ひ寒暑共に烈し、即ち一年間の平均氣温は釜山にありては十三度五分、大邱にありては十二度五分なり、極寒時は一月若くは二月にして釜山にありては二月平均一度九分、大邱にありては一月平均零度一分、酷暑は八月にして釜山にありては平均二十八度一分、大邱にありては三十一度七分なり、之れを日本に比較するに釜山に於ける冬季は大阪若くは名古屋に類似すれども、夏季は稍、冷涼なり、蓋し日中は炎暑甚しと雖も、日没より著しく涼氣を催す、特に沿岸

地方にありては冬季は暖流の影響を受けて大に氣温を高め、夏季は軟風來りて炎熱を和らく。

雨は沿岸地方にありては甚た多く、内地に入るに従ひ大に減少す、即ち一年の降水量釜山にありては千四百六十一耗、大邱にありては八百四十一耗なり、釜山の降水量は本邦第一の多雨地方なる元山の千六百二十二耗五に次ぐ、之れを日本第一の寡雨地方なる瀬戸内海及東山道の太平洋に面する地方に比すれば稍、相似たり、即ち本道沿岸は日本に比すれば尙は寡雨地方に屬するものなるを知る、毎年四月より八月までは雨最も多く、所謂雨期にして霖雨數日に互り河川氾濫し、海水黄色に變ずるを常とす、此時恰も鎮海灣附近の鱈漁期に相當するを以て往々漁獲物を乾燥すること能はずして空しく腐爛せしむることあり、而して冬季は降水量最も少なし、即ち釜山に於ける七月の降水量二百九十四耗、降雨日數十三日、十一月の降水量十四耗、降雨日數三日、大邱に於ける八月の降水量百九十三耗、降雨日數十六日、十一月の降水量零耗、降雨日數二日を各雨期及乾燥期の極度とす、但し茲に所謂降水量は少量なから雪をも算入せり。

第三章 慶尚道 概勢

雪は沿海地方にありては甚た少なく地上に堆積すること稀なり、釜山にありては初雪十二月下旬、終雪三月中、大邱にありては初雪十一月下旬、終雪三月中旬なるを例とす。

霜は雪に比すれば稍多く釜山にありては初霜十一月中旬、終霜三月中旬、大邱にありては初霜十一月初旬、終霜四月初旬なり。

霧は沿岸地方に於て見るのみ、内地にありては殆んど全く之れを生せず、沿岸地方にありては頗る多く、五月より七月までの間最も甚しく時に冬季中にも發生を見る、甚しきときは數日の間迷濛咫尺を辨せざることあり、航海頗る危険なり、而して東岸は南岸に比すれば稍少なし。

風向は東岸と南岸とにより多少の差異あり、雖も對馬海峽にありては一月は偏北西風流行し、時に偏北東風あり、二月は偏北西風専ら流行し、三月は無風多く、時に偏西風及偏北東風あり、四月より六月までは偏北風及偏北東風流行し、時々南西風及無風を交ふ、北東風は強吹することあれども南西風は穏和にして晴天を伴ふ、七月より九月までは風變り易し、然れども海峽内にては偏北西風流行し、沿岸に近

つけは其力微弱となり且つ屢無風となる、時々烈しき雷鳴暴風雨あり、又た時に偏南風強吹することあり、十月より十二月までは疾強なる偏北風流行して時に颶風となる。

暴風は沿海地方に於てのみ之れを見る、内地に入れば甚た稀なり、即ち一年間の暴風日數釜山にありては百三十五日、大邱にありては僅に六日に過ぎず、而して冬季最も多し。

左に釜山及大邱測候所創立以來一昨隆熙元年に至る氣象觀測成績の平均及極度を表示せん。

平均氣壓	觀測地名及種別												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
大邱	七六八	七六七	七六五	七六五	七六三	七五八	七五四	七五九	七六〇	七六三	七六五	七六八	七六二
釜山	七六六	七六五	七六五	七六〇	七六二	七六四	七六〇	七五九	七六〇	七六四	七六六	七六四	七六二
平均最	六三	四九	二七	一八〇	二四五	二八五	二八八	三三七	二七六	三三三	二三三	八四	一八八
高氣溫	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

暴風日數	霧日數		雨雪日數		平均溫度		平均溫度		低平均氣溫	
	釜山	大邱	釜山	大邱	釜山	大邱	釜山	大邱	釜山	大邱
一六〇	〇	〇	七	六	九	四	三	〇	〇	(一) 四七
一八〇	〇	〇	五	三	二	二	一	〇	〇	(一) 四九
一四五	〇	〇	一〇	一〇	五	二	七	五	三	〇
一〇〇	〇	〇	一〇	一〇	三	二	二	二	七	七〇
一〇〇	〇	〇	九	二	一	七	一	一	一	一一
五七	〇	〇	二	一	三	〇	六	二	一	一七
九〇	〇	〇	三	一	四	〇	八	三	三	二〇
五七	〇	〇	一	〇	一	〇	八	七	二	三三
九五	〇	〇	〇	〇	七	〇	七	六	二	一八
七七	〇	〇	九	七	七	三	六	六	一	二八
一一五	〇	〇	三	二	二	〇	九	八	六	五
一八三	〇	〇	五	四	三	六	四	九	〇	(一) 四〇
一三五	〇	〇	一〇	一〇	一	〇	一	一	〇	七

潮汐

風速度、降水量、湿度の極度

地名	最大風速度		最大雨量		最大蒸發量		最小湿度	
	速度	方向	量	起日	量	起日	度	起日
釜山	四八二	東	二八五	三〇七	一三七	三七九	九	四〇二
大邱	一五三	南	六六三	四〇七	八七	四一六	一九	四〇二

最近刊行の海圖に據りて各地に於ける潮汐の時刻及昇降の状態を表示せは左の如し。

地名	朔望高潮	大潮	升小潮	升小潮差
釜山	八時一七分	四時四呎	三呎	一呎
蔚山	七時三十分	二時四呎	二呎	一呎
迎日	四時一五分	三時四呎	二呎	一呎
丑山	三時二九分	三時四呎	二呎	一呎

馬山	八時四三分	七 ¹ / ₁₀ 呎	四 ¹ / ₁₀ 呎	二呎
釜山	八時四三分	七 ¹ / ₁₀ 呎	二呎	

道路は近來改修成りて幅員廣く、車馬の往來自在なるもの少なからず、其主要なるものは釜山より釜山鎮、龜浦、三浪津、密陽、清道、慶山等を経て大邱に至るもの▲大邱より東方河陽、永川を経て慶州に至るもの(此間通し)▲慶州より迎日灣の浦項に出、興海、清河、盈德、寧海の諸道を経て江原道の海岸道路に連絡するもの▲又大邱より北東軍威、義城、安東、禮山、榮川、奉化、青松、眞寶、英陽等の諸邑に至るもの▲金泉より北東尙州、洛東、咸昌、開慶、龍宮、禮泉の諸邑に至り禮泉より安東邑に連絡するもの▲馬山より北方靈山、昌寧等に至るもの▲晋州より北西三嘉、陝川、草溪、居昌に至り更に居昌邑より北東知禮邑を経て金泉邑に連絡するもの▲居昌より南西安義、咸陽を経て全羅道の南原に通ずるもの▲又晋州より西方河東邑を経て全羅南道の南岸各邑に通ずるもの等是れなり。

鐵道は釜山より大邱、金泉等を経て京城に達する所謂京釜鐵道を幹線とし、三浪

交通
道路

鐵道

海運

通信

津より馬山に達する支線あり、本道産出の物産及外國の輸入品等多くは之れによつて集散し、貿易交通の便少なからず。

海運は釜山を中心として沿岸各地及び諸島嶼間を航行する幾多の汽船あり、多くは日本より回航するものなれども近年沿岸地方に於ける日本人の發展に伴ひ本邦在留日本人の回漕に従事するもの漸く増加するに至れり。

郡衙所在地、開港場其他主要の地には大概郵便局、郵便電信取扱所等あり、特に釜山、馬山及大邱の郵便局にては電話交換事務をも取扱ふ、今此等通信機關の所在及取扱事務等を表示せば左の如し。

道	郵便局	郵便電信取扱所	電報取扱所	郵便所	郵便所
南	釜山 <small>(郵、電、分)</small> 室 <small>(電、郵)</small> 馬山 <small>(交、郵、電)</small>	釜山本町 <small>(配、無集)</small> 蔚山 <small>(話、電)</small> 密陽 <small>(電、郵)</small> 河	草梁 龜浦 三浪津	統營 <small>(電、郵)</small> 馬山巡邏船 内 <small>(無集)</small> 松眞 <small>(電、郵)</small> 龜	機張、梁山、彦陽 泗川、宜寧、草溪 昆陽、丹城、山清

北	慶州(國、郵、電)	大邱(交、話、電)	尙州(國、郵、電)	慈仁、永川(電、郵)	星州、軍威(話、電、郵)	義城(話、電、郵)	清道	若木、大邱本町(集、郵、電、話、無)	漆谷、仁同、開寧
道	晉州(話、電、郵)	東(話、電、郵)、巨濟、陝	川、三嘉(電、郵)、南	海、固城、咸陽(電、郵)	「諺」居昌(話、電、郵)	靈山	釜山	釜山鎮(話、電、郵)、昌原(電、郵、舊馬山浦(配、電、話、無集))	安義、昌寧、咸安
		密陽	馬山	進永	釜山		釜山鎮(話、電、郵)、昌原(電、郵、舊馬山浦(配、電、話、無集))		
							永、絕影島(話、電、郵)、草梁(話、電、郵、樹陵島(電、三、千浦(話、電、郵、鎮海(電、釜山寶水町(電、無集配)、勿禁、下端、馬川、釜山巡邏船内(無集配))		

道	安東(話、國、電)	善山、清道、開慶	大邱	知禮、咸昌、龍宮、豐基、順興、奉化、禮安、英陽、眞寶、長鬚、清河、寧海、興海
		醴泉、榮川(電、郵)	慶山	
		青松(電、郵)、盈德(電、郵)、金泉(電、郵)		
		浦項(電、郵)		

本道は全羅道と共に人口最も稠密にして住民は北部に比すれば温和質朴なれども稍、怠惰放縱の風あり、農業を主とし其他の職業に従事するもの少なし、沿岸地方にありては漁業に従事するものあるは勿論なりと雖も是れ亦た多くは農業を兼ね、戸口は之れを今隆熙三年十二月内部警務局の調査に見れば南道二十一萬七千一百九十八戸、九十七萬二千五百四十七人、北道三十萬五千一百八十九戸、一百三十一萬二千七百五十八人にして通計五十二萬二千三百八十八戸、二百二十八萬四千三百〇五人なり、此外日本人の居住者同年末現在約四萬三千三百餘人あり、其多數は釜山及馬山、大邱等の居住者に係ると雖も本道の地到處として其居住者を見

				山									
奉	順	豐	榮	同	同	同	同	同	同	同	同	長	同
化	興	基	川	其	觀	牟	良	長	牟	九	龍	醫	其
他	興	基	川	他	星	浦	浦	醫	浦	浦	浦	屏	他
七	八	八	六										五
六	八	〇	五										
六	二	九	七										
三	〇	九	六										二

第三章 慶尚道 概勢

さるはなく殊に近時漁業の發達に伴ひて沿岸の各地に其漁民邦人と雜居し、日夕相携へて其業に従事せるもの甚だ多きを致せり、其沿岸各地に居住せるものを概算するに釜山及馬山の如き集團地を除きて大凡七千人に達するならん、今隆熙三年末現在日本人の定住地及其戸口數左の如し。

日本人居住地及其戸口 (一) 慶尙北道 (表中數ヲ記入セサルハ日本人ノ居住者アレトモ其數未詳ナルモノニ係ル)

釜					理事廳別	地名	戸數	男	女	計
迎	興	清	同	盈	寧	海				
日	海	河	其	德	海	郡				
浦	郡	郡	他	郡	郡	項				
三〇	二五	二五	三	三						
	八	六	四	二						
	三	九	三	三						
一〇	一〇	二五	七	二						

邱

漆同大慶慈慶永河新義仁金金山軍
 解邱郡東大
 谷面邱山仁州川陽寧興洞泉山威

一〇 一五 一三五 五八 二二 七三 三八 九 六 七 四 一九 六 八
 二 三 二七五 九六 二四 二四 五七 一六 七 八 八 三五三 九 三
 三 一八 二二四八 七六 二〇 九二 五四 一四 九 四 二 二九九 一〇 二
 二四 五〇 四八六三 一七三 四四 二〇五 一一 三〇 一六 一一 一〇 六四八 一九 二二

大

善開義比尙青新安龍英禮禮開咸
 山寧城安州松寶東宮陽安泉慶昌

二五 一九 七 三 八七 八 四 四九 四 八 三 一七 一六 二〇
 四 二七 二 三 二八 二五 四 七 六 八 六 二〇 二〇 三〇
 二六 一八 四 五 二二 三 五 七 二 五 四 一五 一五 一四
 六七 四五 三三 八 三三 二八 九 一五六 八 三三 二〇 三五 三五 四四

山													
同德山	同熊川	昌原府	同其	同三	同密	密陽郡	金海郡	鬱島郡	梁山郡	同其	同龜浦	同平林浦	同下端浦
七	四九	四〇	三六	三三	三二	七	三四	七〇	三	三	三	三	三
一九	二八	八三				一九	四〇	二八					
二	六四	四九				二	三八	七七					
三〇	二二	三三	三〇	三〇	五六	三〇	六八	三五		二七			四四

釜													
同多太浦	同絕影島	同釜山	同瀨州	同古館	同草梁	同釜鎮	同龍塘	同龍湖	東萊郡	同其	同太邊浦	同月浦	機張郡
三	四五	三〇	二九	一九	五〇	三五	四	七	六		一六	三	
			九三	四七	二六	三九							
			七〇	三三	九七	二四							
一一	二八	一六	一四	七〇	二四	五八	一四	三三	三〇				

山

同	同	同	龍	同	同	同	固	同	同	同	同	同	同
自	南	水	南	其	南	華	城	漆	菱	塔	大	長	河
富			郡		荷	陽	郡	川		浦	谷		
浪			統		面	面	固	島	浦	洞	洞	串	清
津	浦	浦	營	他			城						
(欲知島)													

三	八	三	二二		二五	六	四二	三			八		
	一六	一八	二六		四二	九	七〇		八	三	二七		二
	一四	二	五〇		三六	五	五四				一四		二
九	三〇	二〇	七六		七	一四	二四		八	四	一四	二	四

馬

同	同	同	同	同	同	同	巨	同	同	同	同	同	昌
竹	舊	榮	知	外	長	松	濟	其	鎮	釜	栗	馬	原
林	助		世	叱	承	真	郡				九		府
浦	羅	浦	浦	浦	浦	浦	巨	他	海	島	味	山	大
							濟						山
													面

	四		八	二五	五七	三	八		三		一五	二二	三
				四〇		六五	二		二八			二六〇	六三
				二五		三九	九		二〇			一九六	四六
	〇		二九	六五	三六	一〇	二〇		四八		四九	四三二	一〇八